

ORIGAMI

TANTEIDAN

折紙探偵団

M A G A Z I N E

クローズアップ Close-up

定価 **635円**
(本体605円)

折紙作家の創作現場 エリック・ジョワゼル氏の アトリエ訪問

A Workroom of an Origami Designer:
From the Atelier of Eric Joisel

報告:佐藤直幹

Reporter: Sato Naomiki

折り図 Diagrams

パンダ 宮島 登

Panda

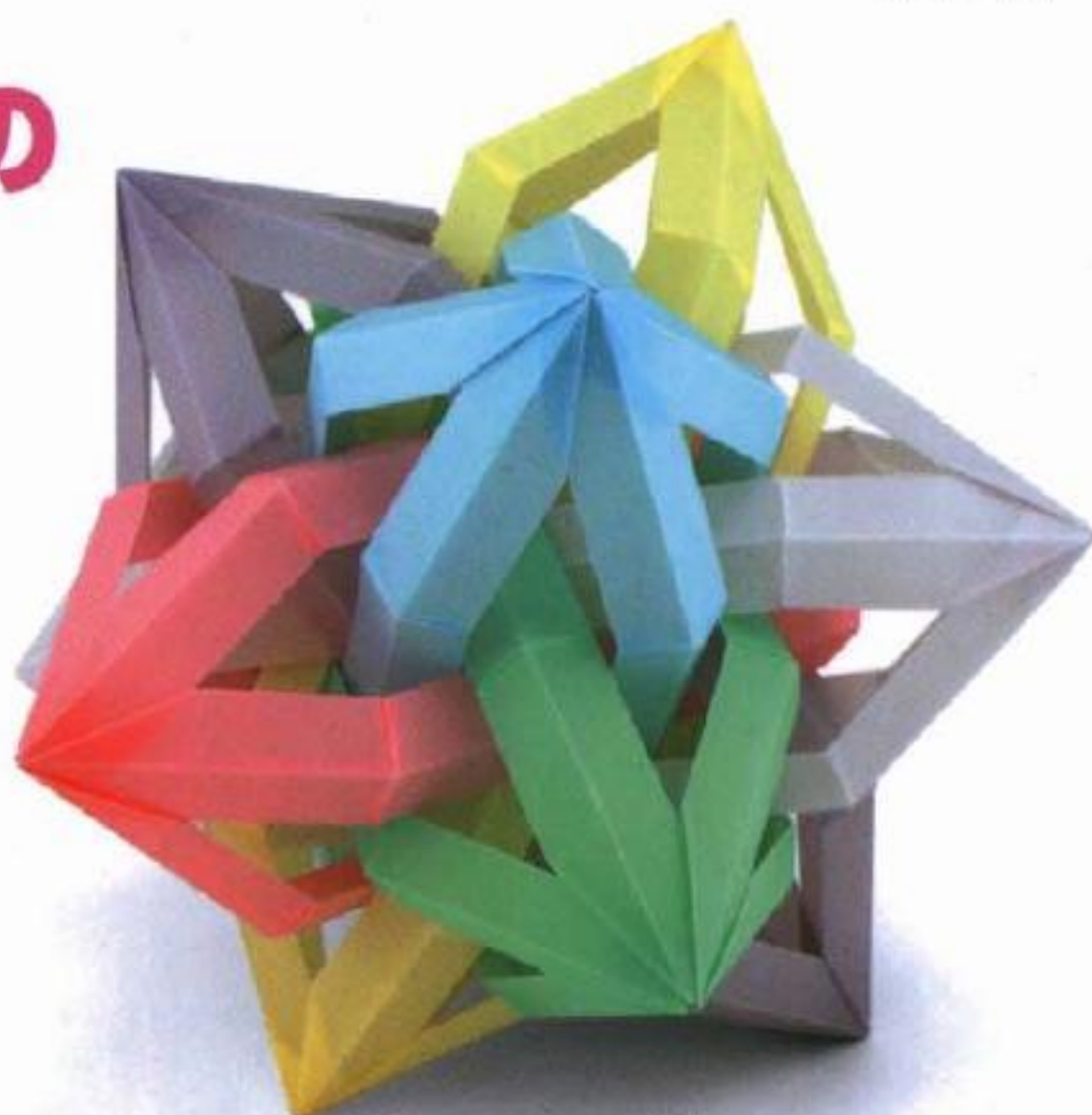
Miyajima Noboru

ネズミー15°

15°- Based Mouse

西川誠司

Nishikawa Seiji



展開図折りに挑戦! Crease Pattern Challenge!

ニジイロクワガタII

Phalacrognathus muelleri II

シッポ・マボナ

Sipho Mabona

新連載 New Series

Kawachoのフレキシブル・ユニット

Kawacho's Modular Inventions Modulo Infinity

水晶星 Crystal Star

川島英明 Kawashima Hideaki



通巻 **106** 号

日本折紙学会 (JOAS) の理念

The Purpose of Japan Origami Academic Society

第一章 名称と目的

第一条 会の名称

1. 本会の名称は日本折紙学会とする。
2. 本会の英語での名称は、Japan Origami Academic Societyとする。
3. 本会の略称は、JOASとする。

第二条 会の目的

1. 本会は、折り紙の専門研究と折り紙の普及の促進、ならびに、それらを通しての広く国内、外の折り紙愛好家との交流の促進を目的とする。
2. 第一項の折り紙の専門研究とは、折り紙の創作、折り紙の創作技術の研究、折り紙に関する批評・評論、数学研究、教育研究、歴史・書誌研究、知的財産権等の研究、工学・商業デザインの研究等を意味する。
3. 第一項の折り紙の普及とは、折り紙の社会的認知度の向上活動、折り紙愛好者層の拡大活動、折り紙に関する人材の育成と発掘等を意味する。

規約第1章より抜粋

Chapter 1: Name and Purpose

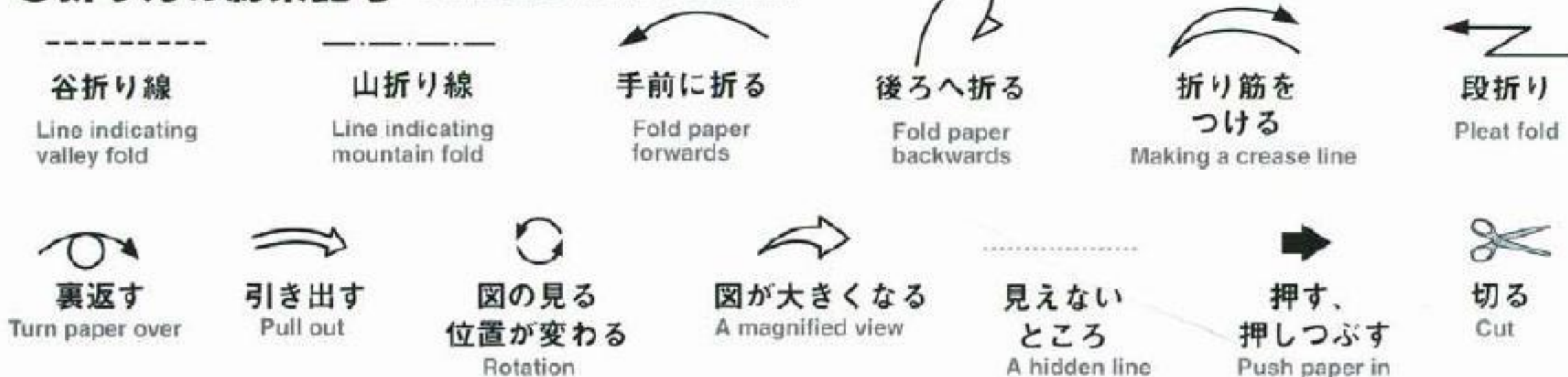
Article 1: Name

1. This society is to be called Nihon Origami Gakkai in Japanese.
2. This society is to be called Japan Origami Academic Society in English.
3. The abbreviated name of this society is JOAS.

Article 2: Purpose

1. The purpose of JOAS is to promote studies of origami, diffusion of origami, and both domestic and international association of all origami-lovers.
2. The studies of origami mentioned above includes designing, designing techniques, criticism, mathematical studies, educational studies, history, bibliography, studies of the intellectual property rights, studies of industrial and commercial design, and so on.
3. The diffusion of origami mentioned above includes widening appreciation of origami, expansion of the community of origami-lovers, scouting and rearing the origami talent, and so on.

●折り方の約束記号 SYMBOLS FOR FOLDING



表紙解説

水晶星

作:川島英明 (P.4)

Crystal Star

by Kawashima Hideaki (P.4)

■細い支柱がどの隙間を通してゆくのか、複雑な面構成の絡み合いを辿って見ているうちに、迷路に迷い込んだような不思議な感覚に襲われます。部品が集まる頂点部分をしっかり正確に折り、鋭い切れ味を持たせるようにして、完成度を高めて引き締まったイメージにしてみましょう。

(解説:北條高史) Comments : Hojyo Takashi

ORIGAMI TANTEIDAN
折紙探偵団
 MAGAZINE
 CONTENTS

No. **106**



Crystal Star : Kawashima Hideaki

クローズアップ／Close-up

P.11 **折紙作家の創作現場**
エリック・ジョワゼル氏の
アトリエ訪問

A Workroom of an Origami Designer :
 From the Atelier of Eric Joisel

佐藤直幹
 Sato Naomiki

折り図／Diagrams and Crease Pattern

P.22 **パンダ**

Panda
 宮島 登
 Miyajima Noboru



P.29 **ネズミ ー15°**

15° -Based Mouse
 西川誠司
 Nishikawa Seiji

P.34 **展開図折りに挑戦!**
 Crease Pattern Challenge!

ニジイロクワガタII

Phalacrognathus muelleri II
 シッポ・マボナ Sipho Mabona

カラーページ／Color

P.20 **オリガミ・フォトギャラリー**
 Origami Photo Gallery

解説・北條高史
 Comments : Hojyo Takashi

折り図／Thematic Series with Diagrams

P.4 **kawachoのフレキシブル・ユニット**
 kawacho's Modular Inventions Modulo Infinity

水晶星
 Crystal Star

川島英明
 Kawashima Hideaki

P.8 **おりがみ我楽多市**
 Origami Odds and Ends

タナカネズミ'
 Tanaka Nezumi'

やまぐち真
 Yamaguchi Makoto

読み物／Articles

P.14 **過去の折り紙に学ぶ**
 Learning from the Paperfolding of the Past
 イギリスにおける折り紙の歴史 第1部
 The History of Paperfolding in Great Britain

デビッド・リスター
 David Lister

翻訳：羽鳥公士郎
 Translator : Hatori Koshiro

P.18 **折紙図書館の本棚から**
 From the Bookshelves of the JOAS Library
 「折り紙読本 外国篇」
 "Paper Magic"

小松英夫
 Komatsu Hideo

P.18 **折紙散歩右往左往**
 Origami-Sampo to Unexpected Directions
 陸奥の安達の原の駅前に折鶴あると聞くはまことか
 Paper Cranes in Fukushima Prefecture

前川 淳
 Maekawa Jun

P.35 **ペーパーフォルダーの横顔**
 Paper Folders on File

ヤネッケ & ピーター・ウェリング
 Janneke Wielinga-Dolfien and Pieter Wielinga

取材：神谷哲史
 Kamiya Satoshi

コラム／Columns

P.7 **折り紙の周辺**
 Origami and Its Neighbors

布施知子
 Fuse Tomoko

P.32 **おりすじ**
 Orisuzi ("Fold-Creases")

櫻木幸子
 Sakuragi Sachiko

P.33 **折紙三昧**
 Origami-Zanmai (This Origami and That)

西川誠司
 Nishikawa Seiji

情報／Information

P.38 **つまみおり** Rabbit Ear

BOS40周年記念コンベンションレポート
 The 40th Anniversary BOS Convention Report

kawachoo's フレキシブル★ユニット

kawachoo's Modular Inventions Modulo Infinity

川島英明 Kawashima Hideaki

第1回 水晶星 Crystal Star

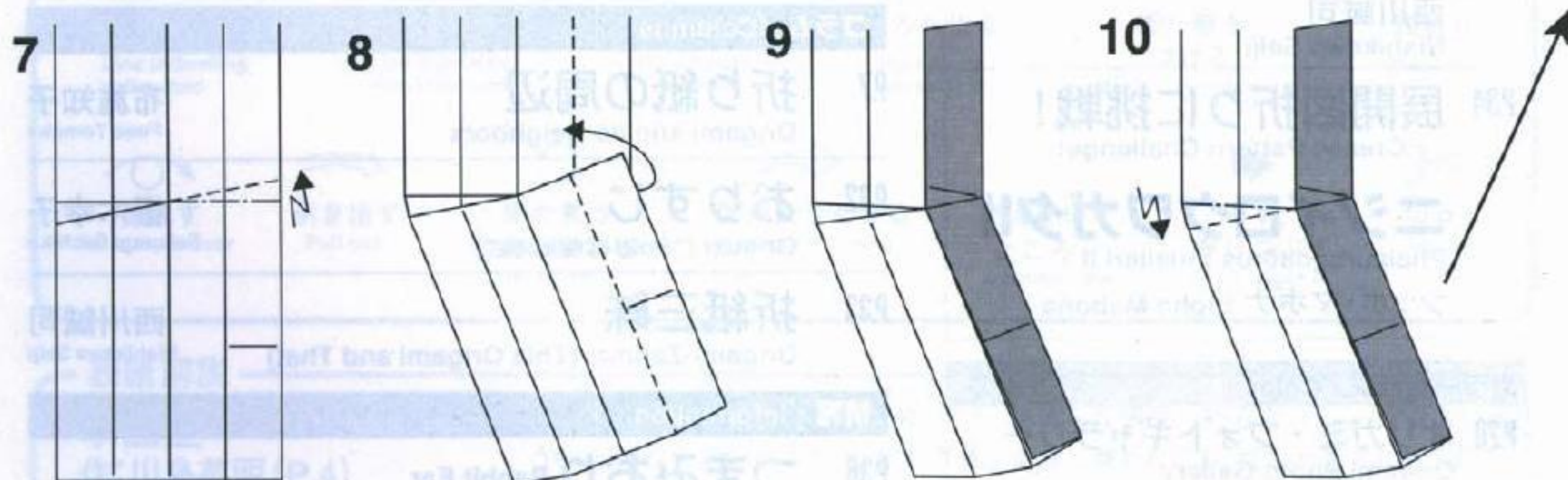
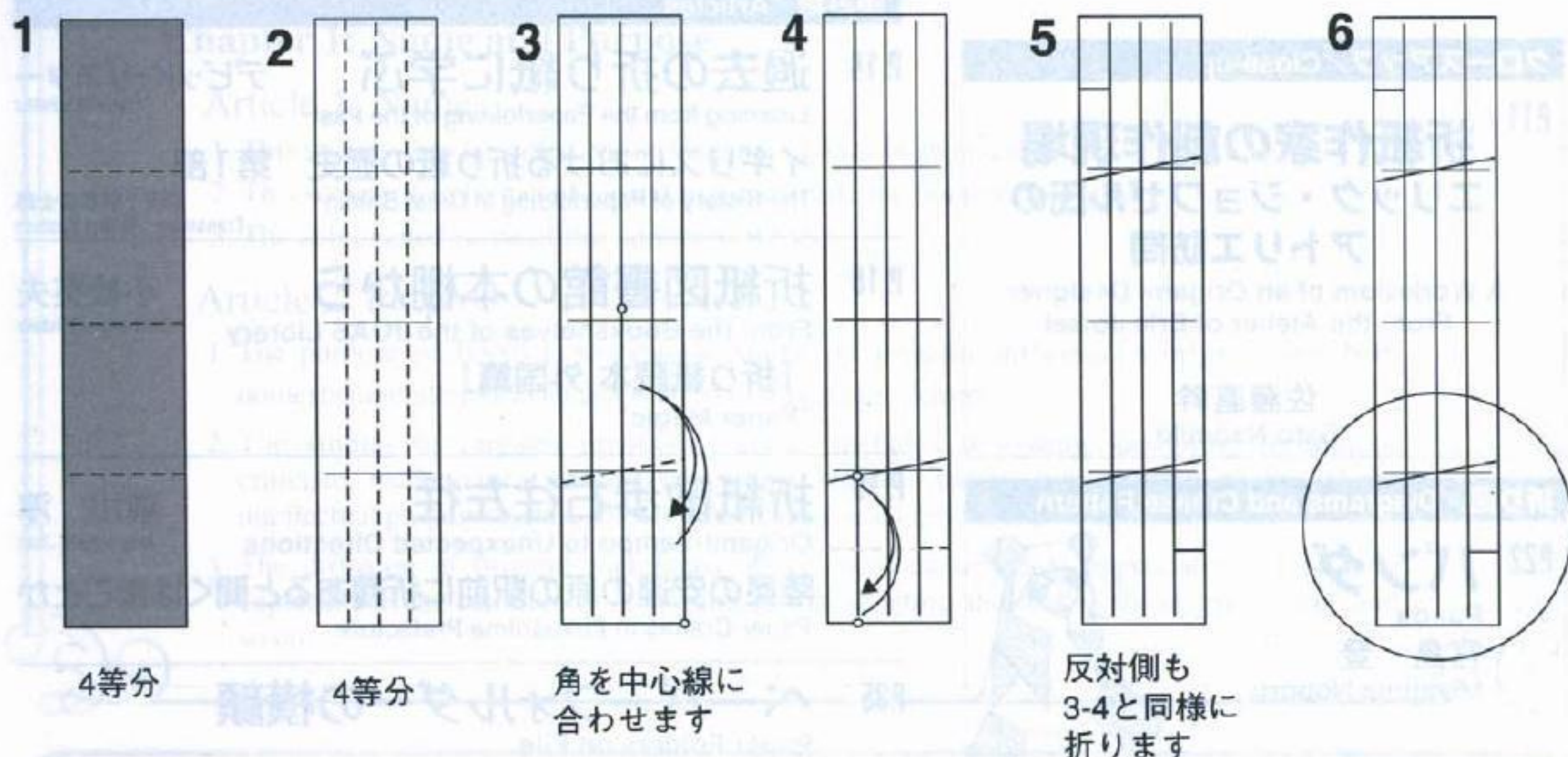
この作品は、Daniel Kwan氏がOUSA Convention 2003で発表されたユニットを参考に創作しました。



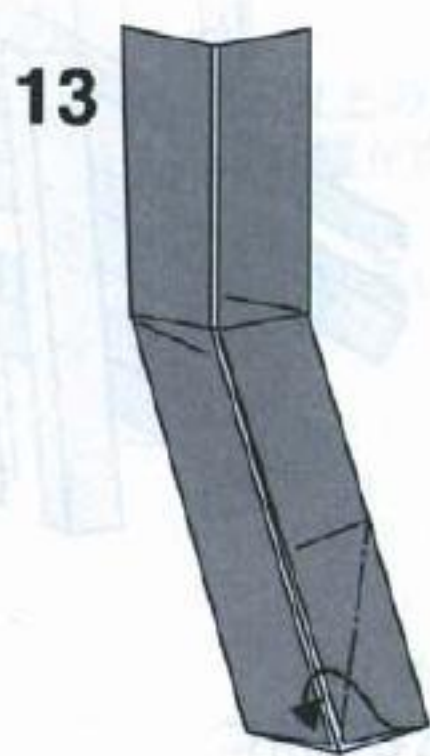
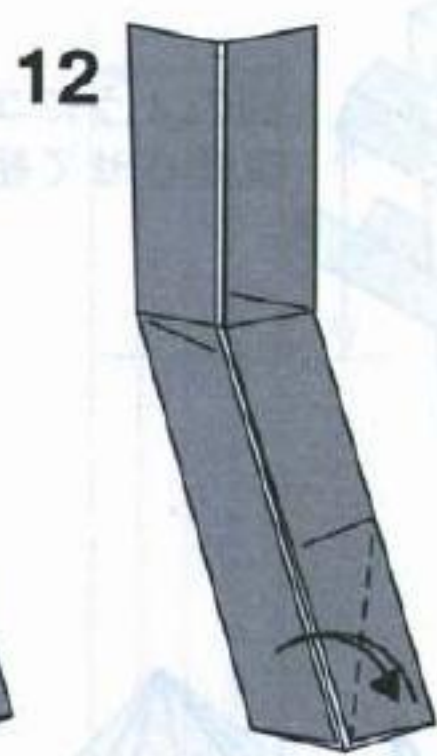
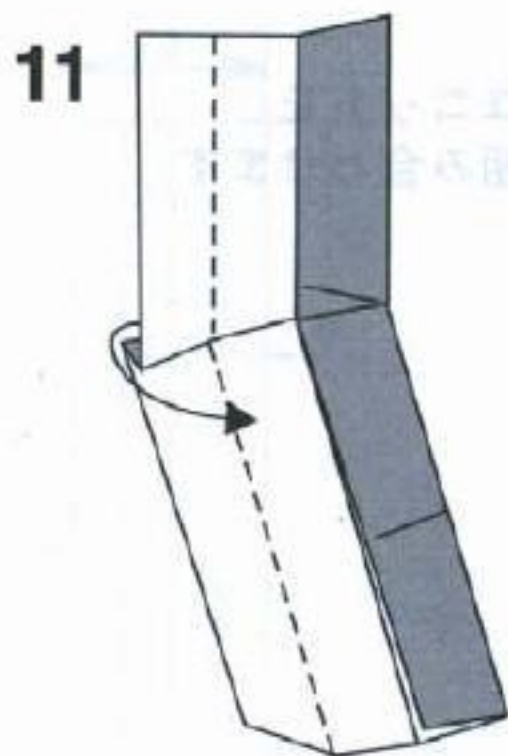
都内の美大生。おりがみ新世代で数少ないユニット創作者。パズルのようなユニットが好み。いつも撮影する側なので自分の写真がほとんどないです。

【パーツの折り方】

1:5の紙を30枚使います

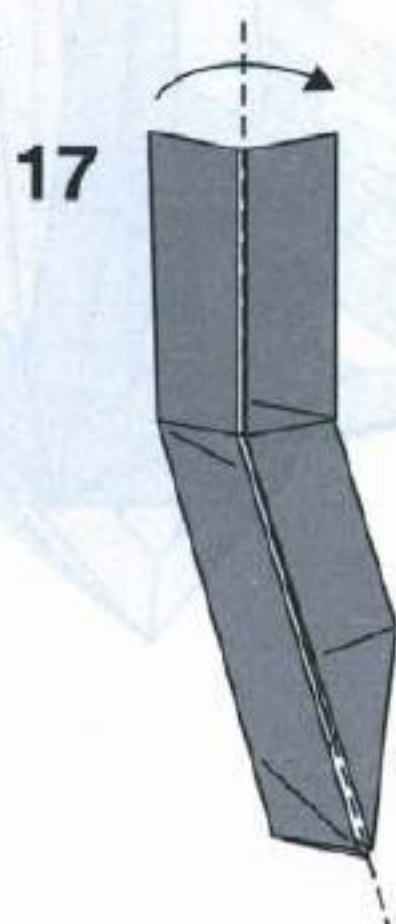
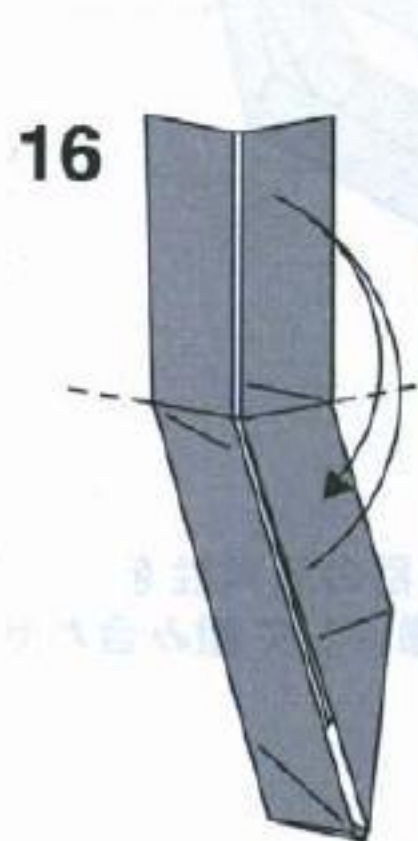


引き寄せてたたみます

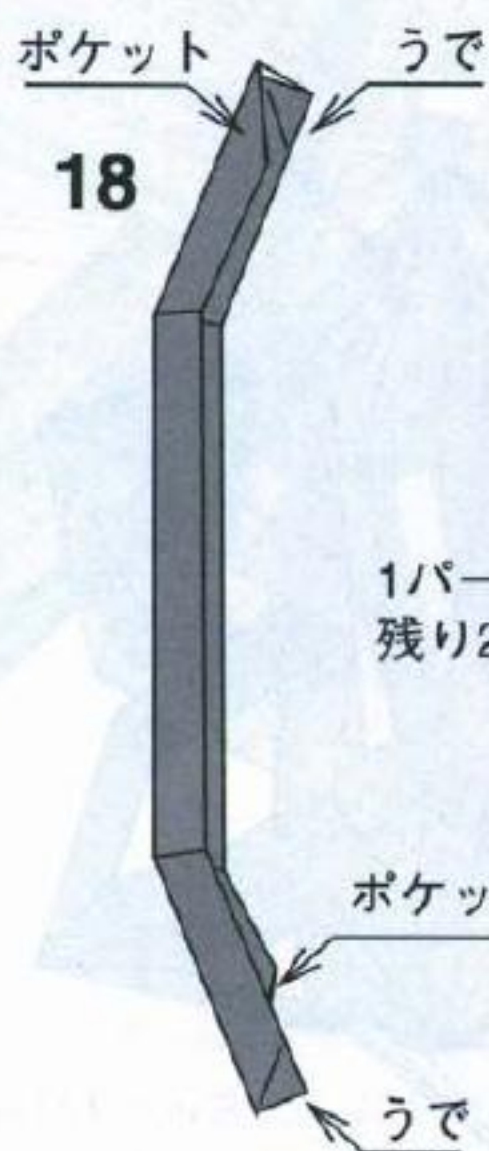


中わり折り

真中に合わせて

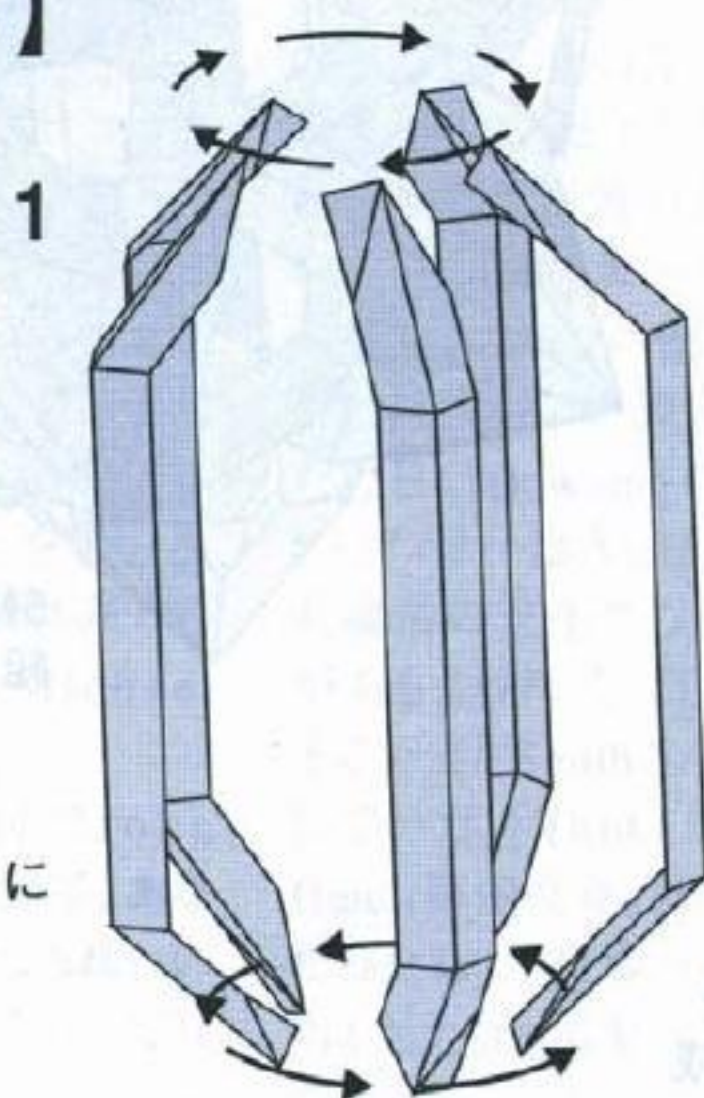


折り目をつけ直します
上半分も7-16と同様に折る

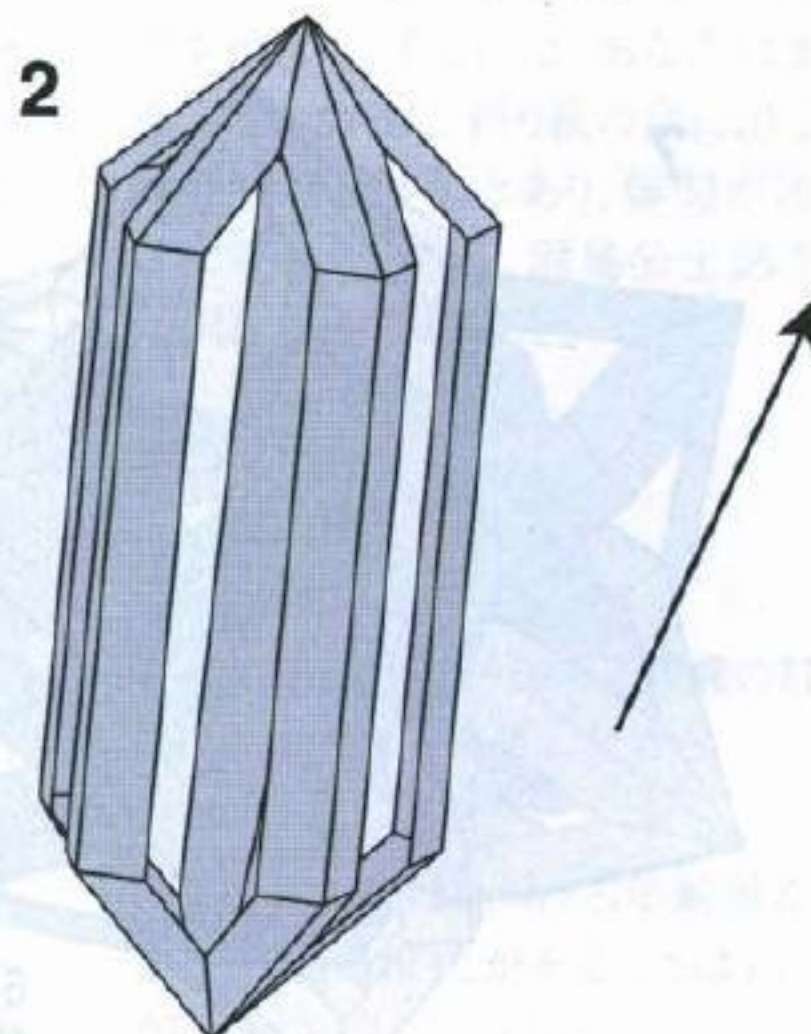


1パーツ完成
残り29枚も同様に折ります

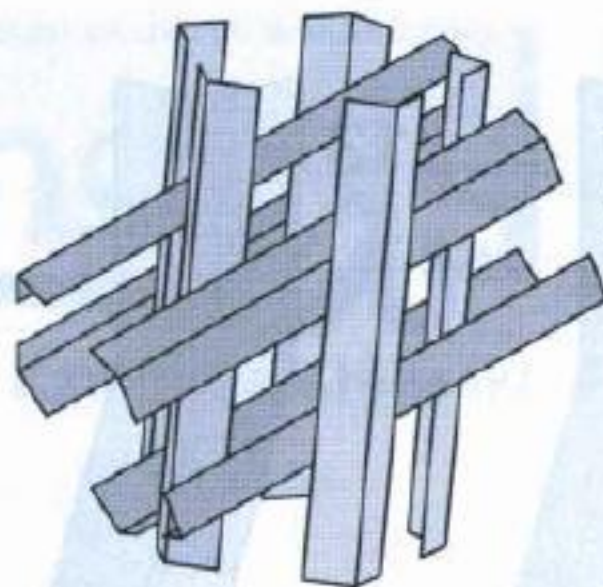
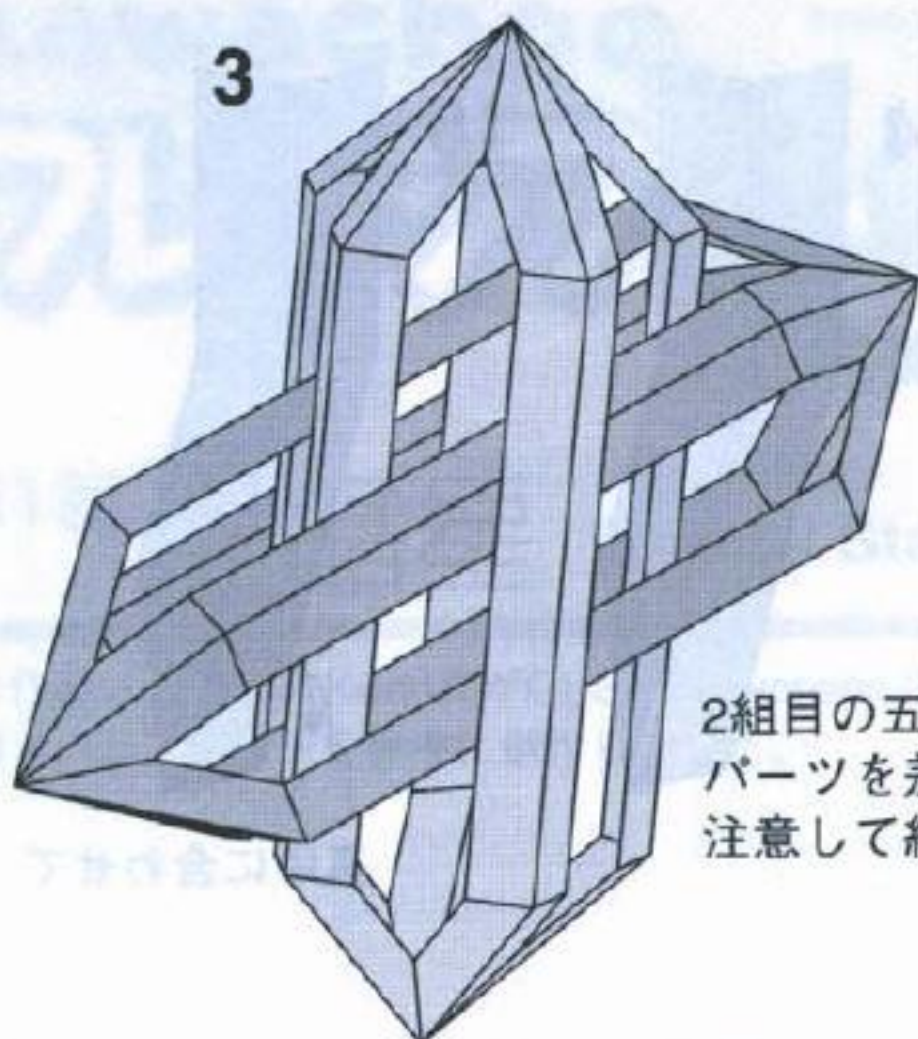
【組み立て方】



5枚1組で
輪になるように
組みます



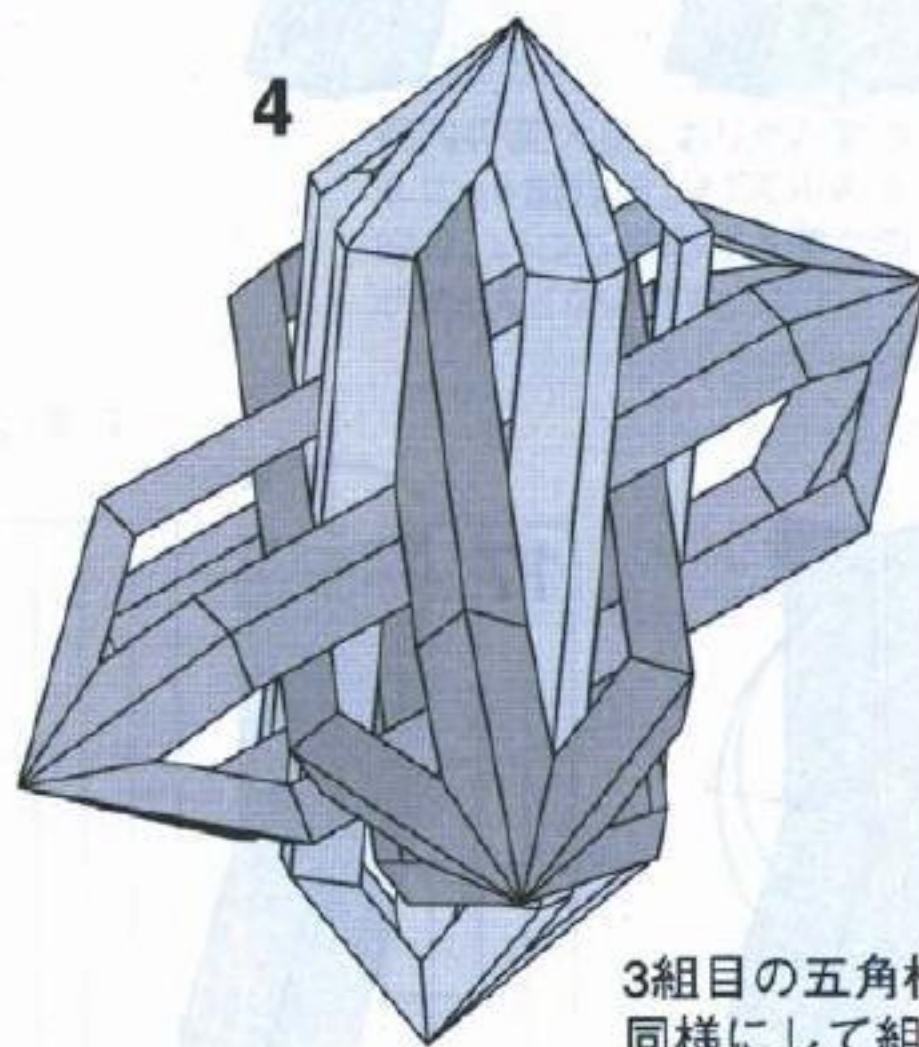
3



図のようにユニットを
交差させて組み合わせます

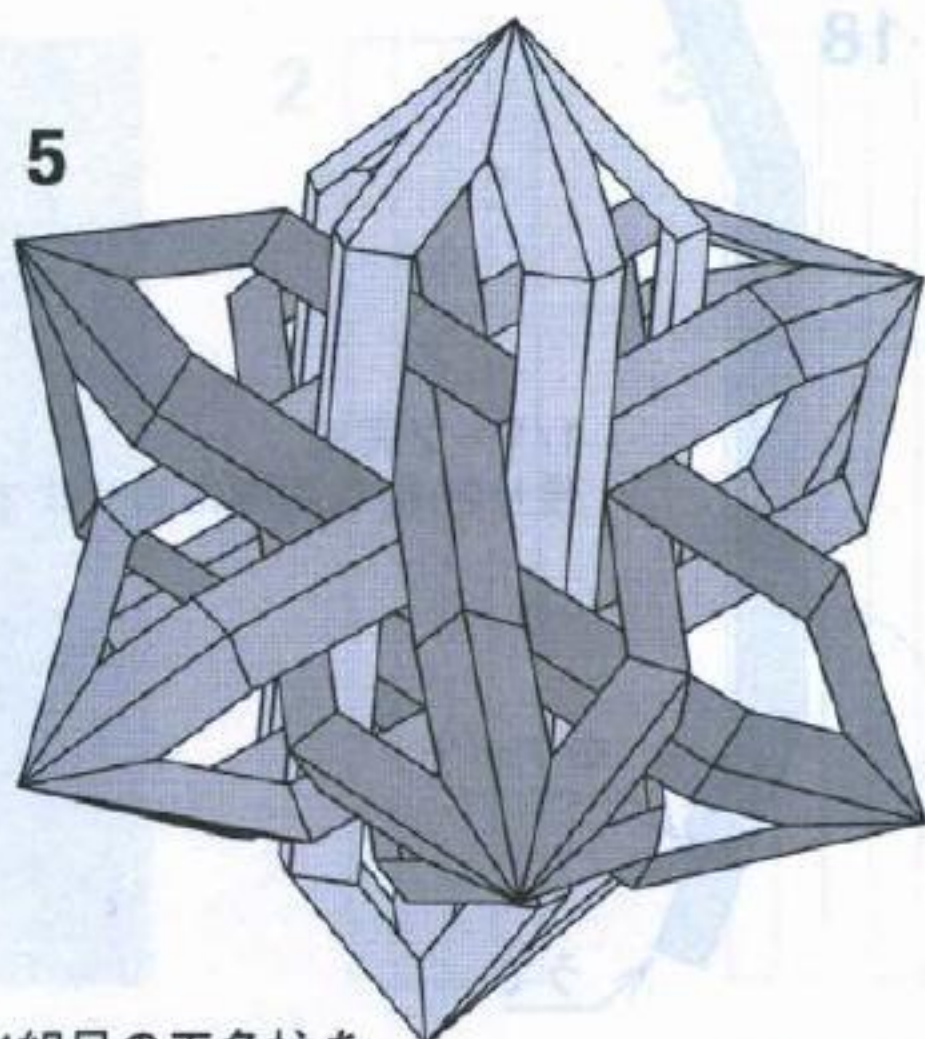
2組目の五角柱を
パーツを差し込む場所に
注意して組み合わせる

4



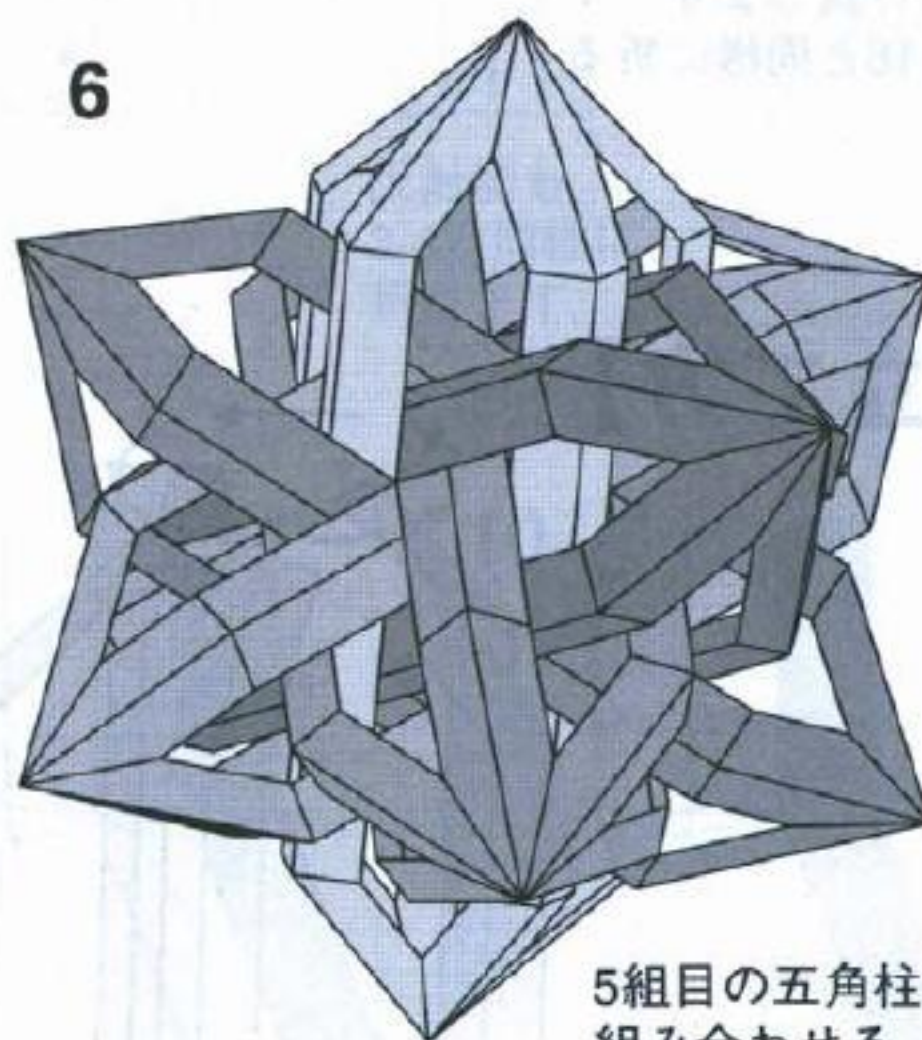
3組目の五角柱を
同様にして組み合わせる

5



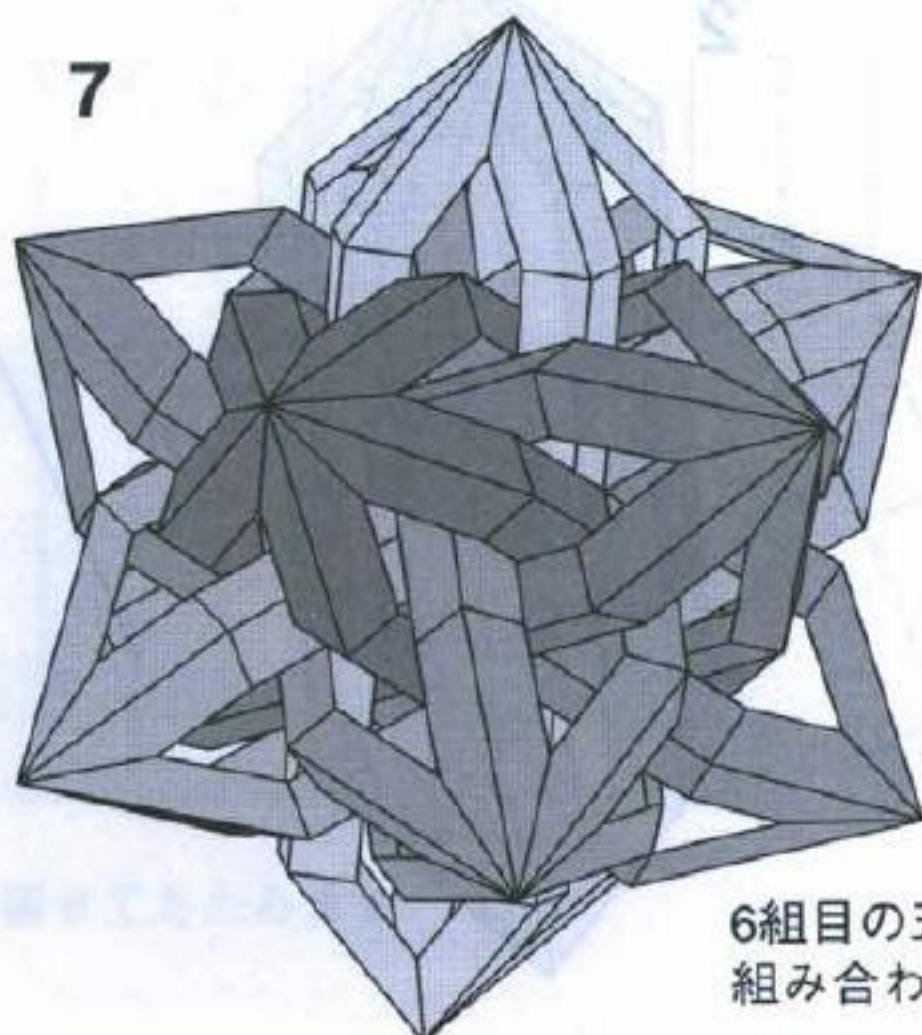
4組目の五角柱を
組み合わせる

6

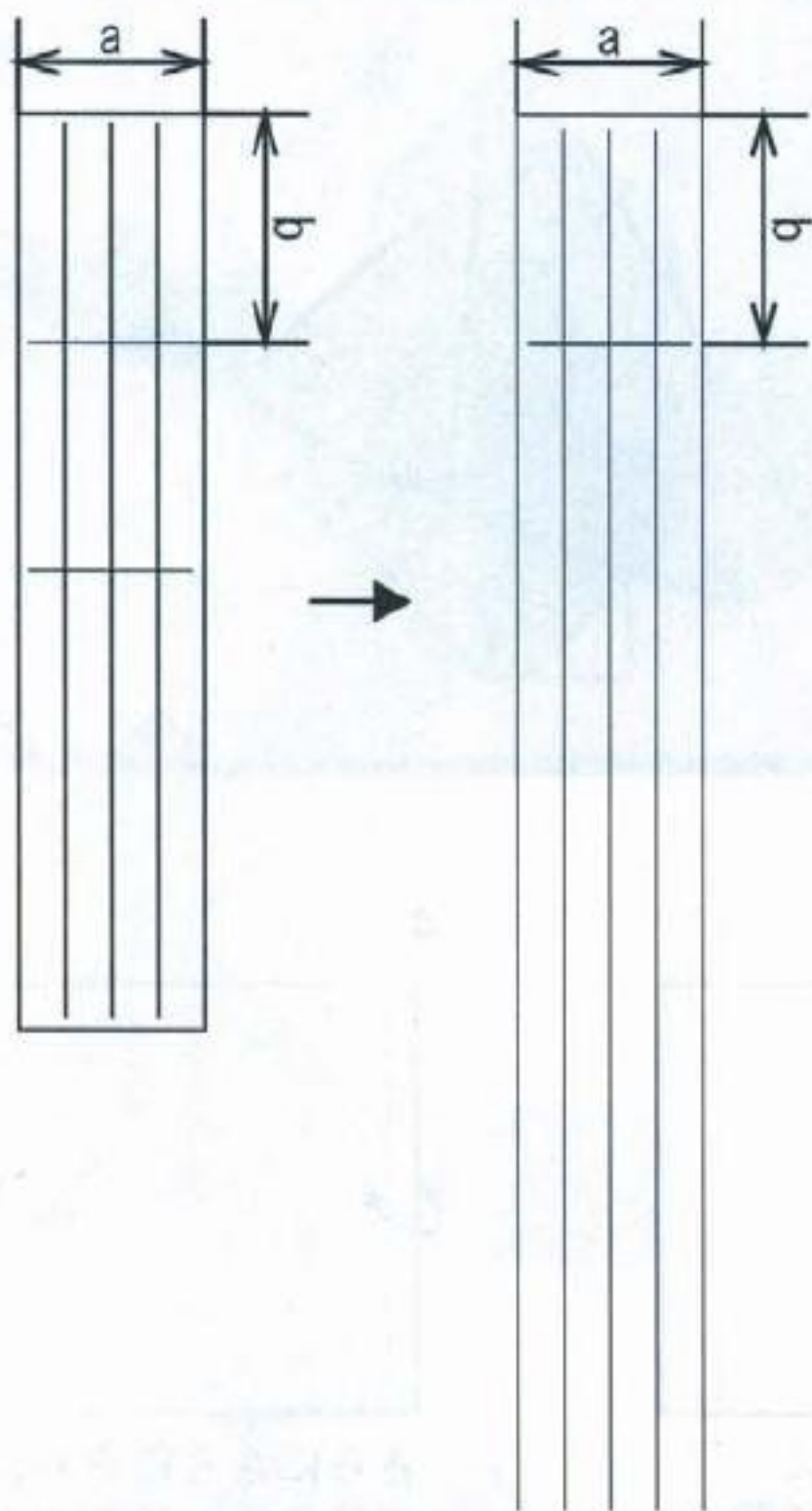


5組目の五角柱を
組み合わせる

7

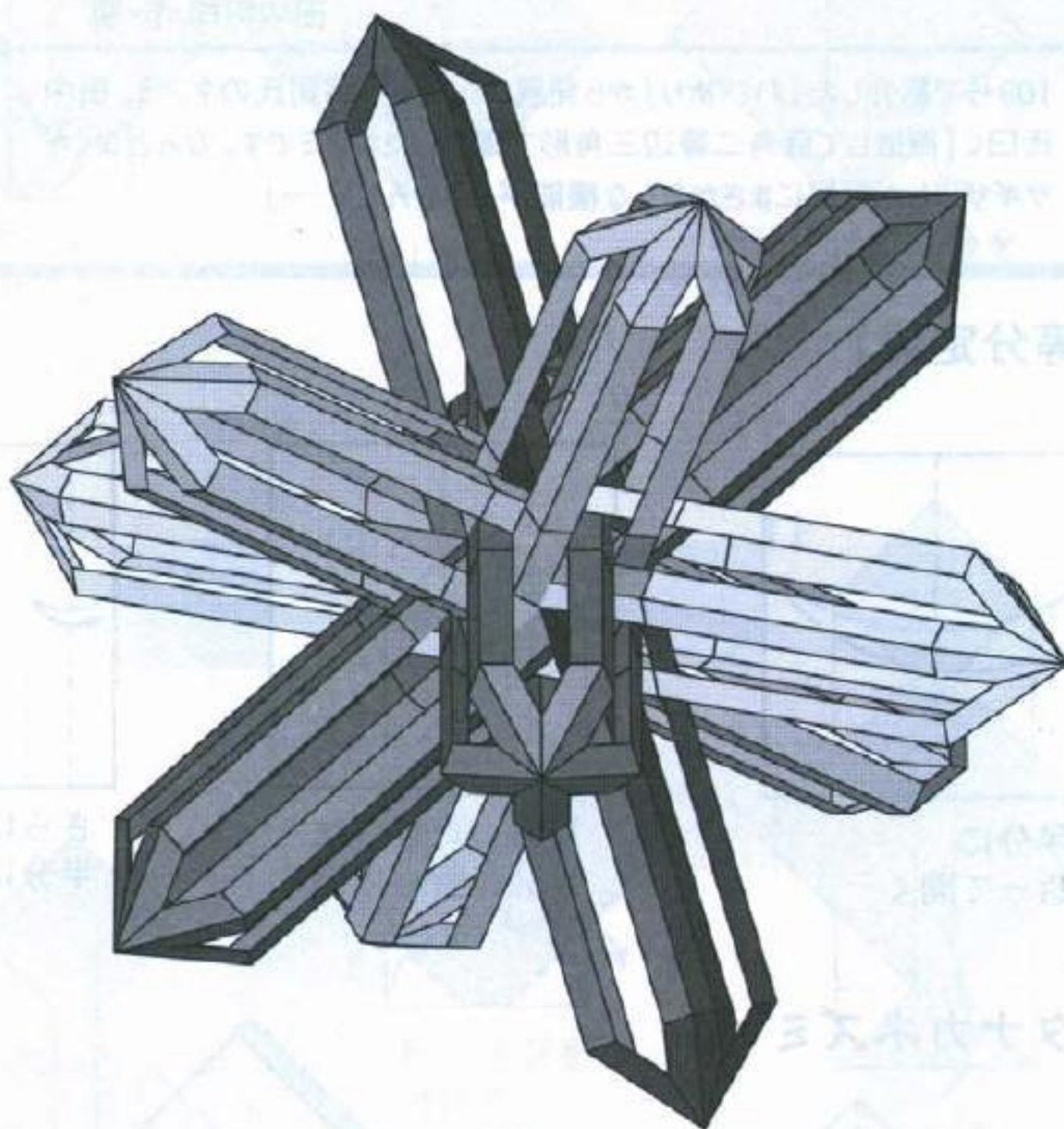


6組目の五角柱を
組み合わせて完成



1:5以上の比率であれば、いくらでも長くできます。
紙の幅が同じであれば、bの長さを移して折ります。

あまり長い紙だと強度が不足するかもしれません。



折り紙の 周辺

第26回
芝生の
シャンパングラス
Sherry on the Lawn

Origami and
Its Neighbors

布施知子 Fuse Tomoko

BOSの40周年記念大会に出席した。25周年大会にも出席しており、そのとき50周年では皆いい年になっているね、と話したことを思い出す。当時一緒だった数人は折り紙から離れ、とりわけ親しかったMichael Shallはこの世にいない。

展示会場をかねた受付でJohn Smithさんに会った。「おお知子、あなたが来るとは思わなかった。うれしい驚きだ。ほくはすっかり年をとってし

まったよ」そばにいたDavid Listerさんと笑い、それからSmithさんはEric Joiselさんの展示作品を指して言った。「知子、あれを見たか。なんてことだ。一枚の紙はどこにいったしまったのか。だれもあの作品から一枚の紙を想像することはできない」Smithさんの言葉には複数の意味がこめられている。彼はまたユーモアの人でもある。

会はスタッフの働きで気持ちよく進行し、たくさんの教室と交流がもたれた。2日目Downing Collegeでのグランド・ディナーはきらびやかだった。まず会場前の芝生でワインやシャンパンがふるまわれ、しばし会話を楽しんだ。そこでまたSmithさんとListerさんが話していた。「Thoki Yennも逝ったし、Humi(藤田文章)は、たしか交通事故だったね」会場へのスロープをふたりは支え合って登っていた。高い天井

にシャンデリアがきらめき、会食はなごやかに進んだ。亡くなった折り紙の友の名を順にアナウンスして追悼するセレモニーもあった。

帰国して数日後Smithさんからメールがきた。そこには、あなたにまた会えてよかった。折り紙の会に出るのは最後だと思う。とあり、俳句が添えられていた。後日、羽鳥公士郎さんに訳していただいた。

Sherry on the Lawn
Memories in Candlelight
Of friends lost to us.

芝生のシェリーグラス／蠟燭の灯に
思い出す／行き去りし友たち

折り紙の会はあらゆる年齢層が集まる。代わる世代があることは折り紙が生きつづけている証。

第27回 タナカネズミ'

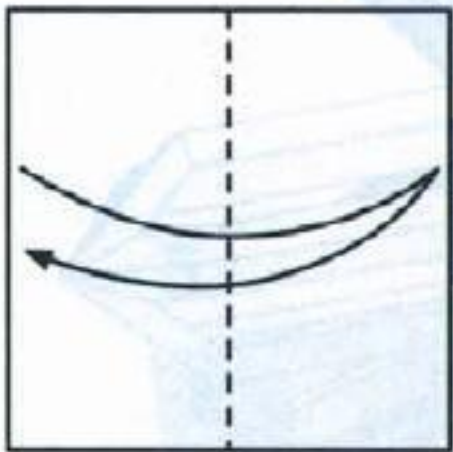
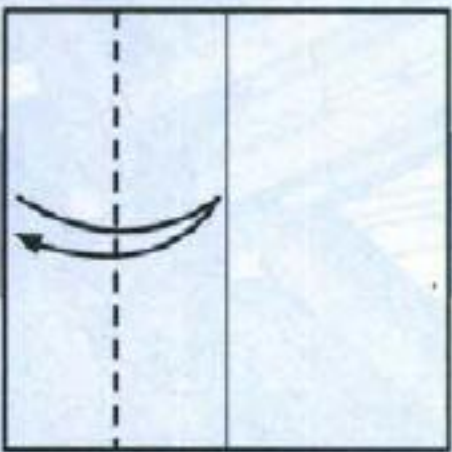
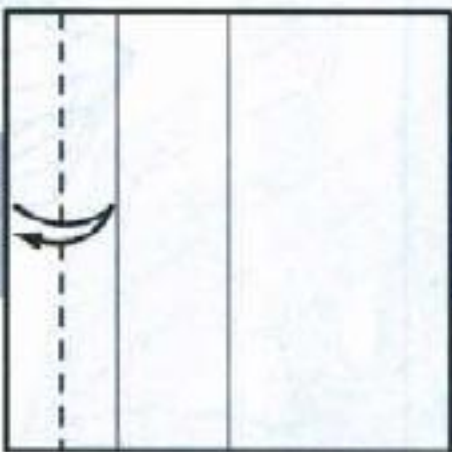
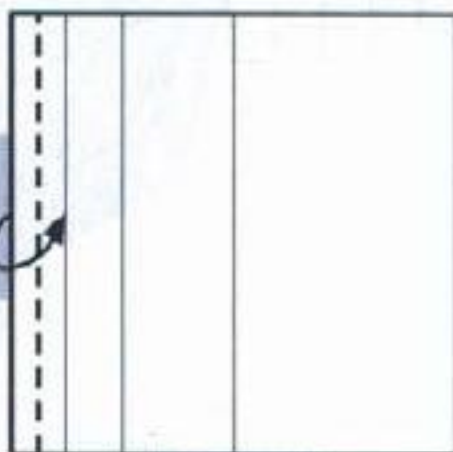
Tanaka Nezumi' (nezumi is this rat's Japanese name)

田中将司:作・図

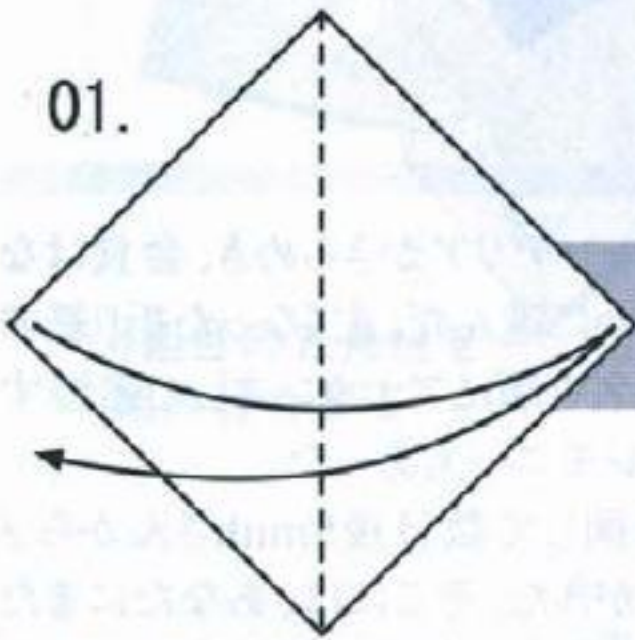
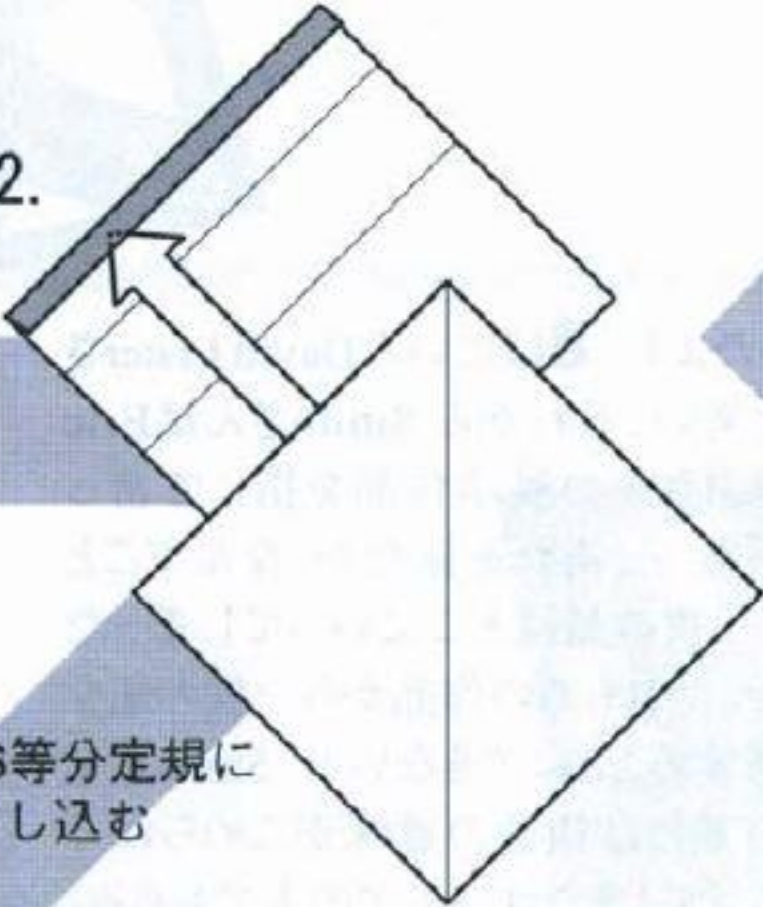
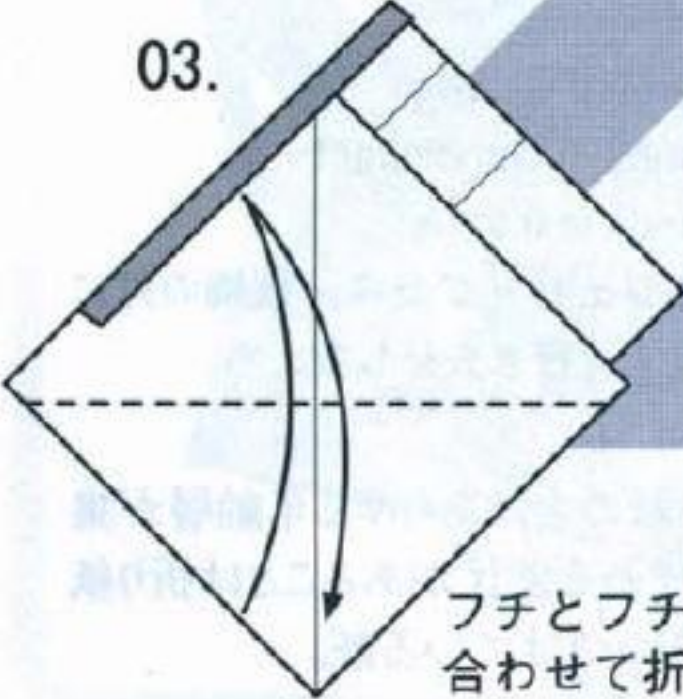
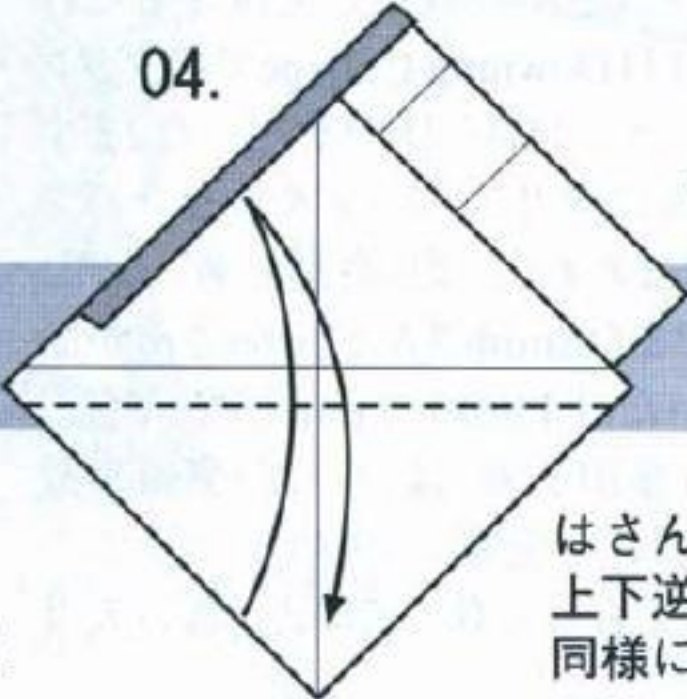
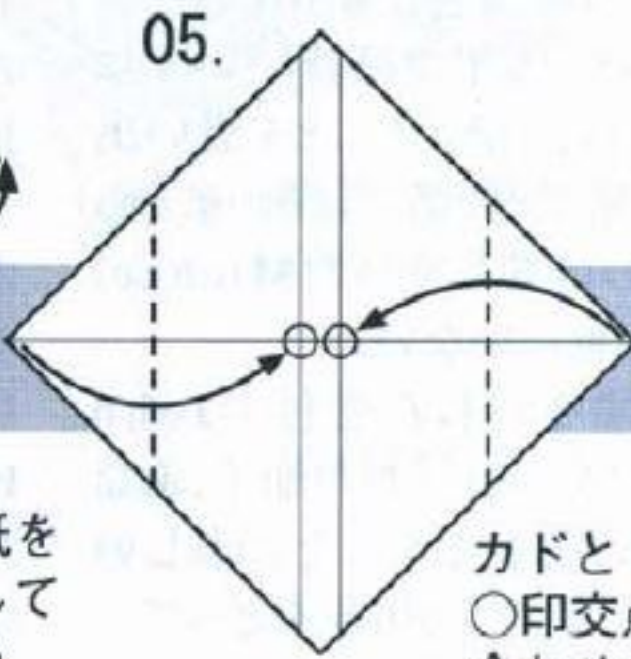
103号で紹介した「ハバ折り」から発展した?!田中将司氏のネズミ。田中氏曰く「徹底して直角二等辺三角形で構成したネズミです。なんとなくギザギザにした尻尾にまさかあんな機能があるなんて……」



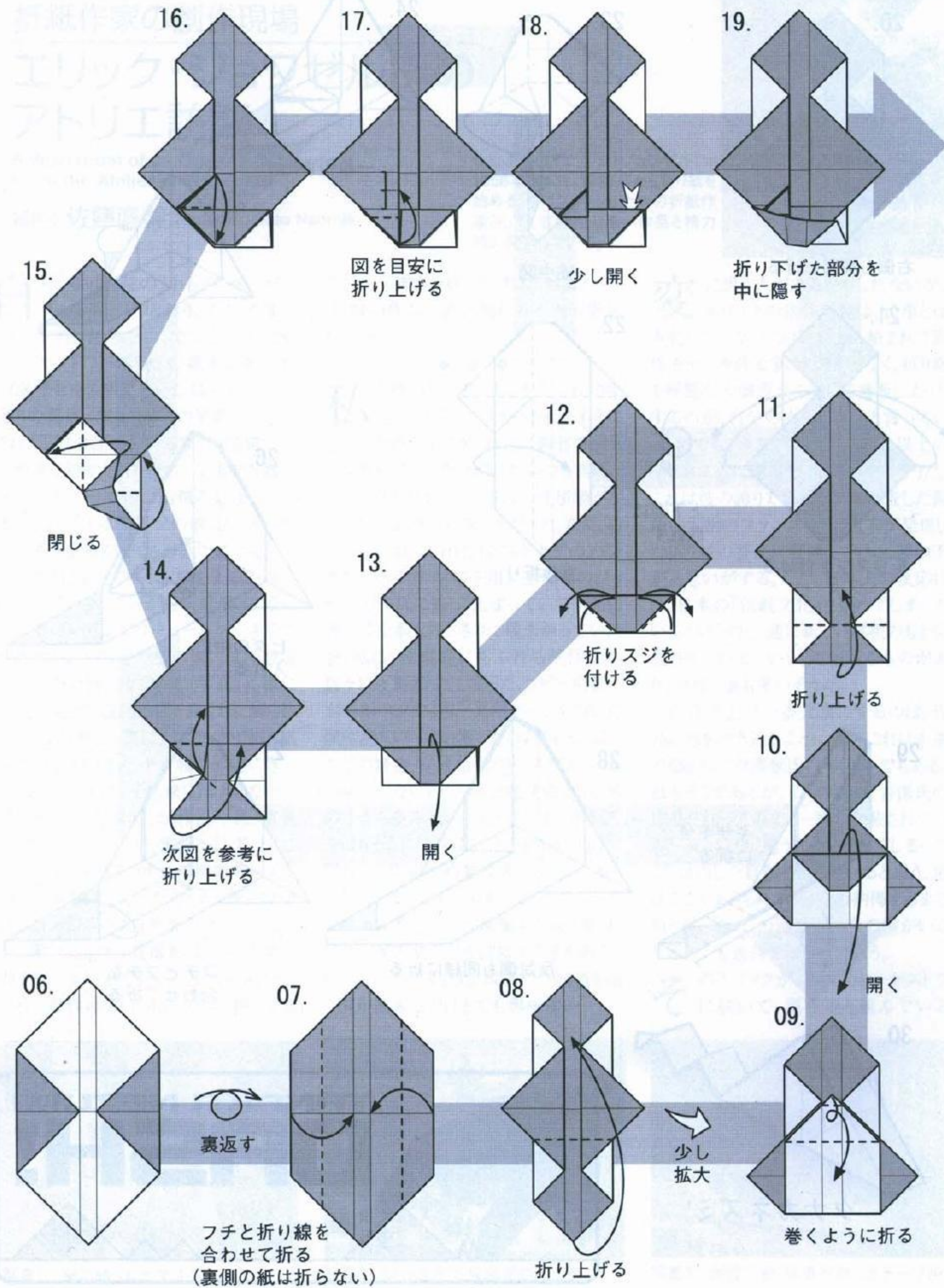
【16等分定規】

1. 
半分に折って開く
2. 
片側だけさらに半分に折って開く
3. 
さらにさらに半分に折って開く
4. 
さらにさらにさらに半分に折って開かない

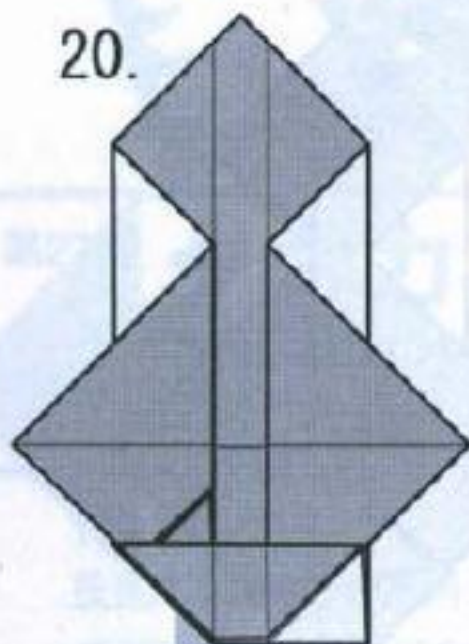
【タナカネズミ'】

01. 
半分に折って開く
02. 
16等分定規にさし込む
03. 
フチとフチを合わせて折って開く
04. 
はさんだ紙を上下逆にして同様に折る
05. 
カドと○印交点を合わせて折る

少し拡大

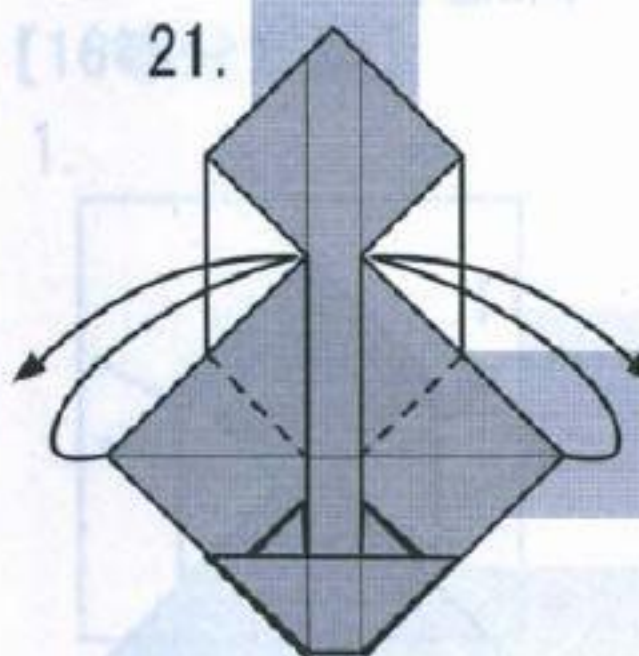


20.



右側も同様に折る

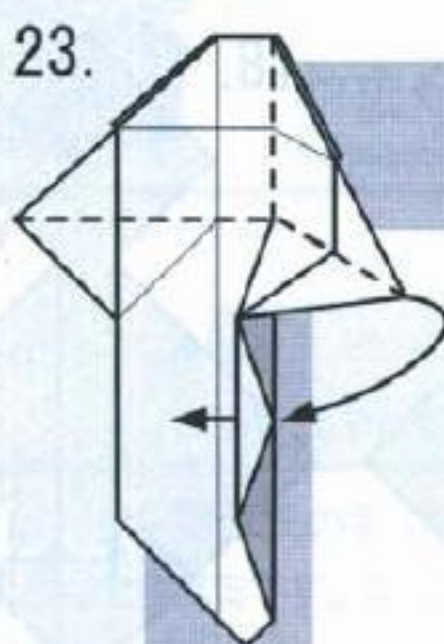
21.



折りスジを付ける

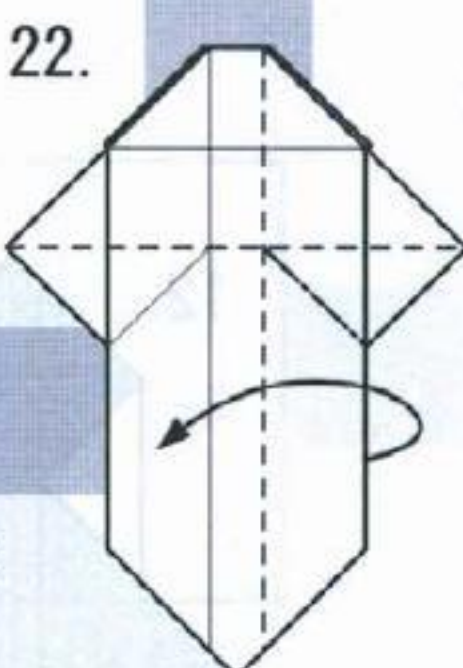
上下逆に裏返す

23.



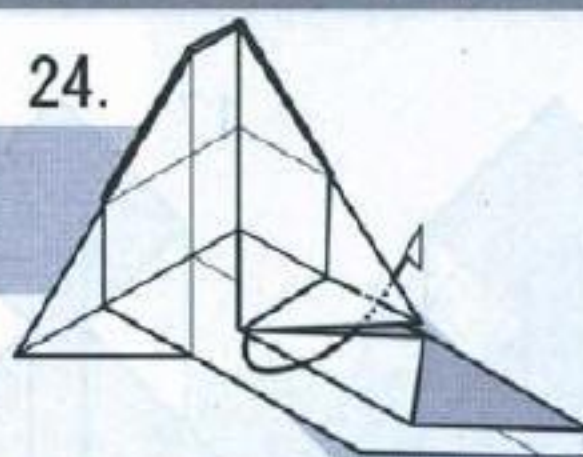
途中図

22.



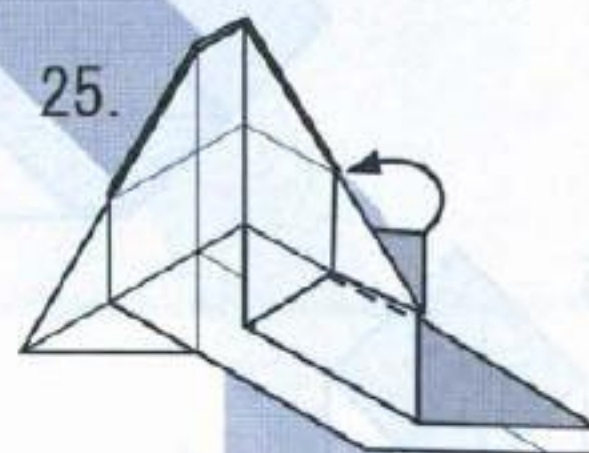
立体折り

24.



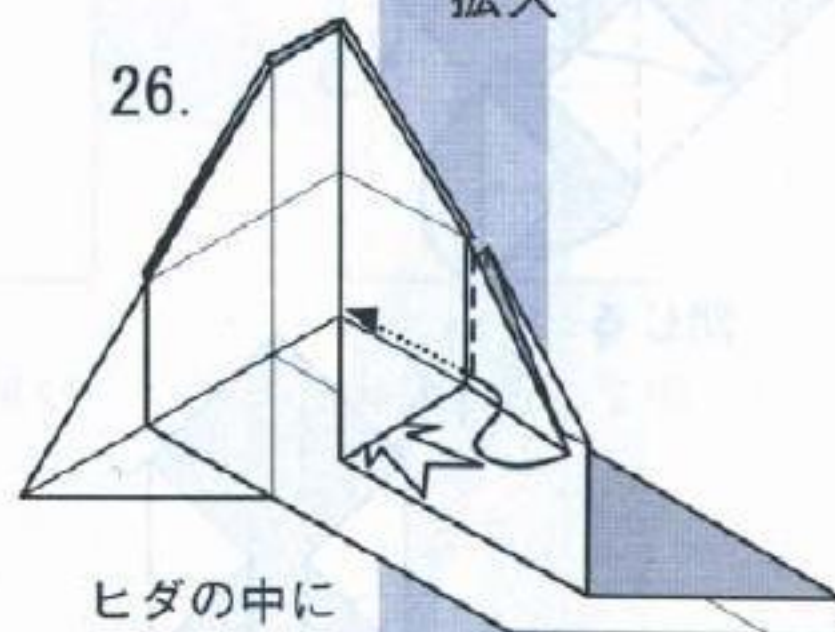
一枚引き出す

25.



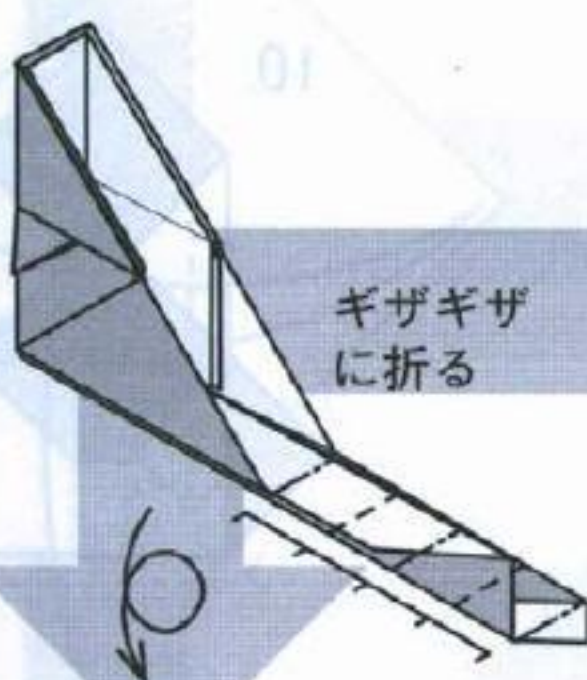
拡大

26.



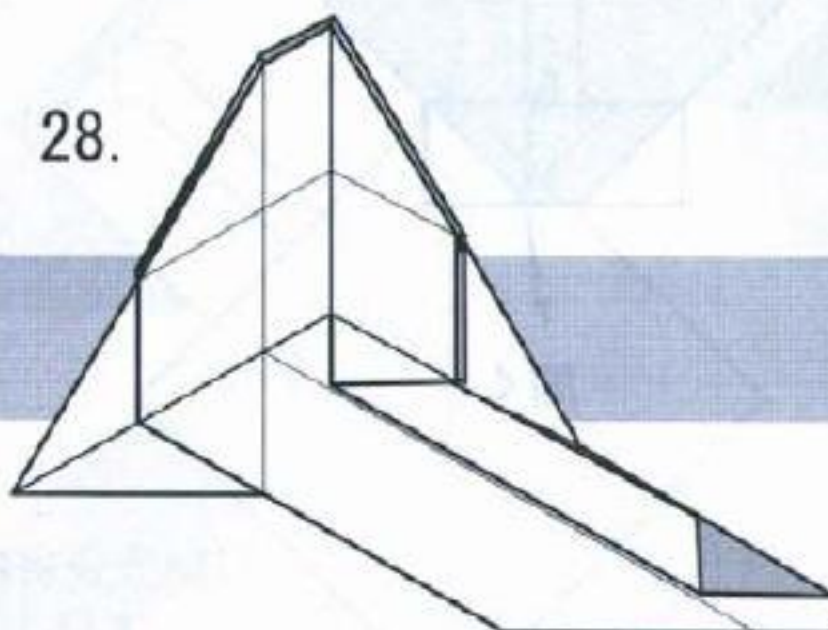
ヒダの中に入れる

29.



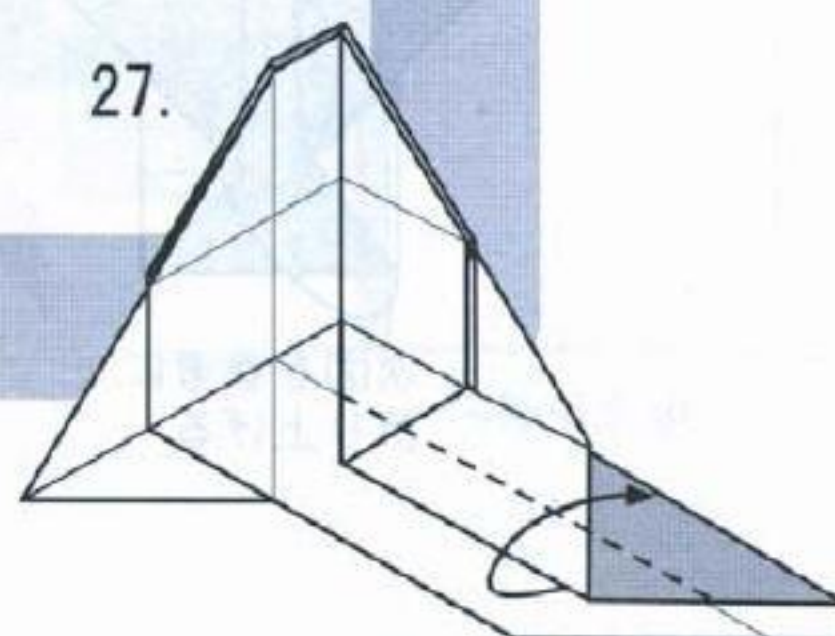
ギザギザに折る

28.



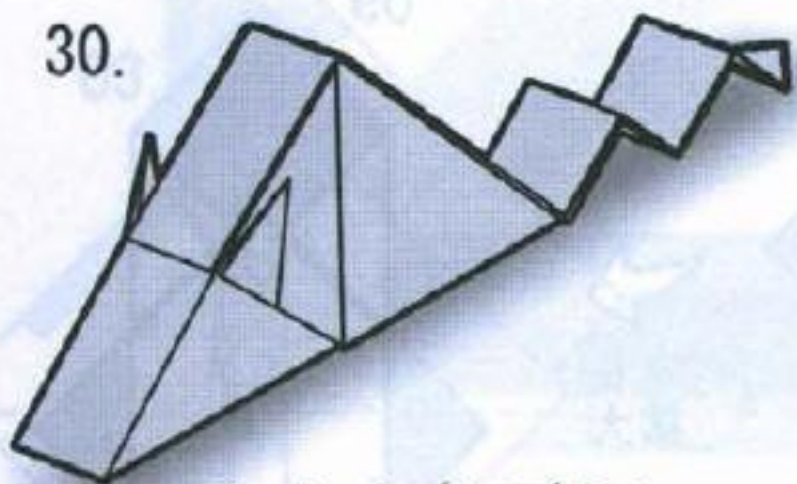
反対側も同様に折る

27.



フチとフチを合わせて折る

30.



タナカネズミ'



折紙作家の創作現場

エリック・ジョワゼル氏の アトリエ訪問

A Workroom of an Origami Designer:
From the Atelier of Eric Joisel

報告: 佐藤直幹 Reporter: Sato Naomiki

Eric Joisel (エリック・ジョワゼル) = 1956年生まれ。1983年から折り紙を始める。プロフェッショナルの折紙作家として、芸術性の高い作品を精力的に発表している。



白 称「郊外在住の“小もの”ペーパーフォルダー」のとおり、エリックはパリ近郊の住宅街に住んでいる。パリ北駅から、ポントワーズ行きの電車に乗り、30分弱でセルネ駅に着いた私を、いつもの通りの茶目っ気たっぷりの笑顔で迎えてくれた。彼の住んでいる家は2階建ての一軒家。実物大折り紙の一群と折り紙の入った段ボール箱が山積みになっている、かなり広いガレージの横には、小さな池があり金魚がたくさん泳いでいる。

中2階になっている玄関を入ると、すぐにオープンキッチンがあり、仕切りになっているバーでまずコーヒーとケーキをごちそうになった。その横の壁には10数個のマスクが飾られていて(写真1)、棚には試作品と完成品とが一緒くたに飾られていた(写真2)。奥に入ると、まず折り紙関連の書物が2メートル幅の本棚にぎっしり詰まっていた。その横には大きなテーブルがあり(写真3)、試作品や紙、道具などがのっているが、実際の作業はここではせず、隣のキッチンの横のテーブルでする事がほとんどだそう。理由は単純、この部屋には自然光が多く入るからとの事。作品の写真撮影は、この仕事場のテーブルの上で行った。後から後から、いろんな作品を引っぱり出して持ってきて

てくれ、三脚まで貸してくれた。私にとっては、彼の作品に直に触れる本当に貴重な時間になった。

◆ ◆ ◆

私 と彼の付き合いは、かれこれ10年近くになる。いつも折り紙をネタにいろんな話をするが、お宅に御邪魔するのは初めてだった。今日は、いつも素晴らしい作品を見せてくれる彼の仕事場がどんなものか、とても楽しみだった。ただ、めぼしい作品は、10日後のカナダのバンクーバーでのイベント用に主催者のジョセフ・ウー氏に送ってしまっていて手元に無い事を本人はしきりに残念がっていたが、私は、仕事場にあふれる試作品の数々に圧倒されてしまった。コピー用紙にボールペンでクリースパターンを描いた試作品もいっぱいあった(写真4、5)。ほとんどの場合、完成品とクリースパターンしか見ていないので、何か魔法のように彼の手から生み出されると思ってしまうが、やはりそこには常に自分の創作に向けて励む、一作家の真摯な姿があった。もう捨ててしまったものもあるが、捨てられないものも多いらしい。展覧会を開く際、時には一連の試作品を披露する事もあるという。1つの作品の完成までの経過を追う事が出来るのはとても興味深い。

変 に思う人があるかもしれないが、エリックの創作活動は、仕事とは直結していない。実際、人から頼まれて新作モデルを作る事はほとんどなく、折り紙を展覧会や講習会を通じて普及しようとするのが、自分の本分であると言っている。何でも、今までに、延べ5万人以上のフランス人に講習をした事になるそうだ。これは彼の誇りでもある。青い目をした髭面の大柄のフランス人が、日本が発信した折り紙の普及に奮闘している。頭の下がる思いがする。ただ、日本人の反応には、日本の「伝統文化」を歪めてしまっているというのと、逆に新しい解釈のもと発展させているという、両極端なものがあり、戸惑う事も多いそうだ。

創作の上で一番大事にするのは、作品に命を吹き込むことにある。これは永遠の師と仰ぐ吉澤章氏のモットーでもある。私もそうであるが、多くの人が、吉澤氏の作品を作ってみて、一緒に掲載されている写真とは全く違うものになってしまっただけの経験を持っていると思う。彼はここであきらめず、自分の納得するまで折り続けた。この延長上に今の彼がいると言っても過言ではないだろう。

そ のエリックが、小人とオーケストラに続いて、現在取り組んでいる



写真1 壁に飾られたマスク



写真2 試作品や完成品が並んだ棚



写真3 試作や紙、道具がのったテーブル



写真4 ラフに描かれた展開図と完成作品

テーマは「バーバリアン」である。トールキンの『指輪物語』のファンでもあり、まず「指輪の仲間」の内、3人が完成している(主役のホビットは、小人のカテゴリーに属するので、残念ながら、もう創作意欲がわかないそうだ)。アトリエには、その後に作った2つの戦士像が飾ってあった(写真6、7)。そのうちの1つはエリックのサイトで目にしていたが、もう1つの盾と斧も持ったものは最新作だ(P.21にカラー写真掲載)。まず、その完成度の高さに驚かされる。それまでの作品とはどこか一線を画す存在感がある。肉感に近いものだ。

このシリーズの創作において本人が一番意識しているのは「質感」である。一番顕著に表れるのが鎧の蛇腹折りの部分であるが、ケープの滑らかな表現、盾や剣の平たい部分に折り目を付けない配慮もみられる。これは、ある意味、折り紙を超越し、既に「紙による彫刻」の域に達していると言えるだろう。折り紙を始める前は、彫刻にも興味があったが、それを断念して折り紙の世界に入ったという。とすると、これはごく自然な流れな

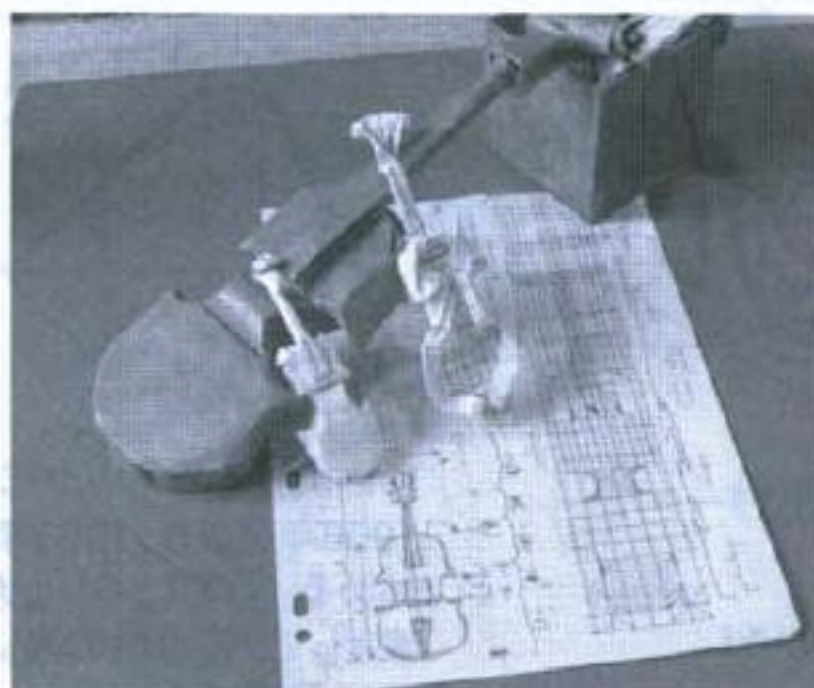


写真5 バイオリンの展開図と完成形

のかかもしれない。

またこの質感の実現を支えているのが素材となる紙である。フランスでは和紙が高価で、かつ手に入りにくい状況がある中、ネパール産の「ロクタ(lakta)」という淡いクリーム色の薄い紙を使っている。何十重にもなる部分の多いこれらの作品で、この紙は非常に重宝する。またサイズが1メートル四方あるのも好都合である。ネパールの紙以外にも、インド、タイなどの紙を扱う会社のカタログを見せてもらったが、材料となる木を、煮て砕き、すいて乾かす工程は、日本の和紙作りとあまり変わらない。一時期は、純粋な紙を離れ、フイル紙を裏打ちしたものを多く使う時期もあった。彼の代表作であるマスクの多くが、この紙を使って作られているが、折り紙の作品とは別なものになってしまい、今は紙そのものの持つ独特な風合いを大事にする方に戻ってきている。そして、この紙との出会いが、新たなエリックの創作意欲を奮い立たせている。

新 シリーズの特徴は、面の作り方と同じで、前と横から見る分には作



弦楽器各種

品として成り立つが、後ろからだ空洞になっているところである。変な言い方をすれば、ハリボテに近い(写真8)。これは、ディテールの細かい作業をするには非常に適している。オーストリアのマスター・オブ・オリガミ展に出展された「羽のついた牡牛」を見るとよくわかるが、作品全体が「表」で覆われていて、両手を使って裏表の両方から細かい表現をするのには一苦労する。まだ完成していない途中の牡牛を見せてもらったが、手に取ってみると使っている紙はとても固く、部分的なウェットフォールディングの手法(写真9)をもっても、この困難さは最後までつきまとうだろうことは想像に難くない。ちなみに、彼のウェットフォールディングの技法は、吉澤章氏との出会いがきっかけであるが、本人から直接伝授してもらった訳ではなく、作品を見た時に、この技法に気がついたそうである。しかし初めは、紙全体を水にどっぷりとつけたりと、試行錯誤が続き、現在に至るまでには、かなりの時間を要している。

さ て「バーバリアン」シリーズの創作の手順であるが、大体の構想を試



写真6 細部まで作り込まれた戦士の像



写真7 バーバリアン上半身



写真10 戦士像の試作品



写真8 3mはあるかと思われる巨大なサイ。これもハリボテ的な作りである(P.11近影写真参照)



写真9 ウェットフォールディングで折られた牛たち

作品(写真10、11)を通して固めた後で、本作品の製作に取りかかる。使用している紙は1メートル四方の正方形。基本的な設計は大体15分、実際の作業に約1週間。しかし細かいところまで、きちきちと決めて始める訳ではなく、後は「本能的」に作業を進め、インプロ(即興)も大きな要素となってくる。ディテールに関しては、表現の限界まで挑戦する。しかし、特に蛇腹折りの場合、ひだの数によって出来る事に制限もかかってくるので、仕方なく妥協して途中でデザインを変更する事もある。最新作の、羽を広げた「鶴」がヘルメットについている「戦士」の場合、縦長の盾のデザイン、そして表面に折り目を付けないというこだわりもあり、別に盾だけで試作をしている。このお腹のすこし出た三つ編みの戦士、私には完璧な作品に思われるが、本人に言わせると、手が長過ぎて足が短く、プロポーションに不満が残るそうだ。ここに、完全主義のエリックの性格があらわれている。

実際の作業だが、先端が丸い鉄筆の様な道具等(写真12)を使っ

て、山折り、谷折りに関わらず片面だけに折り筋をつけることから始める。そして少しずつ折り始め、一通り折り上がった後で一挙に形をまとめるとの事。やはり指先が一番の「道具」であるが、引き出しっぱいの道具の数々を見せてもらった。有名な(!?)道具「マスクマシーン」は、実は韓国製の木の箸だと教えてくれた。不切1枚折りが鉄則だが、のり付けと、金属パーツによる補強は、特に展示用の作品に関してはどうしても必要だと、ちょっと恥ずかしそうに弁解していた。

◆ ◆ ◆
創作にはコンピュータは一切使わない。全部本人の手作業で進行する。構想時のクリースパターンも定規などは使わず、完全なフリーハンドの場合も多い。時には、A3の紙から正方形を作った時の切れ端に無造作に描いてあったりする。コンピュータを使って展開図を描くのは、作品が完成した後に、外国のコンベンション等でレクチャーを頼まれたりした時など、人に説明する時に使うだけとの事。最近では、フランス語圏の折り紙フォーラムを積極的に応援したりと、インターネットでコンピュータを

使う機会が増えているが、最先端のものは敬遠する傾向にあるらしい。どこか人間味にかけるからだろう(フォーラムでは、新作チャレンジコーナーがあり、月毎にテーマを決めて作品を募っている。エリックはここへの常連である)。

現在は、ヨーロッパスタイルの「戦士」をテーマにしているが、近々、日本の鎧兜を着た侍に挑戦する予定だそうだ。今までの作品ではあまりディテールの下調べをする事は無かったが、さすがに日本の武士の姿となるとあまりなじみが無いので少しずつインターネットを使って調べていると言っていた。彼の質感の追求がどのような形で作品に表れるのか今から楽しみである。

◆ ◆ ◆
エリックには1つ追求めてやまないテーマがある。女性の顔の表情と、滑らかなボディーラインの表現である。これは最近の作品「人魚」(写真13)に一部反映されているが、本人いわく理想とは程遠いとの事。今後、大いに期待したいところである。これと平行して、折り紙での筋肉の表現にも着手している。試作品がバンクーバーで展示される予定だが、これは、かなりの間アトリエの中で眠っていたらしい。全てを解剖学にそって表現する事は不可能であるし、本人は折り紙の極端な写実主義に意義を感じていないが、紙という素材でどこまで表現できるかという限界を追い求めるアーティストの姿がここにある。

フォーラムのアドレス:
Forum francophone generaliste et
specialiste de l'Origami
<http://origami.kwoon.info/forum/>



写真11 パーバリアンの試作と完成形



写真12 ジョワゼル氏の七つ道具



写真13 人魚の試作品

過去の折り紙に学ぶ 第4回

Learning from the Paperfolding of the Past

デビッド・リスター
Writer: David Lister

訳: 羽鳥公士郎
Translator: Hatori Koshiro

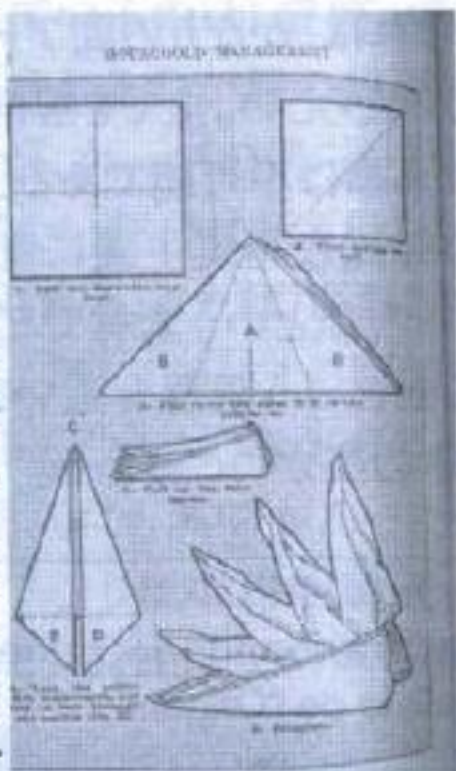
イギリスにおける折り紙の歴史 - 第1部: 17世紀から20世紀初めまで -

The History of Paperfolding in Great Britain - Part One: 1600 to 1945 -

16世紀以前のヨーロッパに折り紙があったことを示唆するものはいくつかありますが、ヨーロッパの折り紙についてのもっとも古い確実な証拠は、イングランドにあります。シェイクスピアと同時代のジョン・ウェブスターが1610年代に書いた戯曲『The Duchess of Malfi (モルフィ侯爵夫人)』です。この戯曲の中で、ウェブスターは、少年たちがハエを捕えて遊ぶ紙の箱に言及しています。これは、西洋で「水爆弾」として知られている折り紙以外には考えられません[訳注: 日本では「風船」と呼ばれています]。ふくらませた「爆弾」の中にハエを捕えると、羽音が増幅されます。このような遊び方は、遠く離れて近代のエジプトや中国にも見られます。

紙を折ることだけでなく、布を折ることまで含めれば、現在知られているヨーロッパの折り紙の歴史はずっと初期にまでさかのぼります。

15世紀には、イタリアの宮廷でテーブルナプキンを折ることが流行し、これが急速に、イギリスを含め北ヨーロッパに広がりました。ナプ



版 ▲料理の本『Household Management』(1900年ごろ)から、個人用のナプキン折り

キン折りの中には、1枚1枚のナプキンを装飾的な形に折るものもあれば、テーブルの中央に置く飾りとして大きなテーブルセンターを作るものもありました。布を細かく段折りしたり、縦横に段折りしたり、型に合わせて折り、手の込んだ鳥や動物、船などを作っていました。これはある意味で儀礼的な折りであり、段折りを多用していることから、日本の儀礼的な包みの折り紙になぞらえてもよいかもしれません。このようなナプキン折りがイギリスで実践されていた証拠としては、1682年にジャイルズ・

ローズが書いた料理と盛り付けについての本に、ナプキンの折り方を説明している章が含まれています。ただ、残念ながら、この本には図解がありません。

段折りするものと言えもう一つ、イギリスで「トラブルウィット」と呼ばれているものがあります。これは、大きく強い紙を1方向に細かく段折りし、さらにそれに交差するように段折りを何度か施したものです。そのようにして作られた紙の形を、芸人が、扇から帽子、器、ランプ、そしてまた帽子へと、さまざまな形へすばやく変化させます。このようなもののヨーロッパにおける最初の記録は、1676年に「J M.」(おそらくジョセフ・モクストン)が英語で書いた『Sports and Pastimes (スポーツと趣味)』という本にある手品のトリックです。トラブルウィットについての本は、それに引き続きフランス、イタリア、スペインでも出版されています。トラブルウィットの起源が中国にあるという考えが古くからありますが、その確かな証拠は私の知る限りまだありません。

17世紀から18世紀にかけてのイギリスにおける折り紙の史料は、一般的でないことを認めなければなりません。それはヨーロッパ全体について言えることです。ドイツには多くの史料があるかもしれませんが、しかし、イギリスで引き続き折り紙が実践されていたことを示唆するに足る史料があります。1680年ごろのサミュエル・ピープスの日記に、紙で作られたかごの記述があります。ただし、残



▲1665年にドイツで出版されたケータリングの本『Harsdorfer』の1ページ。ここに示される複雑なナプキン折りは、16世紀から17世紀にかけてヨーロッパで広く用いられた



▲1912年に出版された英語の本から、トラブルウィットの花瓶



▶現在知られているうちで最初に出版されたトラブルウィット

念ながら、それがどのように折られていたのかは書かれていません。同じころ、作家のジョン・セルデンが宗教を「手品師の紙」にたとえています。曰く、「さあ、馬になった、さあ、ランプになった、さあ、猪になった、さあ、人になった。」しかし、これは本当の折り紙なのでしょうか、それともトラブルウィットなのでしょうか。ジョン・セルデンが何を指していたかは、よく分からないと言わなければなりません。1790年ごろには、ロンドンの東側にあるグリニッジ公園にいた盲目の男性についての記事があり、彼は紙でさまざまな形を作ることができると伝えられています。しかし、それは紙を切ったのでしょうか、折ったのでしょうか、それとも切りと折りとを組み合わせせていたのでしょうか。

もう一つ、これはほとんど知られていませんが、18世紀から19世紀にかけて大人のための折り紙の流れがありました。バレンタインカードです。2月14日のバレンタインデーには、愛し合う人同士でカードを贈りあう習慣があります[訳注: 日本では女性から男性にチョコレートを贈るように変化しています]。当時もっとも一般的な形だったのは、イギリスで「パズル財布」として知られている折り紙でした[訳注: 日本では「めんこ」とも呼ばれています]。連続するいくつかのメッセージを、バレンタインカードの外側と内側、さらにそれぞれのカドの外側と内側に書きます。カードを広げてゆくにつれて、メッセージを続けて



◀「パズル財布」の形をしたバレンタインカードの完成形。1790年ごろ

読んでゆけるようになっていきます。この折り紙のバレンタインカードは、16世紀から17世紀にかけてのドイツやスイスでキリスト教の洗礼を受けた幼児に授けられた「誕生証明」の折り紙に由来するのかもしれません。

18世紀になると、ヨーロッパにおける折り紙の事例は増加します。ニュルンベルクとドレスデンの博物館には、折り紙の兵士と馬が所蔵されています。スペイン生まれで現在はドイツに住むジョアン・サラスがこれらを調査し、当時のドイツで折り紙が広く行われていたことを明らかにしました。特に、ドイツの学校で折り紙が広範に利用されていました。しかし、同時代のイングランドに同じような折り紙の発展があった証拠はありません。イングランドで折り紙が利用されるようになるには、フリードリッヒ・フレーベルの幼稚園が伝わるのを待たなければなりませんでした。

フリードリッヒ・フレーベルは幼稚園の創始者です。彼は1782年にドイツで生まれ、1852年に同地で亡くなっています。彼は折り紙を使った教育を提唱し、はじめは基礎的な幾何学を教えるために折り紙を使いました。これを「学習の形」と呼んでいます。後に、子供たちの折り紙への導入として、彼は子供向けの伝承作品のいくつかを取り込みます。これを「生活の形」といいます。さらに、正方形の四隅を中心に合わせて折った形を基に、さまざまな装飾的模様を折ることを奨励しました。これを「美の形」と呼んでいます。これらの折り紙は、子供たちの芸術的・創造的能力を引き出すことを目的としています。フレーベルの死後、門人たちが幼稚園を世界中に広げました。ヨーロッパはもとより、アメリカ、そして



▲幼稚園の創始者フリードリッヒ・フレーベル(1782～1852)の版画

日本にまで伝わり、日本ではフレーベルの折り紙が日本の折り紙と遭遇したことで折り紙の発展が促進されました。幼稚園とそれに含まれるフレーベルの折り紙はイギリスにも伝わり、本も何冊か書かれま

した。フレーベルの折り紙についての最良の本は、1895年にイギリスで出版された『A Course of Paper-Folding (折り紙教程)』です。これを書いたのは、ドイツ人で当時イギリスに住んでいた女性エレノール・ヘルバートです。1870年ごろから1914年にかけて、フレーベルの折り紙は幼稚園の内外で折り紙に多大な刺激を与えました。フレーベルの伝統に属さない学校にも折り紙が広がり、それらの学校向けの本も書かれました。

19世紀の半ばから、イングランドの折り紙はちょうど何本かの紐を1本のロープに編み上げたような様相を見せます。第1に、世界中の多くの地域で広く知られていたのと同じ、子供向けの伝承折り紙がありました。残念ながら、子供向けの折り紙の記録はほとんど残っていません。もう1本の紐は、ステージマジシャンです。17世紀のトラブルウィットについてはすでに触れました。これは19世紀の後半にフランスで再び盛んになり、すぐにイギリスにも広がりしました。手品師や芸人のあいだで広範にトラブルウィットが復興しましたが、中でもよく知られていた演者としては、ロンドンで活躍していたイリス・スタニオンとデビッド・デバントが挙げられます。

手品師たちはそれ以外の種類の折り紙にも興味を引かれ、20世紀の初めには、現在の私たちが知っているような折り紙を含む本を書く人も現れました。たとえば、手品についての本を数多く著したウィル・ブライズが、1920年に『Paper Magic (紙の手品)』を、そして1923年に『More Paper Magic (続・紙の手品)』を書いています。これらは基本的には紙を使った手品についての本ですが、どちらにも多くの折り紙作品が収録されています。

しかし、折り紙を広げた手品師はイギリスの手品師ばかりではありませんでした。1870年ごろから、日本のステージマジシャンがヨーロッパや北アメリカに巡業するようになります。彼らのトリックの中に「羽ばたく鳥」や「ぴよんぴよん蛙」などの折り紙が含まれていました。彼らが行ったのは、あらかじめ折り目のついた紙を、ステージライトのまぶしい光の中で丸めるようにしてすばやく鳥を折り、マジックで出現したかのように観客に見せ、さらに翼を羽ばたかせて驚かせるというもので

○David Lister(デビッド・リスター)=1930年生まれ。5才のときに父親などから折り紙を習い、それ以来興味をもつ。1953年ごろから本格的に折り紙の研究を始める。British Origami Societyの創設にも尽力し、1998年から2002年まで会長を務める。現在はBOSの副会長。



した。不思議なことに、折り鶴は日本の子供なら誰でも折れるにもかかわらず、羽ばたく鳥は日本ではほとんど知られていません。では、日本の手品師たちはどのようにして羽ばたく鳥にたどり着いたのでしょうか。

羽ばたく鳥はイギリスを含めたヨーロッパに直ちに影響を及ぼしました。最初の折り図はフランスで木版で制作され、その後すぐ、1886年に同じ図がイギリスの少年向け雑誌『The Boy's Own Paper (少年のための雑誌)』で再版されました。その後、イギリスやほかの国でも何冊かの本が書かれています。『The Boy's Own Paper』では、その後数年にわたって、ぴよんぴよん蛙など海外から伝わった折り紙の折り図が掲載されました。

動力つきの飛行機が発明されたことで、少年たちのあいだで折り紙のダーツやグライダーの人気がおおいに高まりました[訳注: 日本では「紙飛行機」と総称されています]。少女たちも独自の折り紙をしており、その中には、「塩入れ」や「女学生の託宣」、アメリカでは「虱とり」とも呼ばれる折り紙がありました[訳注: 日本では「色かえ遊び」、「バクバク」などと呼ばれています]。

イギリスにおける折り紙のもう1本重要な紐として、室内での趣味や科学的な娯楽についての本があります。そのような本の中で最初期のものには、1881年に出版された『Cassell's Book of Indoor Amusements (カッセルの室内娯楽の本)』などがあります。それに続いて、簡単な手品と室内ゲームや科学とを混合して娯楽と教育とを組み合わせた本が数多く書かれました。いくつか例を挙げると、1904年にはJ・K・ベンソンによる『The Book of Indoor Games (室内ゲームの本)』が、1912年にはモーリー・アダムスによる『The Boy's Own Book of Indoor Games (少年のための室内ゲームの本)』が出版されています。後者には折り紙や切り紙についての章があるほか、トラブルウィットについても詳しく説明されています。現在でも入手可能な本としては、1935年に出版されたR・M・アブラハムの『Diversions and Pastimes (娯楽と趣味)』があります。これにも、折り紙についての章とトラブルウィットについての章があります。

(第2部へ続く)

折紙図書館の本棚から

From the Bookshelves of the JOAS Library

小松英夫 Komatsu Hideo

この連載では、折紙学会図書館に所蔵されている資料の中から、興味深いものを選んでご紹介しています。折紙図書館の蔵書は、折紙探偵団ホームページから検索できます。詳しくは、<http://www.origami.gr.jp/Libra/>にアクセスしてください。

4冊目『折り紙読本 外国篇』ロバート・ハービン著／まま・さとし訳編

"Paper Magic" by Robert Harbin, translated and edited by Mama Satoshi

19 60年に緑地社から発行された『折り紙読本 外国篇』(写真1)は、1956年にイギリスで出版されたロバート・ハービン氏の初の単行本『Paper Magic』(写真2)の日本語訳です。原著は、様々な国で翻訳され折り紙の普及に貢献した歴史的な本として知られていますが、日本でわずか4年後に翻訳・出版されていたことにまず驚きを覚えます。

『折り紙読本 外国篇』と題されているのは、同じ緑地社から先に出ていた『折り紙読本1 あそびから創作まで』(吉澤章・著、1957)を踏まえた書名だからと思われる。ちなみに『折り紙読本1』は、のちの1974年に鎌倉書房が出版した『折り紙読本I』(現在はニュー・サイエンス社より刊行)と同内容の本でした。当時、緑地社は折り紙の普及を目指していたらしく、『折り紙読本 外国篇』の奥付のあるページに、社としてのメッセージを載せています。特製の折り紙用紙の販売も行っていたり、折り紙関連書の出版計画などがあったことがうかがえますが、結局は、吉澤本とハービン本の2冊のみの刊行にとどまったようです。

著者のハービン氏については、リスター氏の「過去の折り紙に学ぶ」の記事

でも触れられるでしょうから、ここでは省きます。気になるのは、訳を手がけた、まま・さとし(真間聡)氏ですが、情報は少なく、折り紙人であったかも定かではありません。調べてみると、やはり緑地社で児童書の翻訳を少なくとも1冊手がけているので、そのコネクションからの仕事だったのでしょうか。

以下、『Paper Magic』の紹介も兼ねつつ、内容を見ていきましょう。

本の構成は、『Paper Magic』から少し変更されていて、原著にあった前書きや「かや草」の写しなどはカットされ、代わりにカラー口絵が加わっています。折り図本編は、原著のレイアウトそのままにテキストのみ日本語に置き換えられたかたちとなっています(図1)。

冒頭の注意書きでは折り紙用語の説明があり、その中には折り技法に関するものが5つあります。つまみ折り、ひだ折り、かえし折り、つぶし折り、花びら折りです。それぞれ原文では、Pinch Fold、Crimp、Reverse Fold、Squash Fold、Petal Foldとなっていて、英語圏で現在も使われているこれらの用語が登場した最初だそうです。日本においても、「基礎折り」という考え方は広がっていたものの、このような折り技法に対して定義・命名を行っている本はごく希でした。なお、「Reverse Fold(かえし折り)」は、中割り折りとかぶせ折りの区別をしていません。



写真2 『Paper Magic』表紙。1964年刊のペーパーバック版でオリジナル版とは表紙の色が違っています。寄贈していただいた山口氏はマジックショップで購入したとのこと

筆者の個人的な関心から、つい折り図表現に注目してしまいましたが、『Paper Magic』の折り図は、一見して独特なものです。現代の折り図は、真上から見下ろす視点で描かれることがほとんどですが、『Paper Magic』では、斜めからの視点であたかもテーブルの上に置いた折り紙をそのまま写し取ったかのような遠近法をとった図となっています。テーブ



写真1 『折り紙読本 外国篇』表紙。全ページB5サイズの、薄く小さなペーパーバック本ですが、濃い内容です

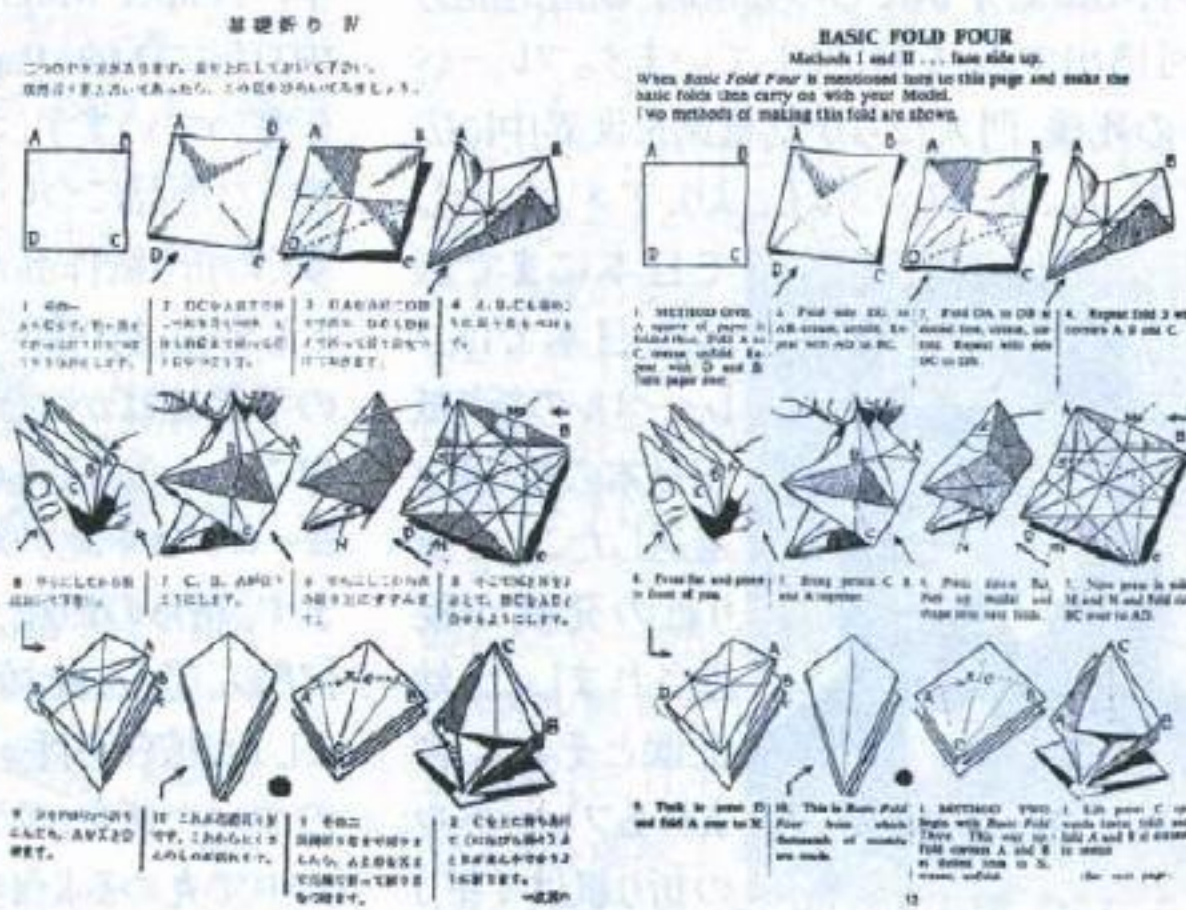


図1 オリジナルと訳書の折り図ページの比較。図を見る順番は蛇行方式

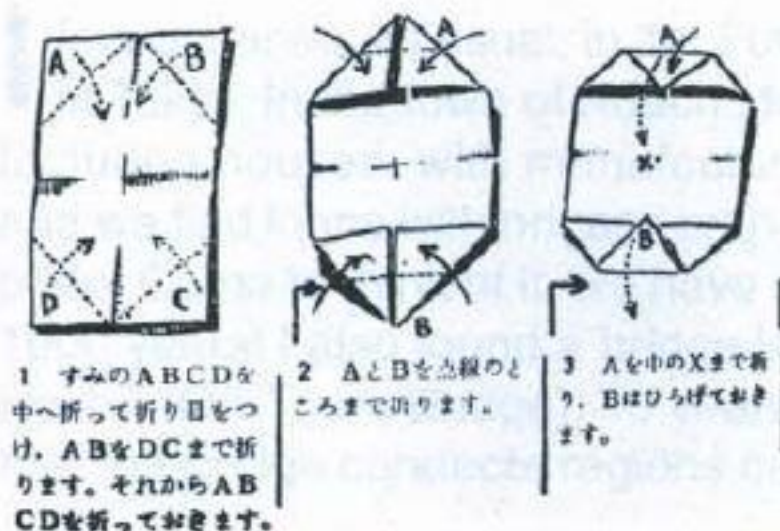


図2 矢印の表現に注目。2種類の矢印が使われていて、「これからの動き」を点線の矢印で、「動いた軌跡」を実線の矢印で表している点に工夫が見られます

ルに落ちる影まで描かれた図からは、紙の立体感を強く感じることができ、これはこれで分かりやすい表現法です。他に特徴的な点としては、矢印の描き方が挙げられるでしょう(図2)。これらの図は後に「悲しきカンガルー」のヒット曲を生むマルチタレント、ロルフ・ハリス氏の手によるもので、氏は執筆時にはまだ20代前半の若さでした。

収録作品は、世界から集められた伝承折り紙が約半分、残りはハービン氏、ハリス氏他の創作作品で、易しいものから始まり、本が進むにつれて難しい作品にチャレンジできるような構成になっています。多くは不切正方形一枚折りですが、切り込みや描き込みを大胆に用いたものや、長方形用紙を用いた作品もあります。また、紙幣から折る作品もいくつか載っています。『Paper Magic』に100種ほどの作品が収録されているのに対し、『折り紙読本 外国篇』ではページ数の都合からなのか分かりませんが80種弱といくつかの作品が外れています。

巻末には、折り紙についての概説「世界の折り紙」が8ページにわたって掲載されています(原著では巻頭に掲載)。「折り紙とは、いったいなんでしょうか?」との問いかけから始まり、まずはじめに折り紙の定義「一枚の紙を折って、望みの形—型(モデル)とよばれる—を作る芸術」が提示されます。さらに、糊やはさみを使わないこと、描き込みが必要ないこと、平らに折りたたまれること、をルールとして挙げて、後に内山興正氏が用いたのと同じ「純粹(pure)折り紙」という表現も登場しています。と同時に、収録作品でこれらのルールに該当しないものを例に出しながら、時に

は「目的は手段を正当化」するとして例外を認めています。

以降のテキストはトピック別に書かれています

世界の折り紙

- ・折り紙の起源と発達
- ・一千年前の中国の紙
- ・「折り紙」—古代日本の芸術
- ・他の各国における折り紙の発達
- ・この本を書くようになった理由
- ・新しい型の創作

「折り紙の起源と発達」の項では、「よほど大胆でなければ、いつどこで折り紙がはじまったか、あえてきめることはできません」「折り紙の元祖は木綿と絹の紙を巧みに使いこなした中国人か日本人だったというのが、いちばん確かなように思えます」と書かれていて、当時、日本で出版されていた本でも「折り紙は日本独自のもの」と紹介していたものが少なくなかったことを考えると、理性的な表現であると言えるでしょう。

「新しい型の創作」の項では、「基礎折り(Basic Folds)」の重要性が語られています。それまであったヨーロッパの伝承折り紙の総数に匹敵する数の作品を、ハリス氏とともにわずか数ヶ月で創作したと明かし、その秘密こそ基礎折りにあると述べています。そして、基礎折りを学ぶことによって、それらの「はかりしれないほどの創造的可能性」を探ることができると、読者に対して創作をすすめています。

本書の中で、基礎折りはI~VIまで6種類があり、これは著者自身によって「新しい体系」とされています。現在の用語でいうと、基礎折りIは座布団折り、基礎折りIIは座布団折り+ぶたの基本形、

○小松英夫(こまつ・ひでお)=1977年生まれ。図書館担当。折り紙の歴史についての知識不足を痛感しているこの頃です。



基礎折りIIIは正方基本形、基礎折りIVは鶴の基本形、基礎折りVは風船の基本形、基礎折りVIは対角カドのみ中心に合わせて折った六角形で、それぞれ折り図の中で段階的に紹介されています。批判的に見るならば、最後の基礎折りVIIに、分類の必要があるのかは甚だ疑問です。また、カエルの基本形を用いた作品が複数あるにも関わらず、基礎折りとは見なされていないことも不思議です。基本形の分類としてはまだ発展途上のものだったと言えるでしょう。

「世世界の折り紙」の最後は、当時ハービン氏と交流のあったアメリカ出身の折り紙研究家ガーション・レグマン氏の言葉を引用して結ばれています。少々長くなりますが、ハービン氏が「これ以上、巧みな説明があるでしょうか」と表現するその文を紹介して本稿も終わりにしたいと思います。半世紀も前の言葉ですが、今現在でも思わずうなずいてしまう力強さを持っています。

「真に芸術的な折り紙は、手先の器用さから生まれてくるのではない。~中略~最も必要なのは『想像力』である。基本的な部分を折ったとき、平面と角の寄りあいとしか見えないものの中に、折り手が、もっと手をかけて折っていけば紙から浮びあがってくる、鳥や動物やおもちゃを見る瞬間—(不完全で、形を成していないが、それでも見えるということが)—あるものだ。これこそが、美の追求としての折り紙を、遊びや神経をやわらげるための折り紙から、はっきりと区別する“想像の瞬間”なのである。~後略~」

参考文献:『The History of Paper Folding in Britain』David Lister, British Origami Society, 1975

折紙散歩

Origami-Sampo
to Unexpected Directions

前川 淳

Maekawa Jun



第4回 陸奥の安達の原の駅前に 折鶴あると聞くはまことか

Paper Cranes in Fukushima Prefecture

東京には空がないが、福島にはバスの便がない。秋色深まるある日、東北新幹線・新白河駅に降り立ち、一応は調べておいたローカルバスに乗ろうとしたのだが、どうやら情報が古かったようで、バス停の時刻表をためつすがめつしても、2時間は待たなければいけないことが判明した。折り悪しく、レンタカーも出払っているという。目的地は駅から約6kmである。こういうとき、タクシーという選択肢はとりたくない。タクシーの関係者には申し訳ないけれど、便利だが自由ではないような気がするのである。行き先は決まっているのだが、そこに行くことが目的ではなく、周辺をぶらつくことが目的であり、探すことも楽しみだからである。第一、運転手さんに場所を説明するのが難しい。お目当ては、なんの変哲もない橋なのだから。

それは、折鶴橋という橋である。ネットで名前のみ発見したもので、福島県西白河郡西郷村の東部、阿武隈川に架かっている。名前の由来は地図を見てすぐにわかった。折口という集落と鶴生(つりう)という集落を結んでいるのだ。すこし前の地図には記載がないので、新しい橋であることも知れた。歴史もなく、折鶴伝説が秘められた地という可能性は皆無である。しかし、わたしが行かなくてだれが行く、てなもんで、行くことにした。

国道289号線をただただ歩きながら、289って17の2乗なんだ、すごいなあ(なにがすごいんだか)などと考え、沿道の「ジンギスカン(料理)よしつね」といった

店の名前に感心し、ペットボトルの水を飲み飲み、国土地理院の地図はなんで石碑の位置にこんなに詳しいのだろう、昔はそれぐらいしか目印がなかったのだろうなあなどと思い、1時間半ほど歩いて、目指す折鶴橋のたもとにたどりついた。こういう無意味な行動をしていると、現地になにもないことさえ期待するのだが、今回はちょっと違っていた。かなり優良な物件だったのだ。1994年に架橋されたその橋には、折鶴の絵が描かれていたのである。「折口と鶴生で、折鶴だっぺ。ええんでないかい。どうせなら折鶴の絵も描くっぺ」(福島弁は推測)といった経緯であろう。

あれが阿多多羅山。あの光るのが阿武隈川。そしてこの橋が折鶴橋。…と見上げた山は、あとで地図で確認すると、阿多多羅山ではなく、旭岳であったが、「ほんとの空」の下、折鶴橋のたもとではスキの穂が揺れていたのであった。

大満足したわたしは、足よりも軽く、再び1時間半歩いて新白河駅に戻った。

東京には空がない、とか、あれが阿多多羅山、とか、ほんとの空とか、高村光太郎の『智恵子抄』のネタである。純愛モノの元祖だが、最近のひとは知らないかもしれない。知らないひとは調べてもらうことにして、光太郎の愛妻・智恵子が、統合失調症を発病してから、折り紙を折ったという話は、知るひとぞ知るところだ。

「智恵子が病院に入院して、半年もた



折鶴橋(福島県西白河郡西郷村)
Oritsuru bridge in Saigo village

ち、昂奮がやや鎮静した頃、私は智恵子の平常好きだった千代紙を持っていった。智恵子は大へんよろこんで其で千羽鶴を折った。訪問するたびに部屋の天井から下つてゐる鶴の折紙がふえて美しかった。そのうち、鶴の外にも紙灯籠だとか他の形のものが作られるやうになり、中々意匠をこらしたものがぶら下つてゐた。すると或時、智恵子は訪問の私に一つの紙づつみを渡して見ろといふ風情であつた。紙包をあけると中に色がみを缺で切つた模様風の美しい紙細工が大切さうに仕舞つてあつた。其を見て私は驚いた。其がまつたく折鶴から飛躍的に進んだ立派な藝術品であつたからである。」(『智恵子の紙絵』高村光太郎)

折鶴などの折り紙造形よりも、われわれが嫌う(?)ハサミをつかった切り紙のほうが芸術であるというのは、光太郎さんに異を唱えたいところだが、まあ、それはおこう。智恵子さんに登場願ったのは他にも理由があるのだ。今回の折紙

found cranes, as usual, in the Fukushima Prefecture, 200km to the north of Tokyo. In the town of Adachi, for example, we find many paper manufacturing houses, with manufacturing lasting for more than 1000 years, and we find logos with origami cranes which show the identity of the town's pride. Come to think of it, we have not had an origami crane for as long as 1000 years! I also found a bridge in the Village of Saigo called "Ori-Tsuru Hashi" (Ori-Tsuru Bridge), 10 years old or less (grin), named after the fact that the bridge connects regions called Origuchi and Tsurui.



大魔神にはなんの意味もありません。タイトルは、拾遺和歌集の平兼盛「陸奥の安達の原の黒塚に鬼籠もれりと聞くはまことか」からです。

○まえかわ・じゅん 折紙創作・研究家。折鶴モノのコレクター。東京生まれで東京在住だが、1年の約1/3は、天文台の仕事のため長野・山梨で過ごす。好きなもの：阪神タイガース、星空、書店、喫茶店、幾何学的調和。

散歩・福島篇のもうひとつの目的地は、西郷村から北に60km、智恵子さんの出身地・安達町(現二本松市安達)なのである。これは、同地に、折鶴を刻印したマンホールの蓋があるという情報入手していたからである。

もともと、マンホールの折鶴と智恵子に、直接の関係はない。同地方には、上川崎紙という、千年の歴史を持つ和紙があり、そのシンボルなのである。ただ、上に引用した、郷土の誇りである智恵子のエピソードなども結びつけて、智恵子と折鶴を盛り込んだ『折鶴の舞』なる歌もあることが、小松英夫さんによって発見されている。また、ずばり『智恵子抄』という歌謡曲もあり、これにも折鶴がでてくるので、まったく関係ないわけでもない。

せっかく来たのだし、智恵子記念館にも寄るころづもりだったが、わたしは、第一の目的がマンホールというふざけた旅人である。しかし、わたしは安達を甘く見ていた。東北本線・安達駅を降りた瞬間、立ちつくすことになった。これを見て立ちつくすのはわたしぐらいだろうが、駅前に、すばらしい折鶴が設置さ

れていたのである。折鶴のかたちをした巨大なイルミネーションだ。びっくりした。ただ、これは、その写真をどこかで見たことがあった。そう、これは、以前、佐藤健太郎さんが道の駅・安達で見たものを、駅前に設置しなおしたものであった。そのありがたみは、夕闇が迫り、灯が点されなければわからない。しかし、わたしには、もうこれでお腹いっぱいなのであった。



マンホールの蓋
(福島県二本松市安達)
A Cap of Manhole in Adachi town



安達町の街灯
A Lamppost in Adachi town

なお、記念館の智恵子の紙絵(ほとんどは実物ではなく写真だが)は、思っていた以上によかった。一般的な切り絵、つまり、コントラストや輪郭を強調した画面構成ではなく、近くでよく見るとかたちの繊細さが伝わるという作風で、ちいさな写真ではそれがまったくわからない類いのものなのである。『智恵子抄』の智恵子の作品というのではなく、それ自体に力があつた。認識不足でした。ごめんなさい。

今回は、なんというか、徒歩がテーマになってしまったので、駅から遠い「和紙伝承館」にまでは足をのばさなかった。電車の都合もあって、イルミネーションが点灯する時間までも待てなかった。しかし、たぶん、この周辺にはまた来る。西郷村の折鶴橋と、折鶴の町(仮認定)・安達が、ともに阿武隈川で結びついているのは偶然だが、偶然は重なることがある。桑折(こおり)町なんか怪しい。



東北本線安達駅
Adachi Station

安達をすっかり気に入ったわたしは、智恵子記念館に向かって、マンホールを探して歩き出した。マンホールはすぐに見つかった。同じデザインで、鉄のものと、マンホールというには小さいプラスチックのもの(水道・ガスの類いか?)があつた。鉄のものも小型で、マンが入れるホールではない。まあ、そんなことはどうでもよい。わたしは、さらなる折鶴物件を発見したのである。街灯の折鶴の絵である。すごいぞ安達。智恵子さんと安達原の鬼の伝説と、それに折鶴さえあれば、全国区だぞ。なんで二本松と合併したんだ。もっと頑張れば、西の桑名、東の安達として、折鶴の町を認定するぞ。わたしが認定しても、ありがたみはないけれど。

■今、折り紙で何をすべきか。技術向上と創作方向性の模索が、互いにフィードバックしながら発展を続けています。すでにやり尽くされた感のある分野に、意外な注目材料が隠れているかもしれません。

「パンダ」作：宮島 登 (P.22)

Panda: Miyajima Noboru (P.22)

■さまざまな作品がすでに存在している人気題材に対し、自分ならではの視点を軸にして特徴ある味付けを盛り込む。この非常に困難なチャレンジで、宮島氏がたどり着いた結論がこの形状でした。前方に足を投げ出したポーズで、重量感にあふれる体型がさらに強調されているようです。



「ネズミ -15°」作：西川誠司 (P.29)

15°-Based Mouse: Nishikawa Seiji (P.29)

■折紙者にとっては空気のように当たり前になっている22.5°の角度構成。ここから敢えて離れることによって始めて見えてくる世界に、西川氏が強く惹きつけられています。耳や尻尾にあらわれたインサイドアウト部分が、ネズミのかわいらしさ、繊細なイメージをさらに増幅させています。



BOS40周年記念コンベンション展示作品より

Exhibits from the 40th Anniversary BOS Convention

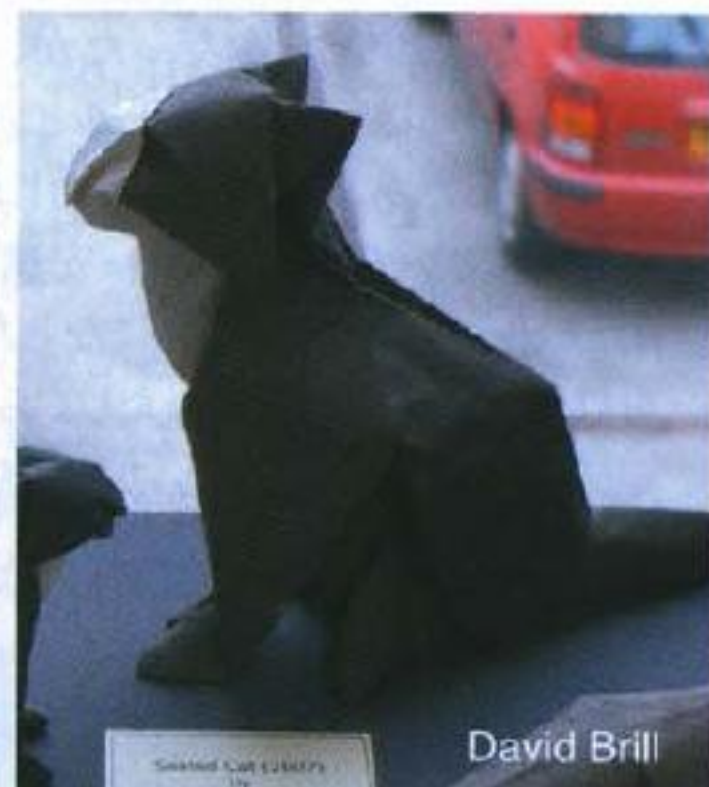


Max Hulme

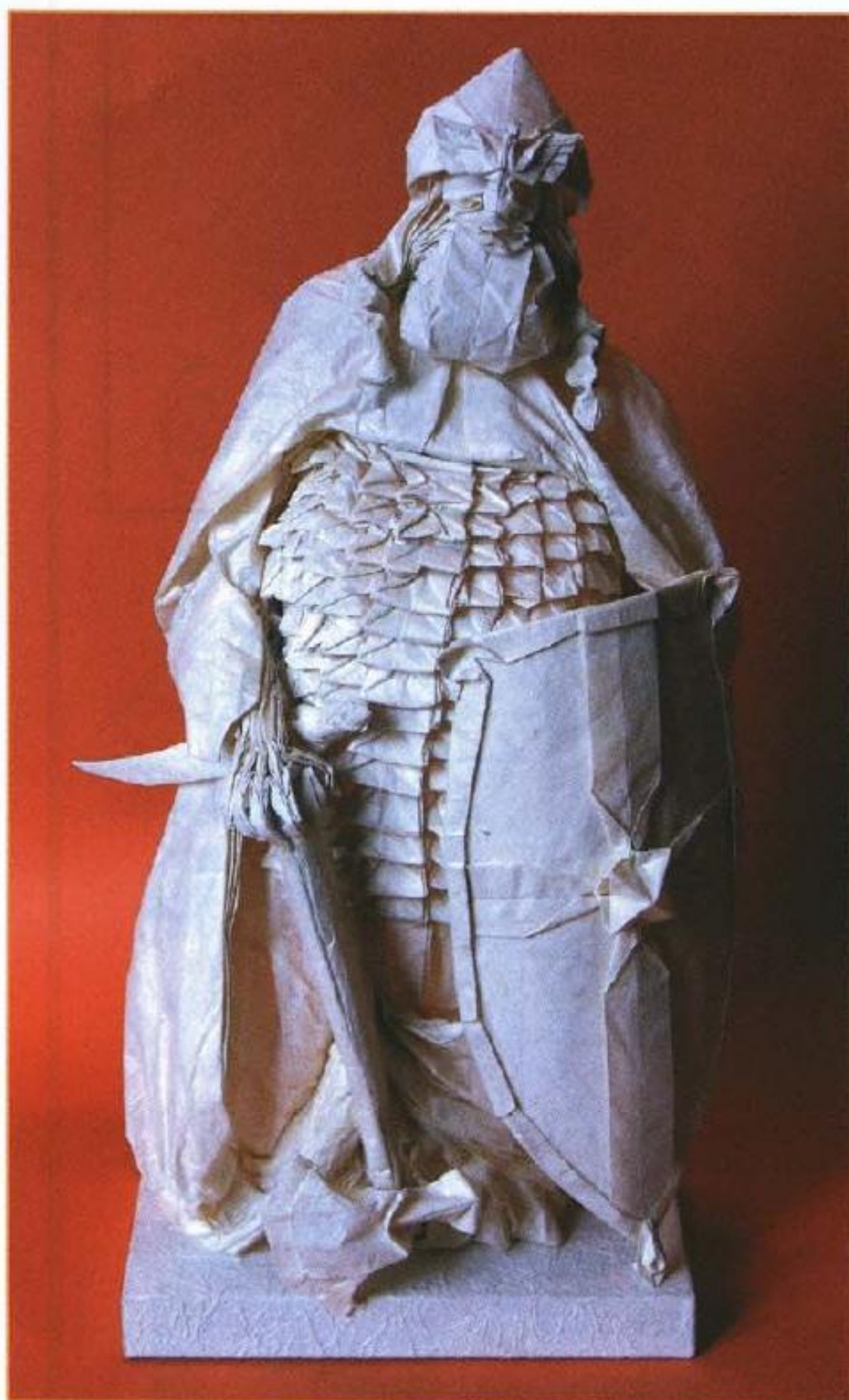
▲21cm四方の紙で折ったユニットで組まれたモザイク画。マックス・ヒューム氏を中心に、コンベンション参加者も一緒に折って、最終日に完成。600個以上のパーツを使っている



Eric Joisel



David Brill

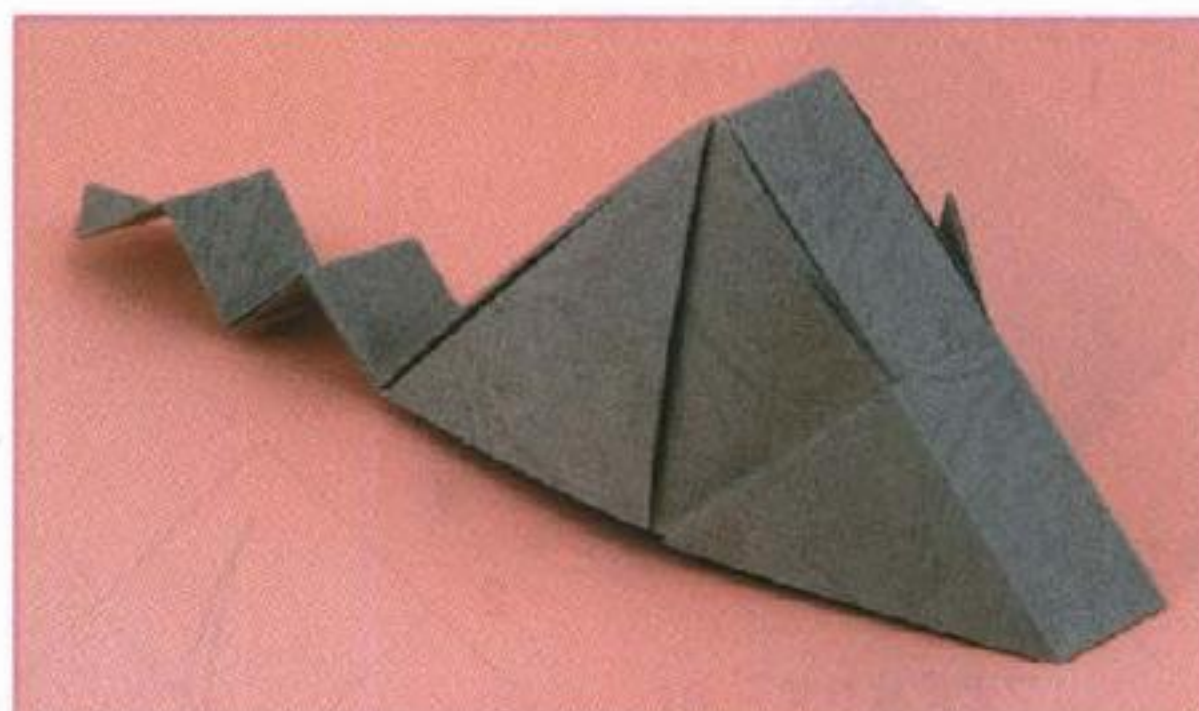


「バーバリアン」

作：エリック・ジョワゼル (P.11)

Barbarian:Eric Joisel (P.11)

■兜に付いた彫刻や鱗状になった胴体の鎧など、徹底したディテールの作り込み。そうした情報量に充ち満ちている各パーツを、さらに統合して全身とする絶妙なバランス感覚。さらなる新境地を開拓してゆくジョワゼル氏の最新作品群は、無差別攻撃とも言えるほどの圧倒的な印象を放っています。



「タナカネズミ」 作：田中将司 (P.8)

Tanaka Nezumi' (nezumi is this rat's Japanese name) :
Tanaka Masashi (P.8)

■小石や木材の切れ端になにかの形を見いだした瞬間、それ以外の何物にも見えなくなってしまうことがあります。本作では一見単純な三角形の箱形が、コミカルなキャラクター性までそなえたネズミへと見事に変身しました。ジグザグの尻尾など、必要最小限かつセンスあふれる追加部品がポイントです。



Rikki Donachie



Photo : Robin Macey

会場敷地内で、参加者全員が揃って記念撮影 ▶

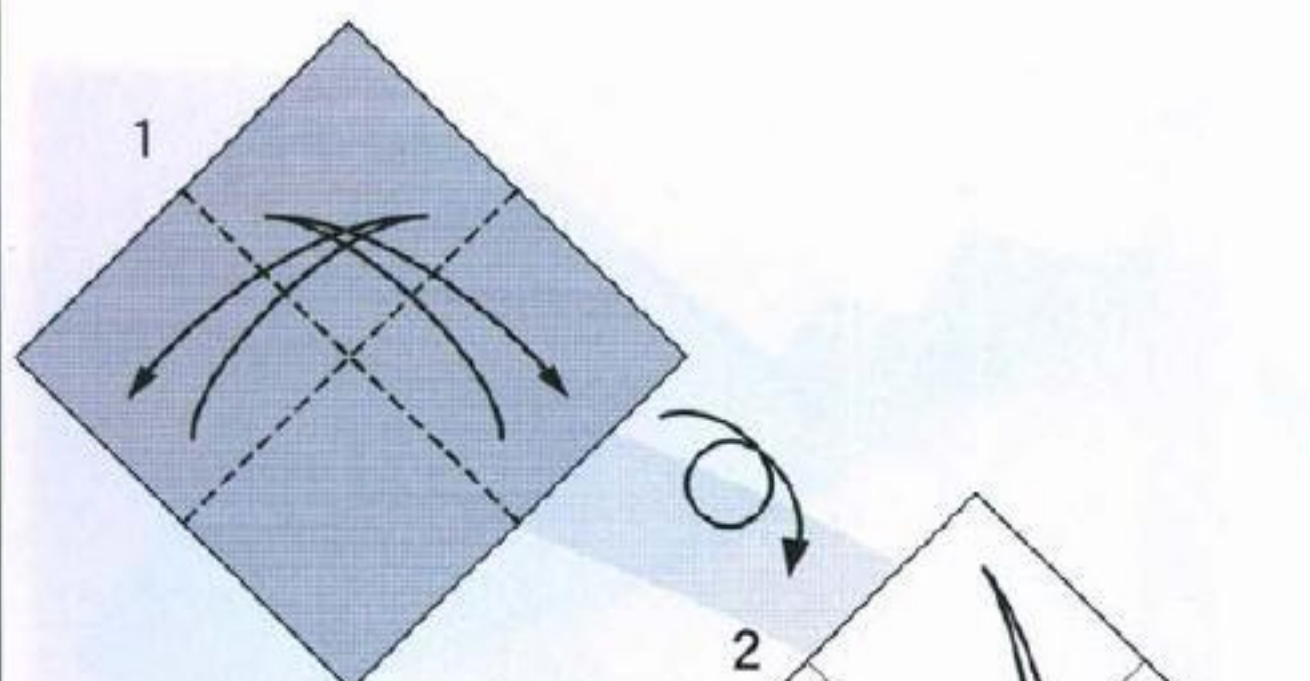
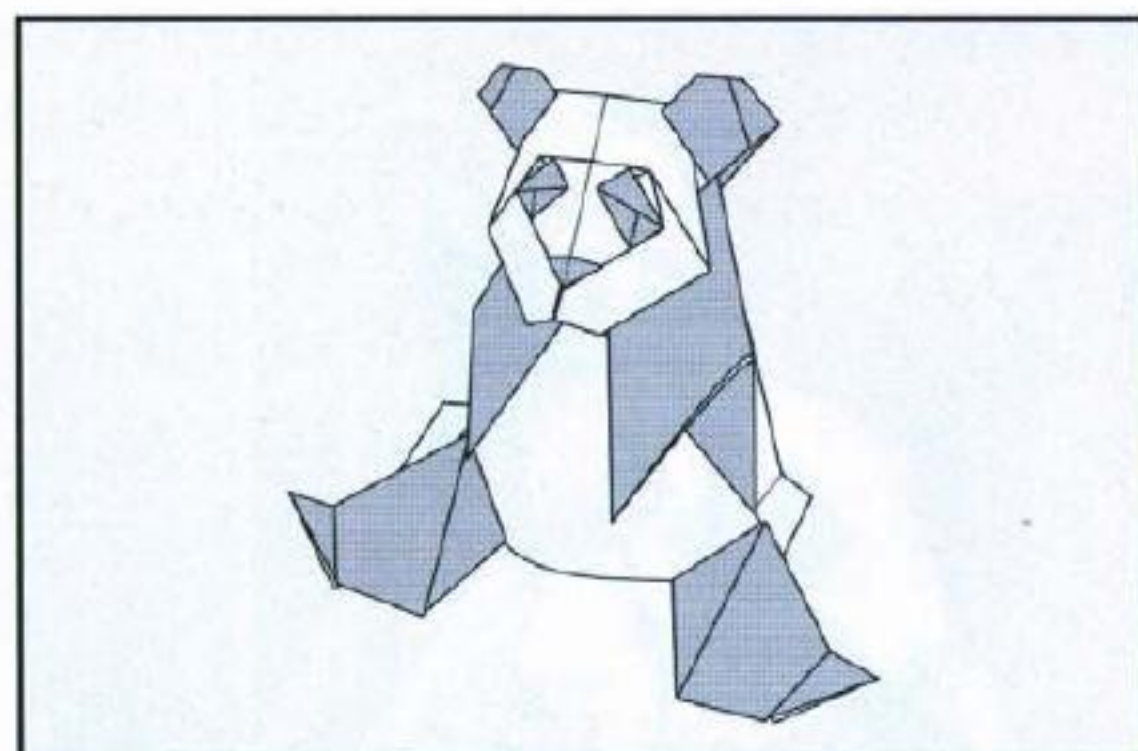
パンダ

作／図 宮島 登

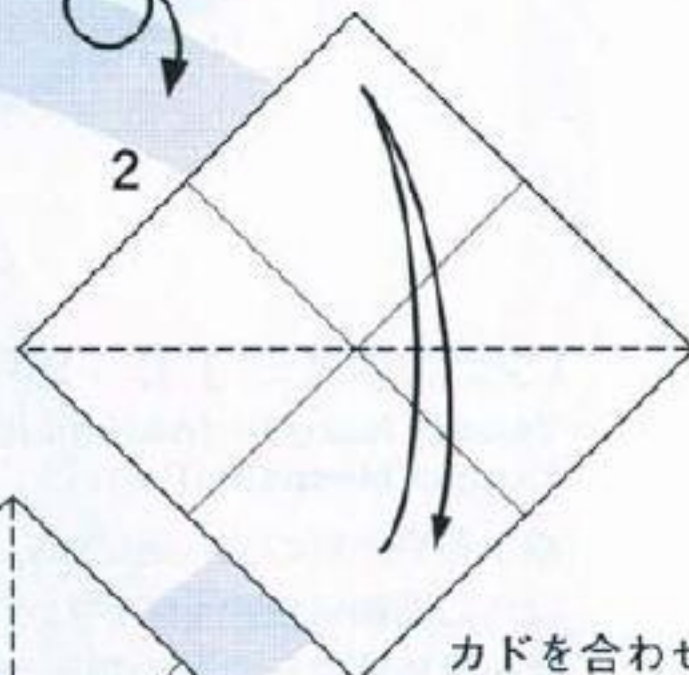
Design & Diagrams By Miyajima Noboru

創作 2007 年 4 月

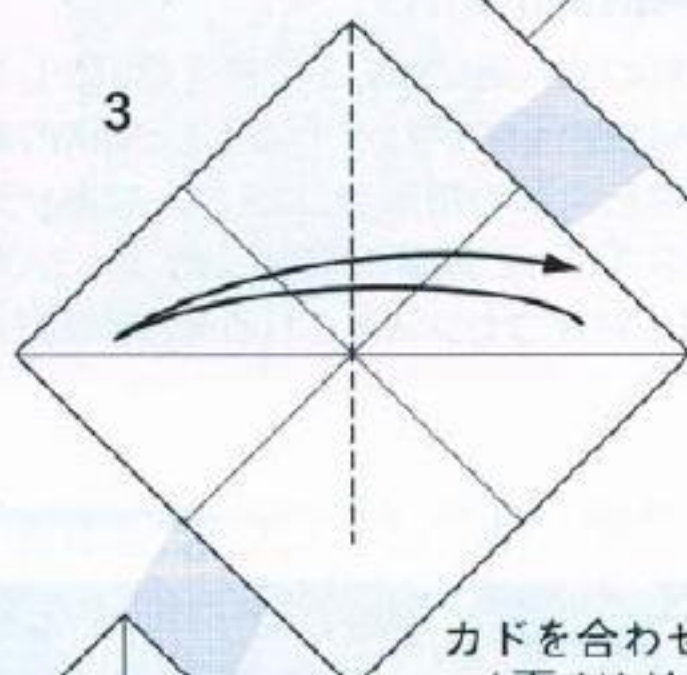
作図 2007 年 8 月



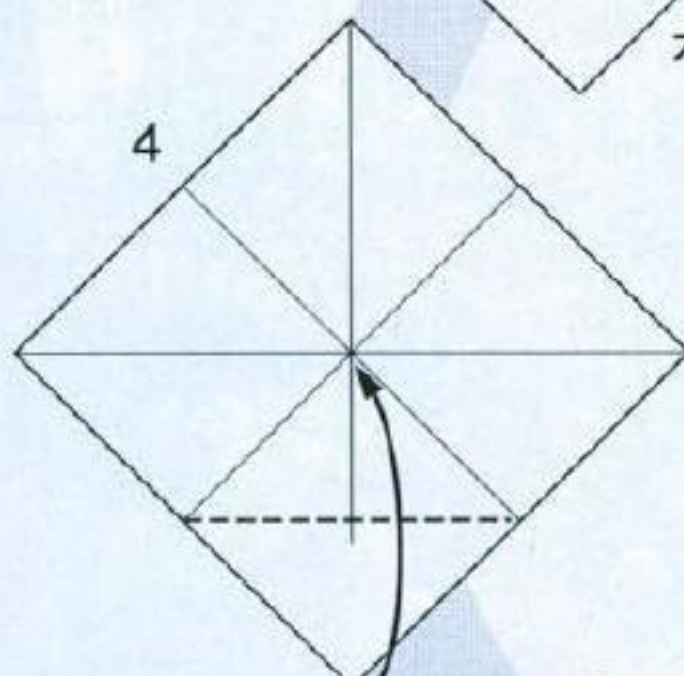
フチを合わせて
折り筋をつける



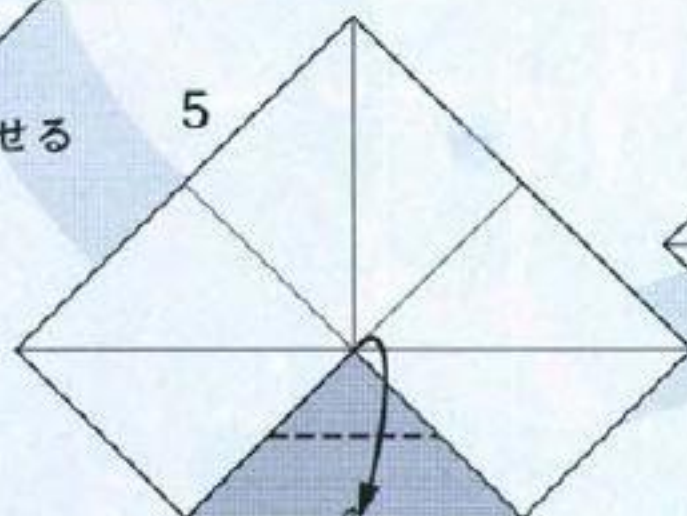
カドを合わせて
折り筋をつける



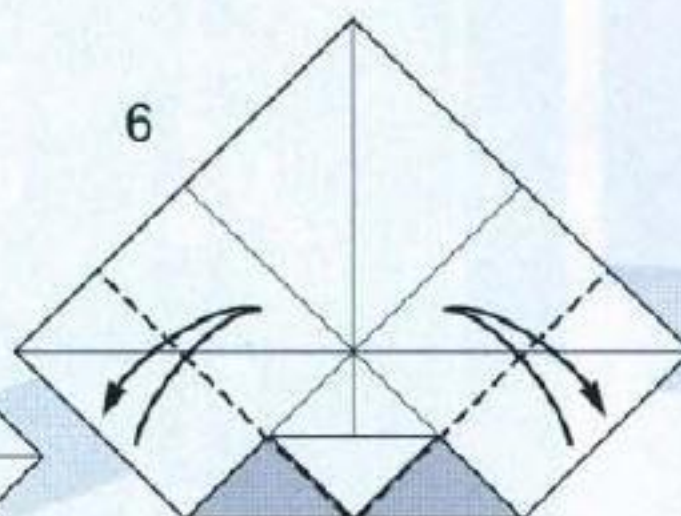
カドを合わせて折り筋をつける
(下 1/4 は折り筋をつけない)



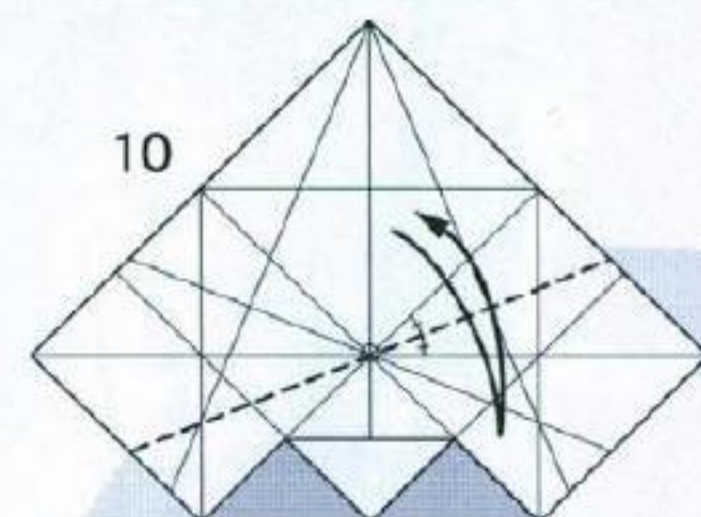
カドを中心に合わせる



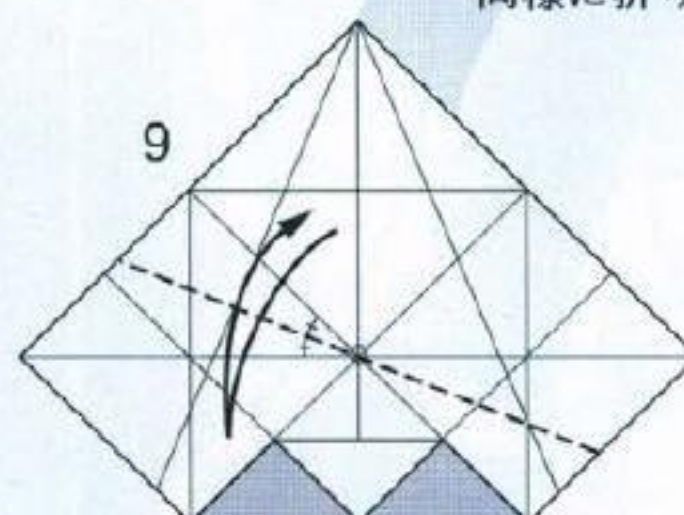
カドをフチに合わせる



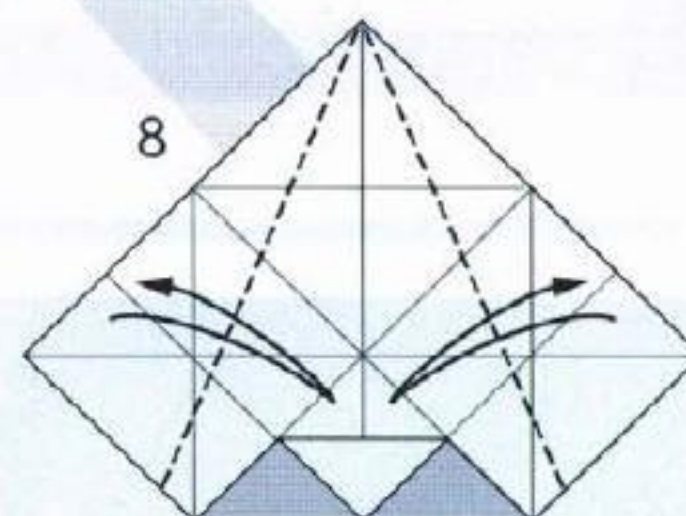
フチを折り筋に合わせて
折り筋をつける (2箇所)



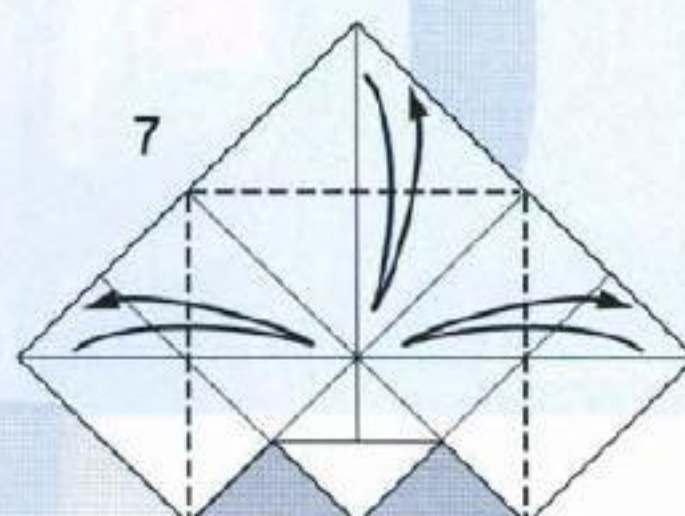
同様に折り筋をつける



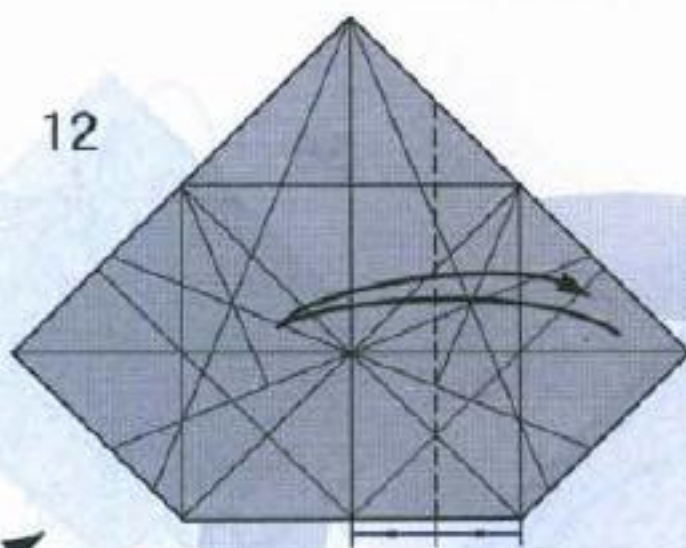
中心線を通る線で角度を2等分して
折り筋をつける



フチを中心線に合わせて
折り筋をつける (2箇所)



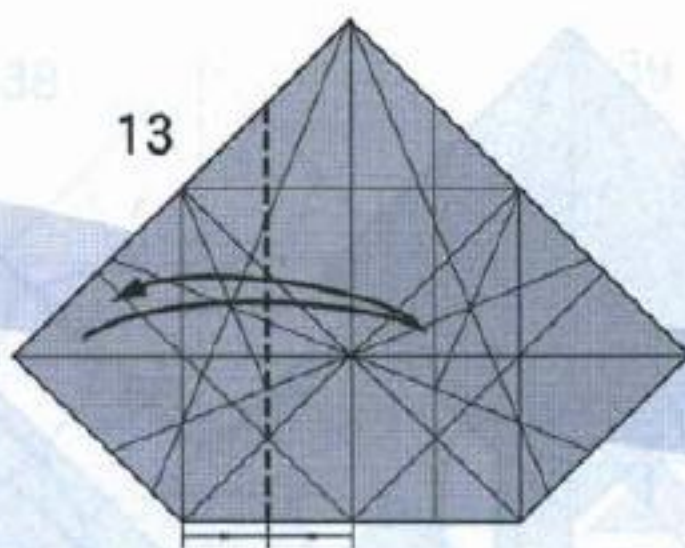
カドを中心に合わせて
折り筋をつける (3箇所)



12

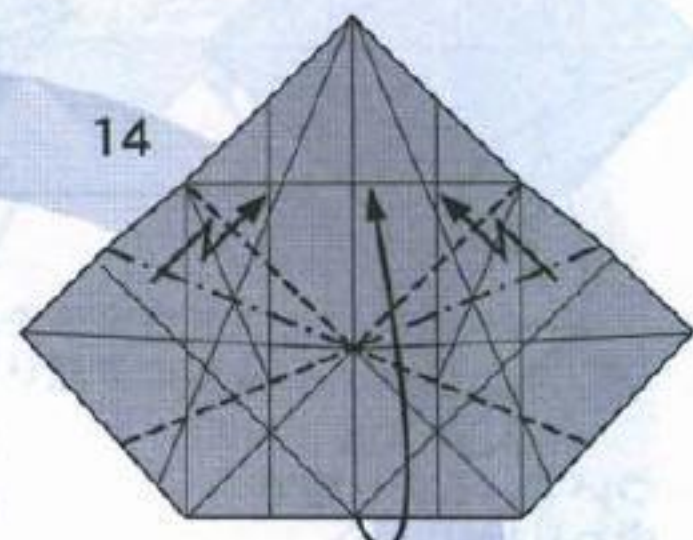


折り筋と折り筋を合わせ、
辺2等分して折り筋をつける



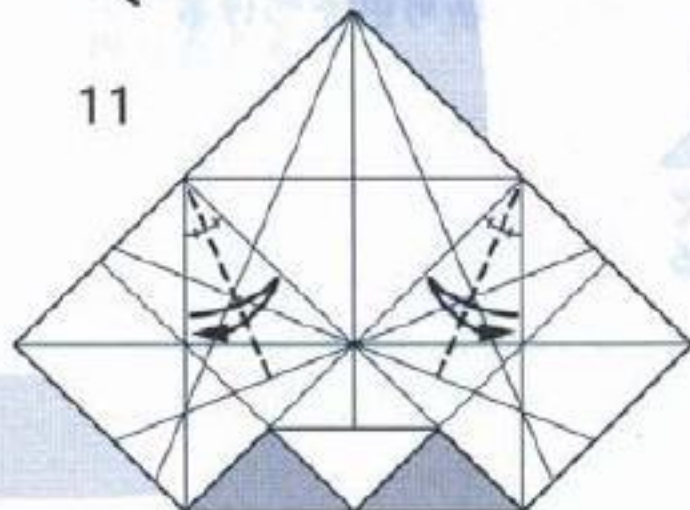
13

折り筋と折り筋を合わせ、
辺2等分して折り筋をつける



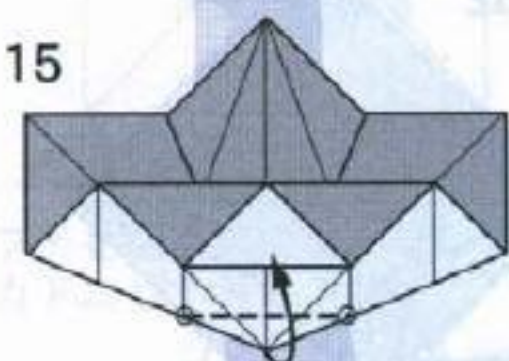
14

中心に寄せるように段折りしながら
下のフチを折り上げる



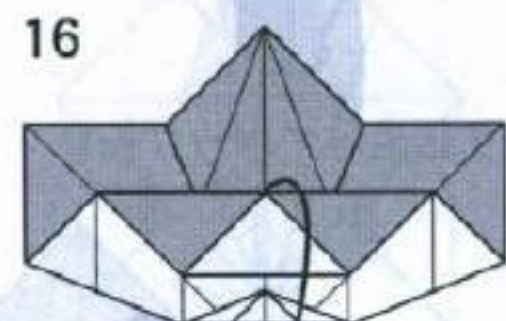
11

フチを折り筋に合わせ、
角度を2等分して
折り筋をつける (2箇所)



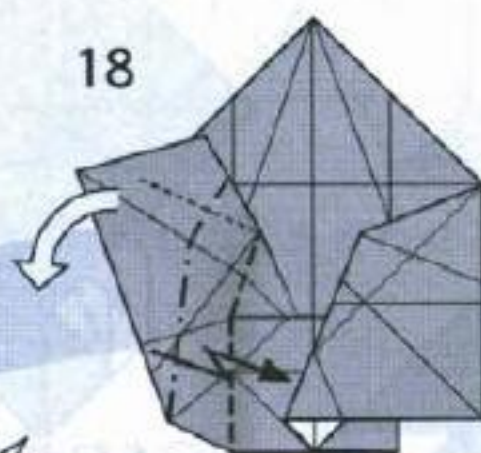
15

○を結ぶ線でカドを折り上げる



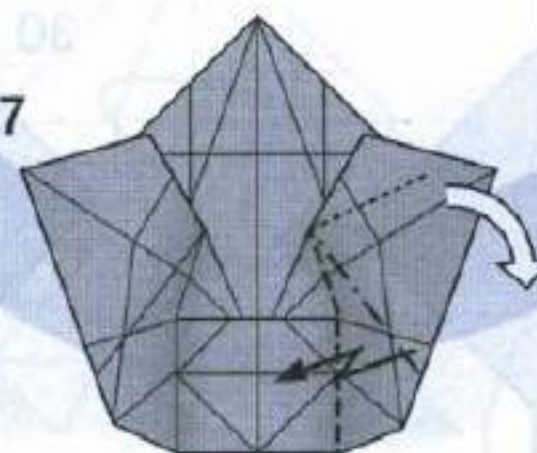
16

カドを折ったまま
下に紙を開く



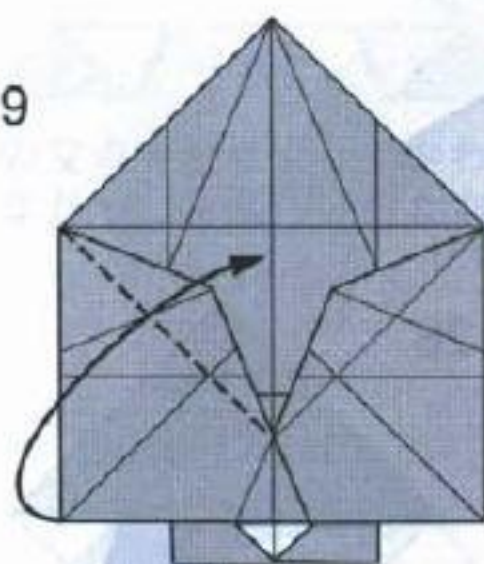
18

同様に折る



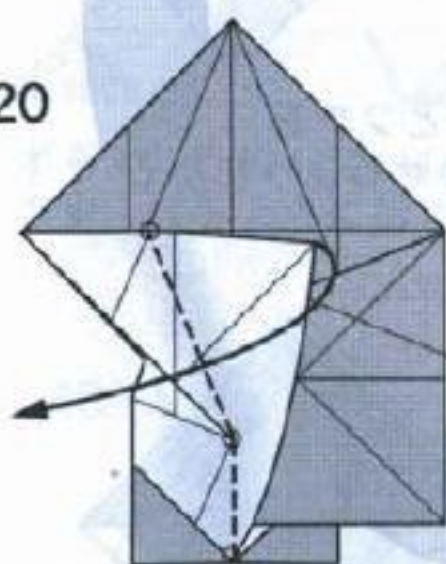
17

中心に寄せるように段折りする



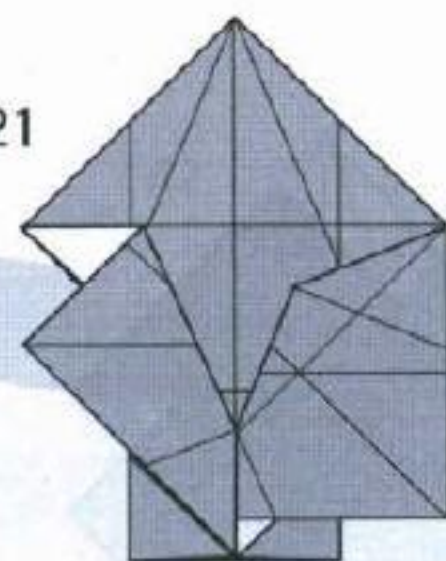
19

ついている折り筋でカドを
ななめに折り上げる



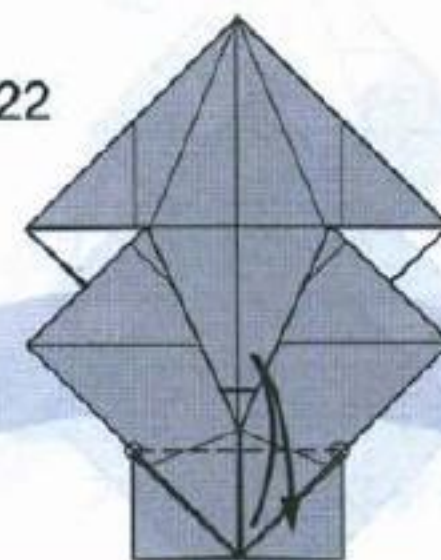
20

○を結ぶ線で外側へ折り返す



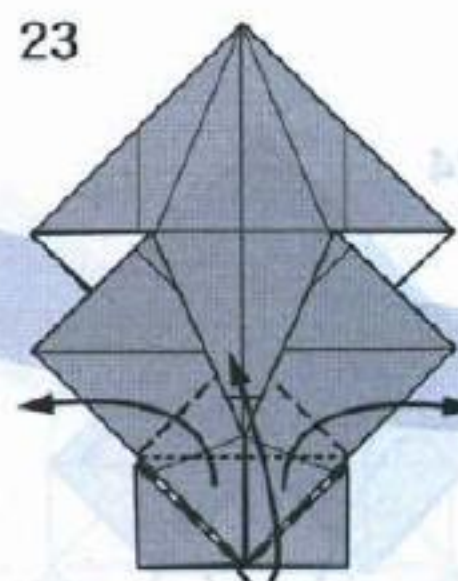
21

右側も同様に折る
(19~20)



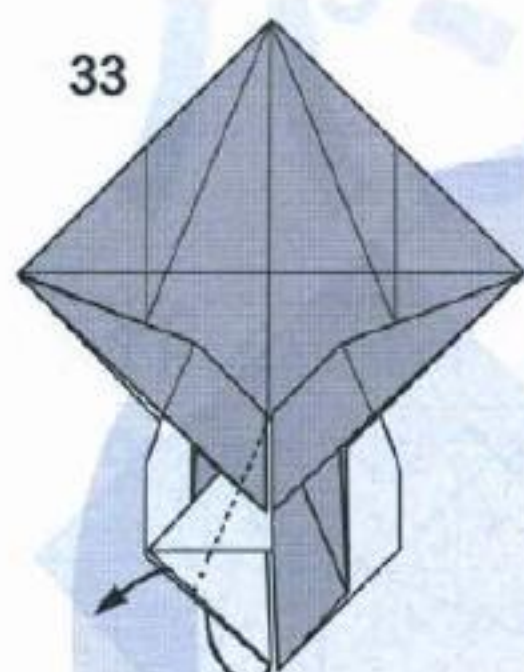
22

○を結ぶ線で折り筋をつける



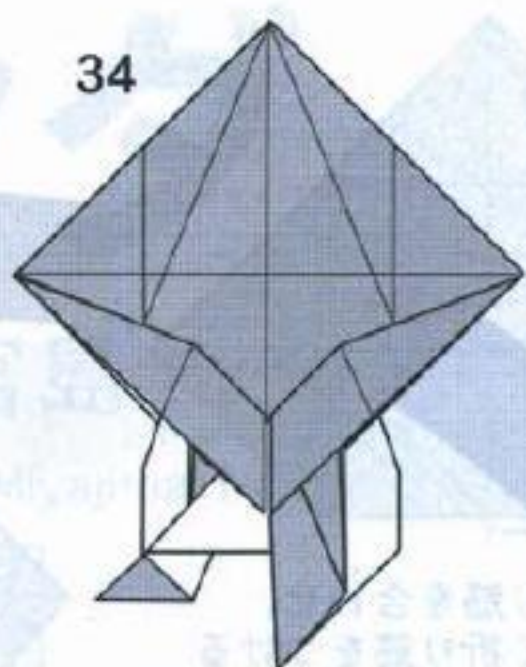
23

カドをつまみながら、外側へ
広げるように折る



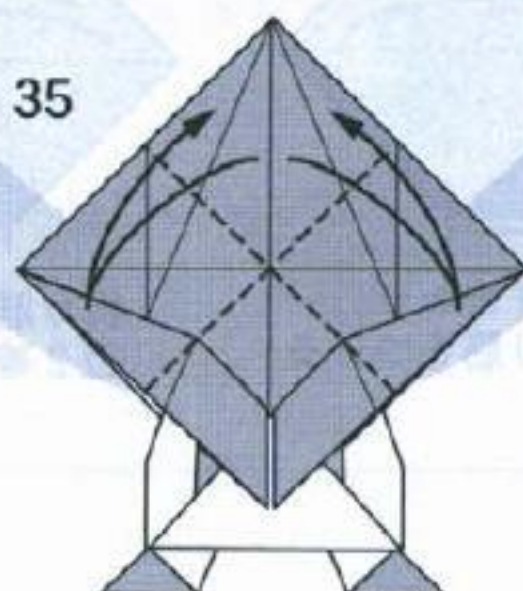
33

ついている折り筋で
中わり折り



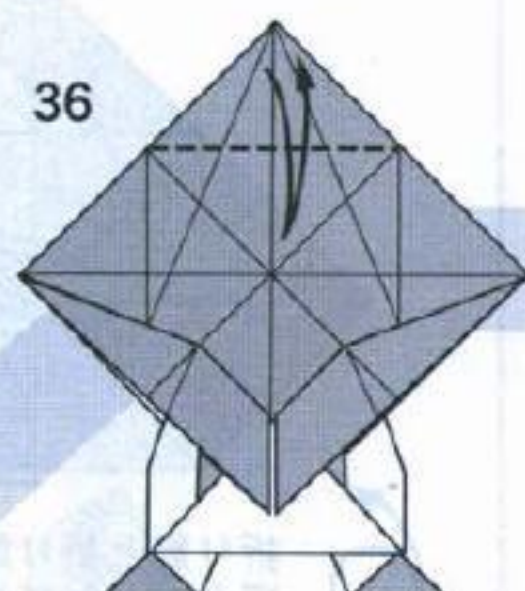
34

右側も同様に折る
(31~33)



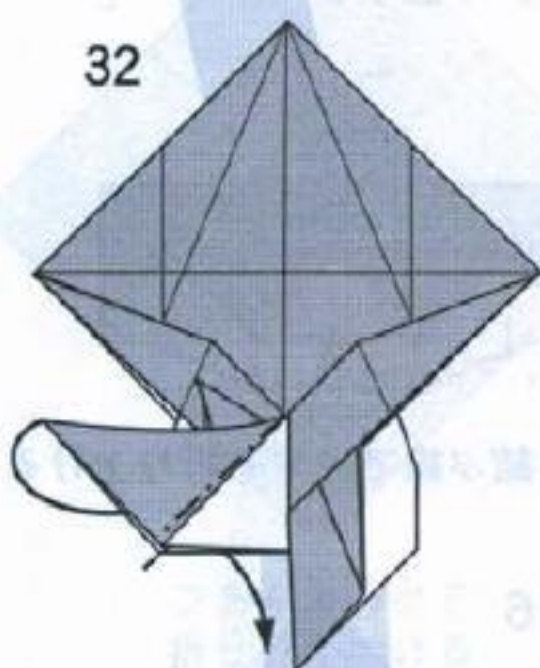
35

フチを合わせて
折り筋をつける



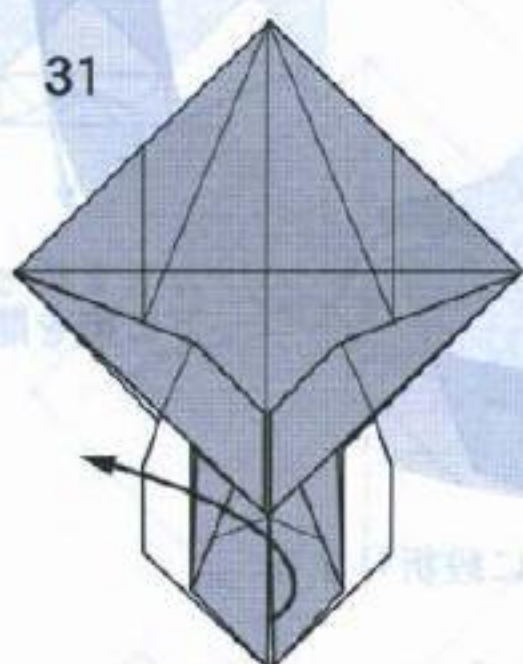
36

カドを中心に合わせて
折り筋をつける



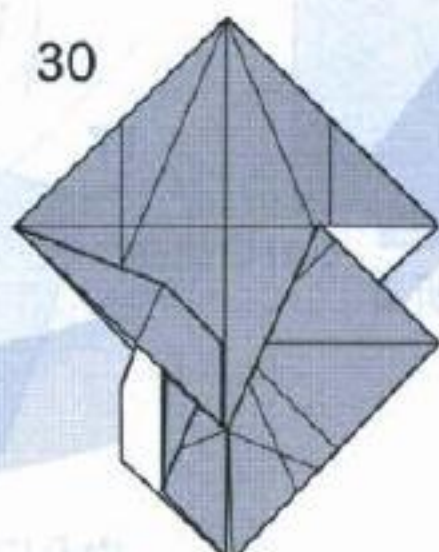
32

フチに沿って中わり折り



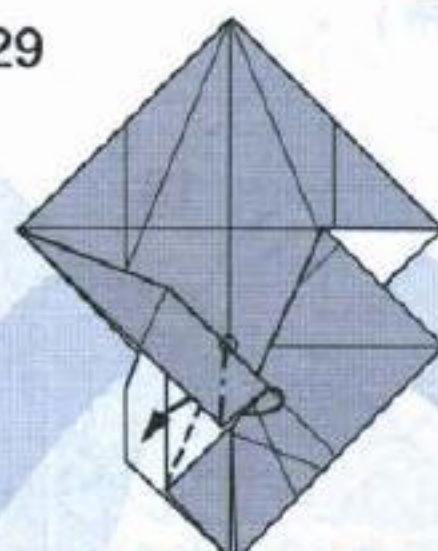
31

カドを外側に開く



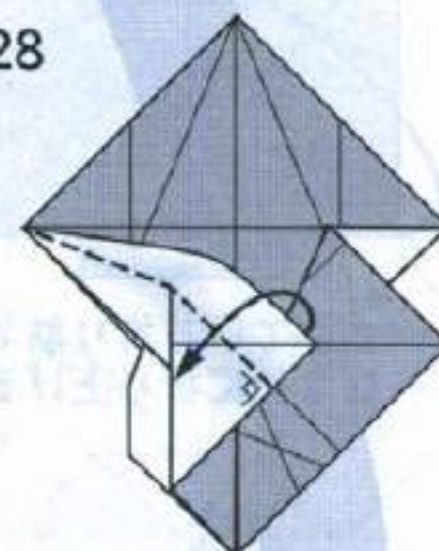
30

右側も同様に折る
(26~29)



29

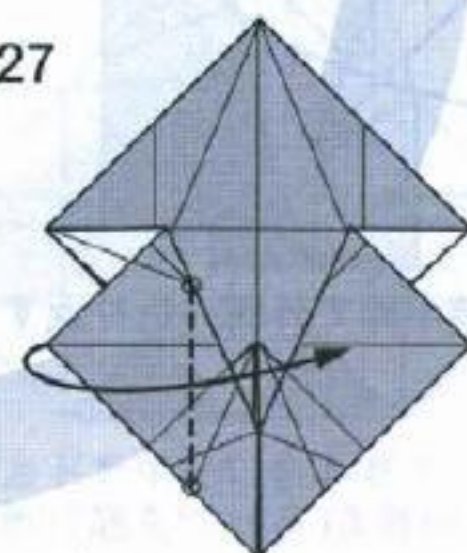
○を起点に中わり折り



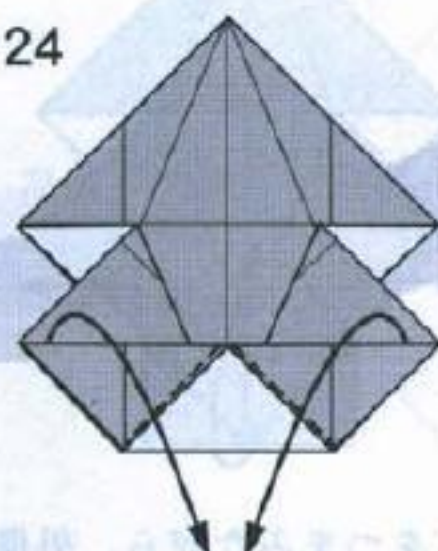
28

フチとフチを
合わせるように折る

27

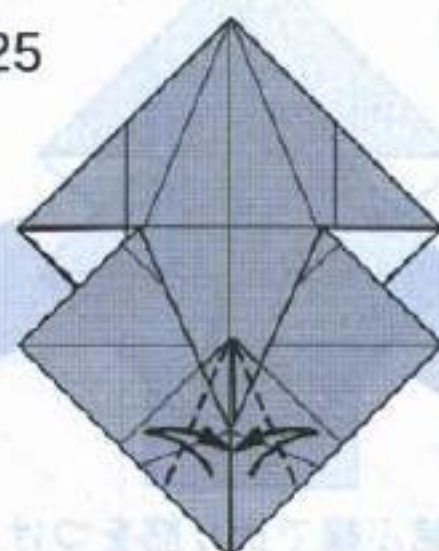


○を結ぶ線でカドを折り返す



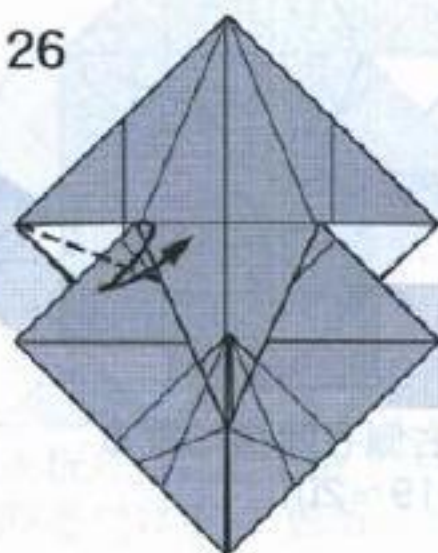
24

カドを折り下げる(2箇所)



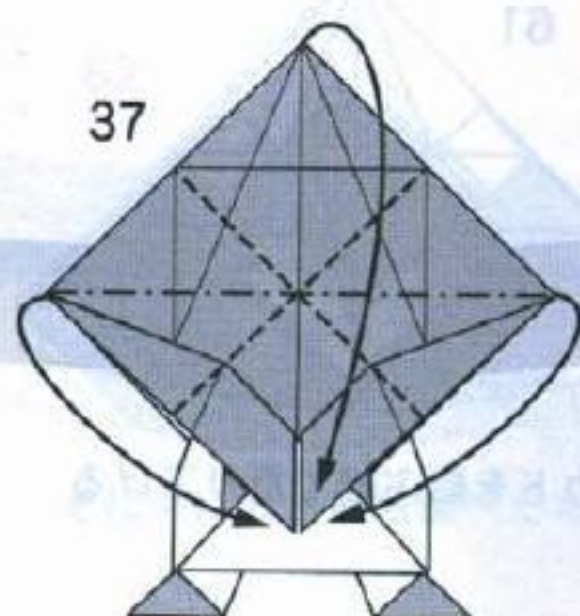
25

フチを折り筋に合わせて
折り筋をつける(2箇所)



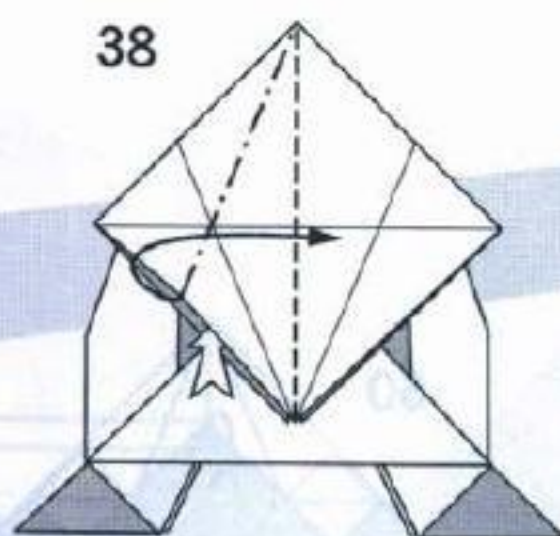
26

フチを合わせて折り筋をつける



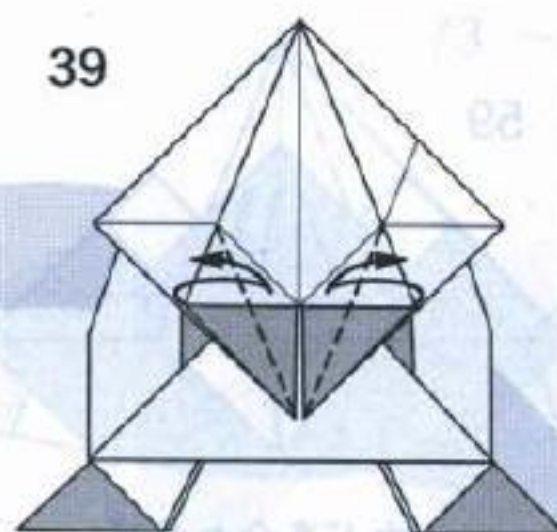
37

正方基本形の要領で
折りたたむ



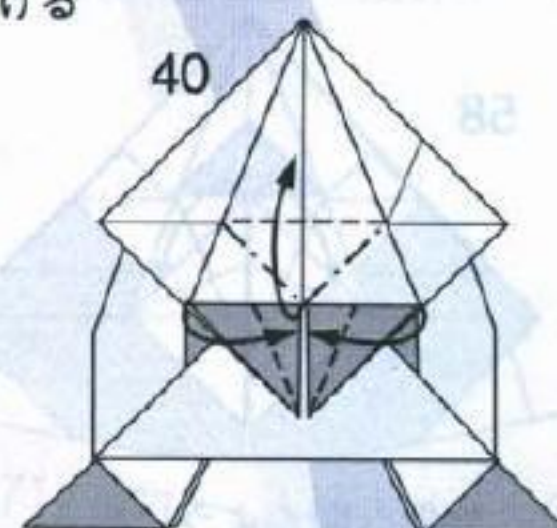
38

内側を開いてつぶす



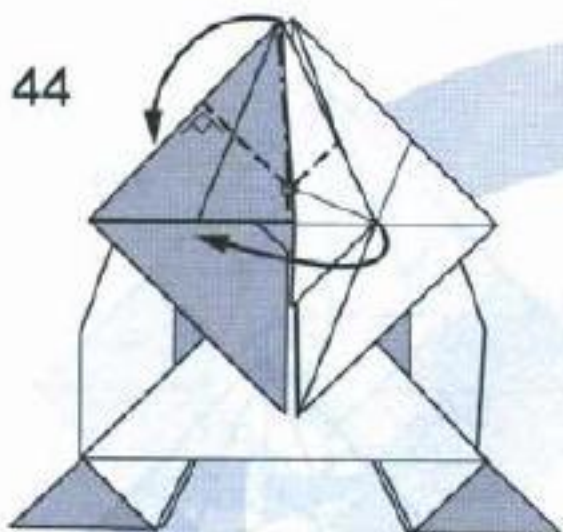
39

フチを合わせて
折り筋をつける



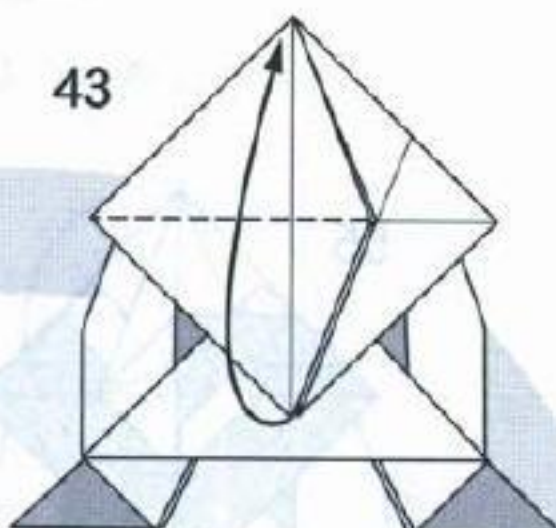
40

フチを中心線に合わせながら
カドにして折り上げる



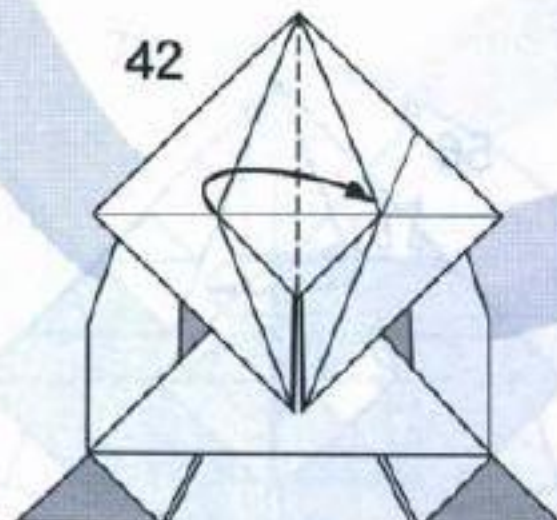
44

○の交点を起点にして中わり折り
しながら、左側へ2枚たおす



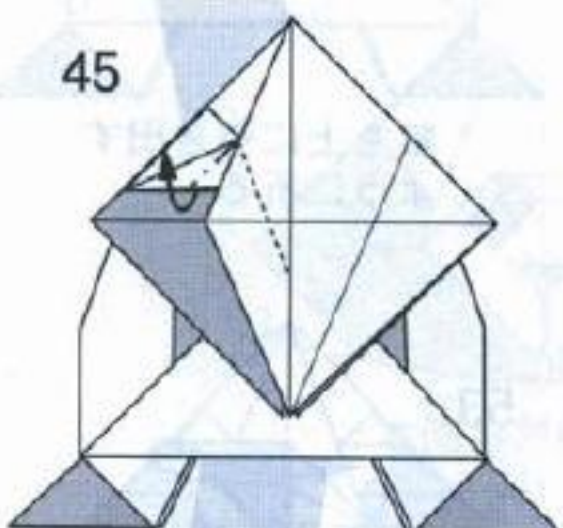
43

カドをカドを合わせる



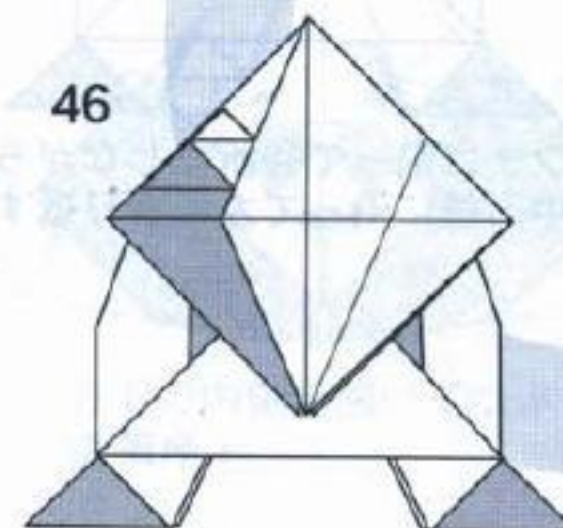
42

右側へ1枚たおす



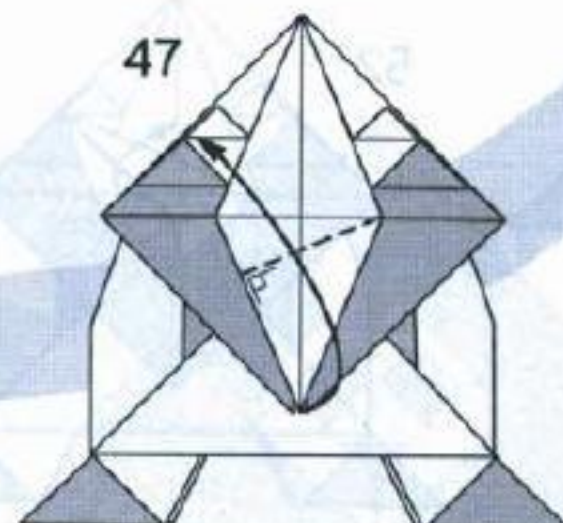
45

ずらすようにして、1枚だけ
引き上げるように折る



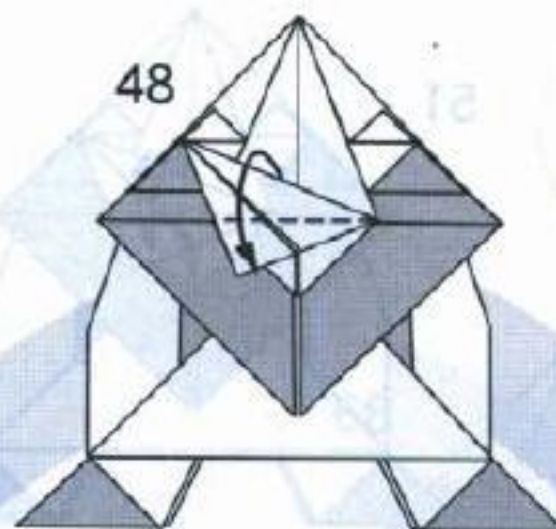
46

右側も同様に折る
(38~45)



47

フチが重なるように、
カドを斜めに折り上げる



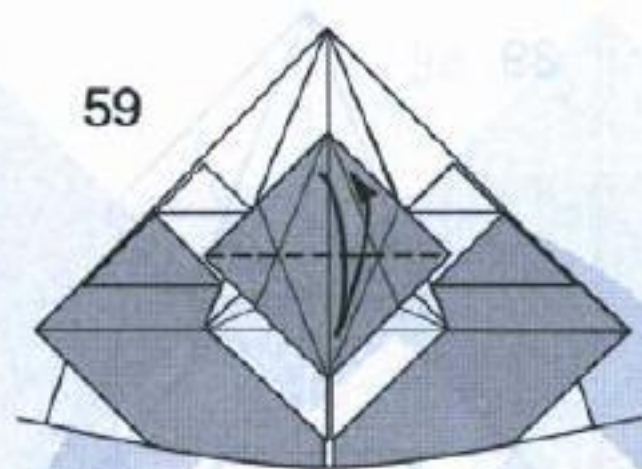
48

フチを合わせて折る



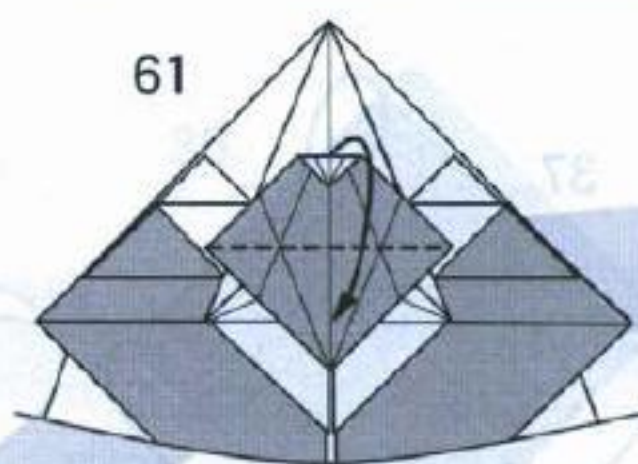
49

戻す



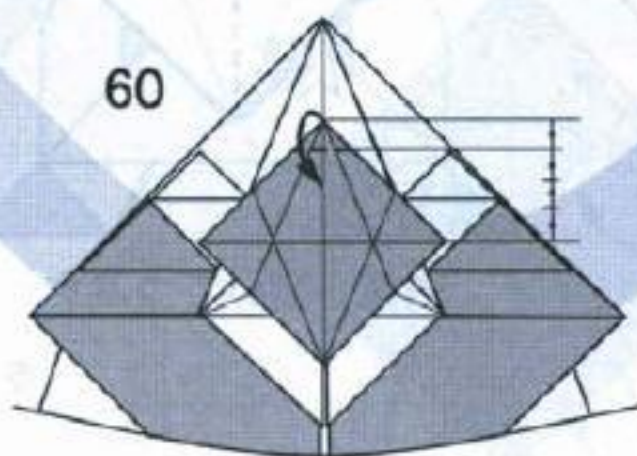
59

カドを合わせて
折り筋をつける



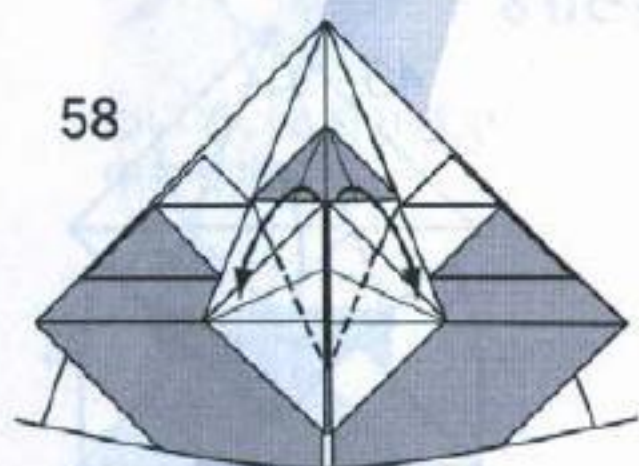
61

カドを結ぶ線で折り下げる



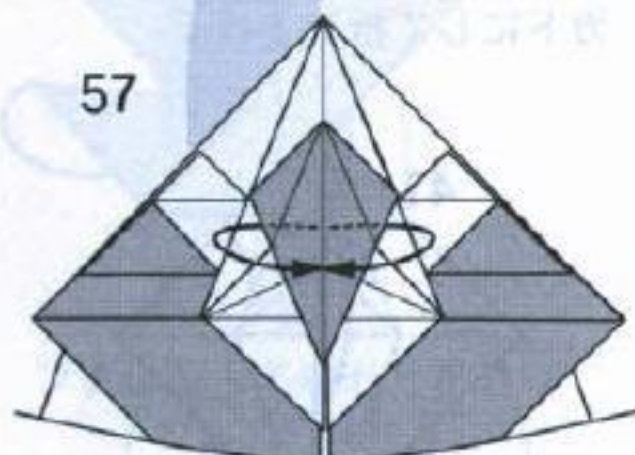
60

カドを約 1/4 だけ折る



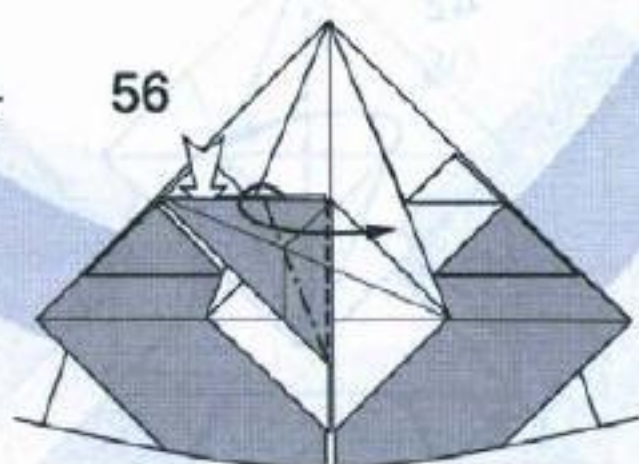
58

外側へ開くように折る



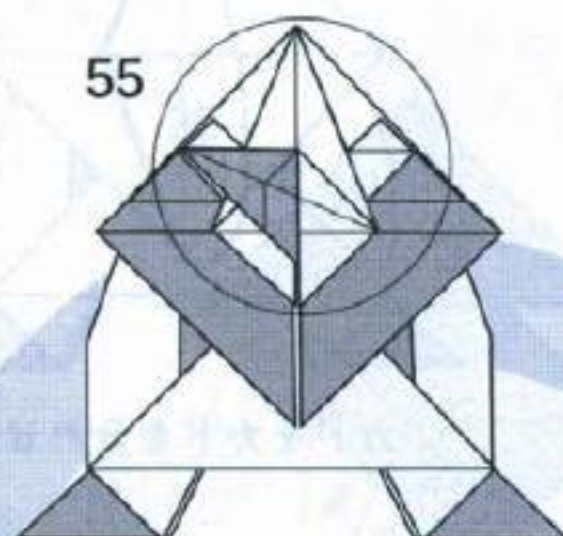
57

山と谷を折り替えて、
隠れている部分を表に出す

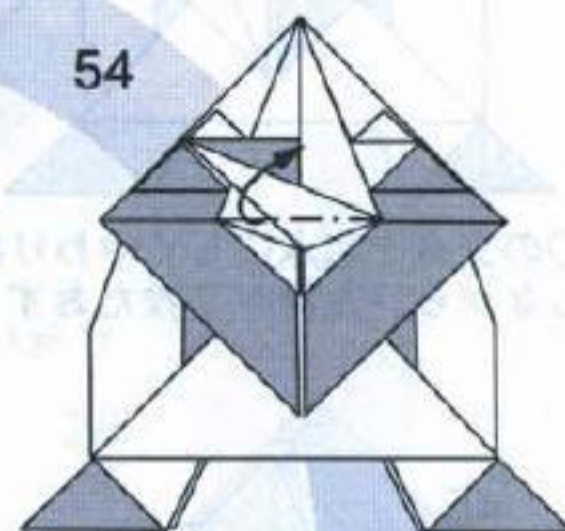


56

内側を開いてつぶす

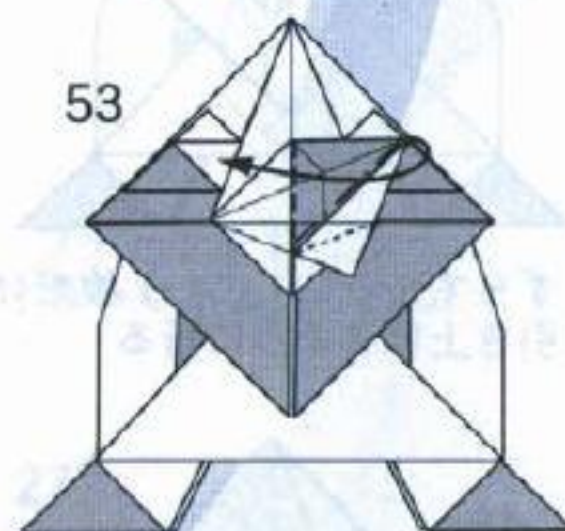


55



54

紙を上引き出す
ように折る



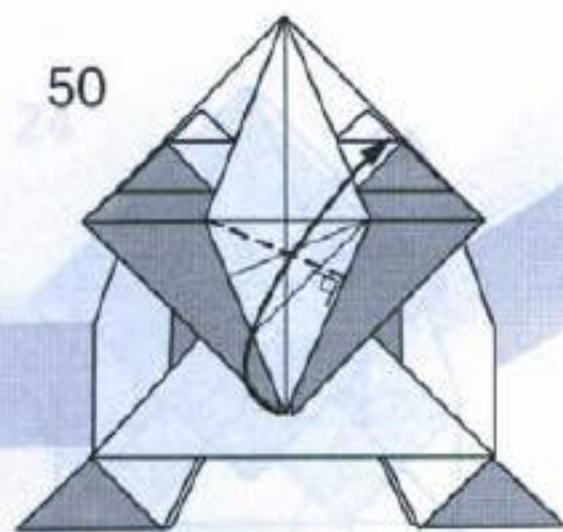
53

フチに沿って谷折りしながら
中心線に沿って左に折り返す



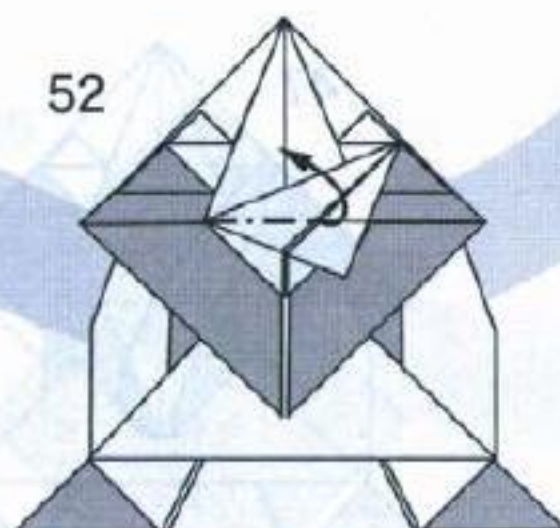
51

フチを合わせて
折り筋をつける



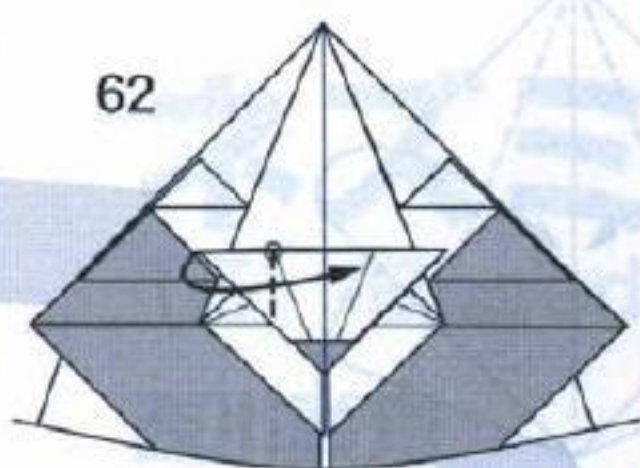
50

フチが重なるように、
カドを斜めに折り上げる



52

紙を上引き出す
ように折る



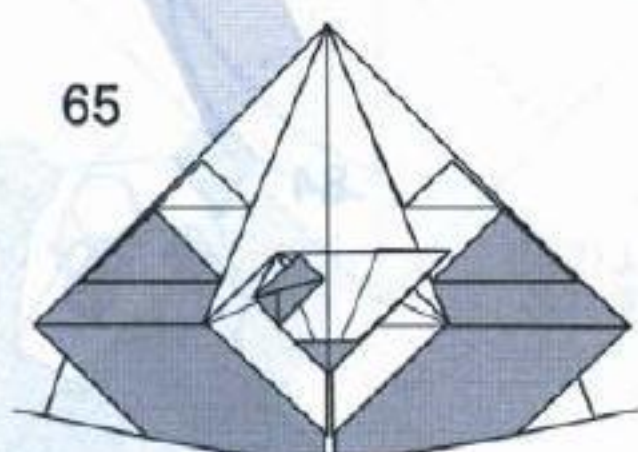
○を起点にカドを右側へたおす



1枚目をずらすように折る



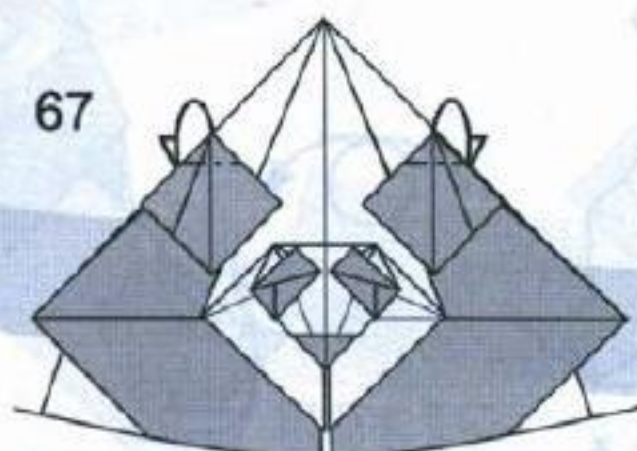
カドを結ぶ線で折り上げる



右側も同様に折る
(62~64)



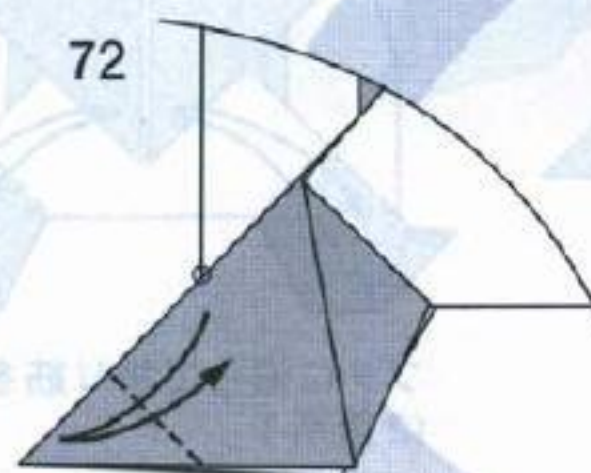
カドの内側を開いてつぶす
(2箇所)



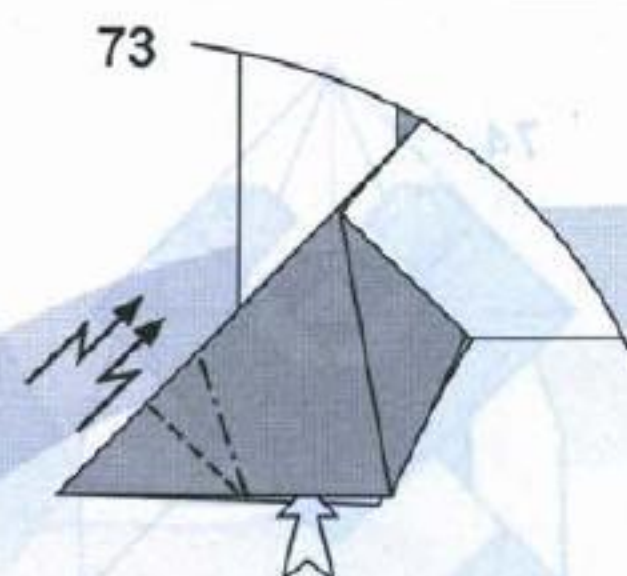
カドを後ろに折り返す
(2箇所)



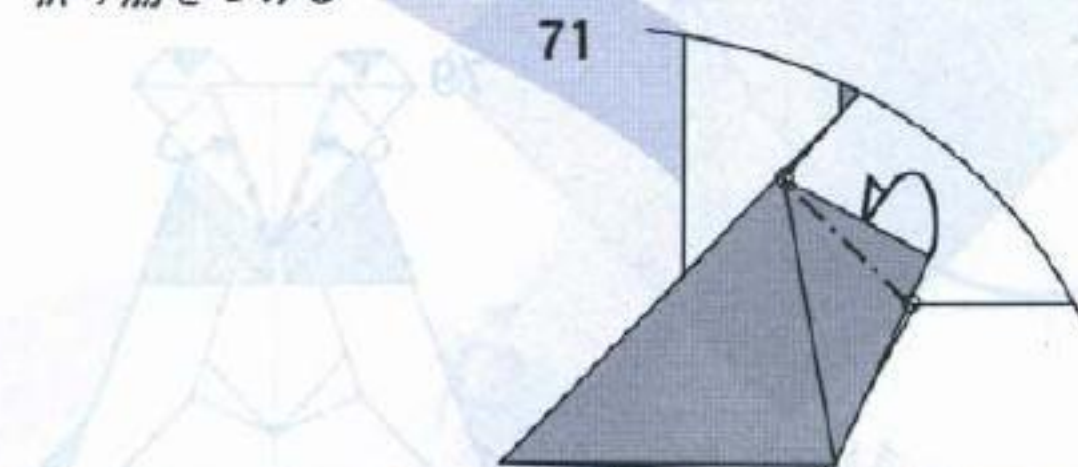
カドを後ろに折り返す
(2箇所)



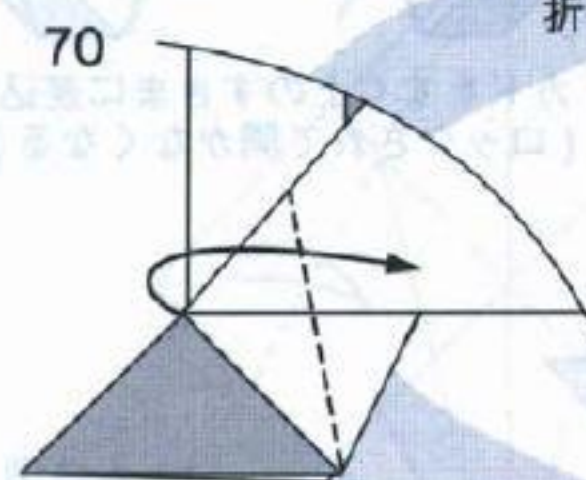
カドを○に合わせて
折り筋をつける



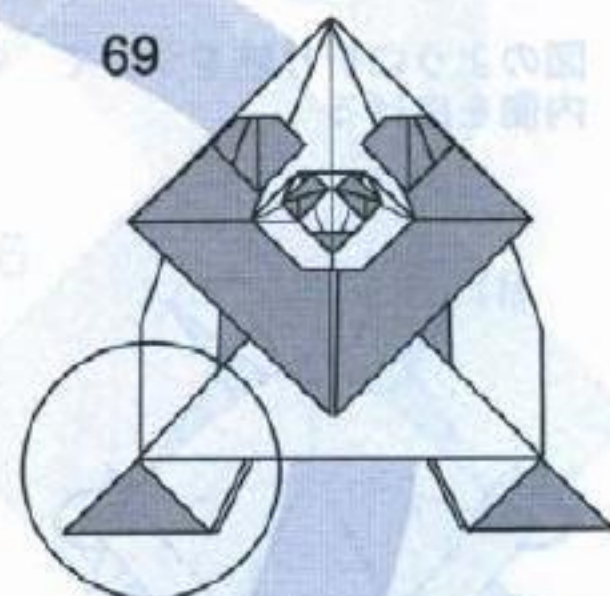
内側でななめに段折り

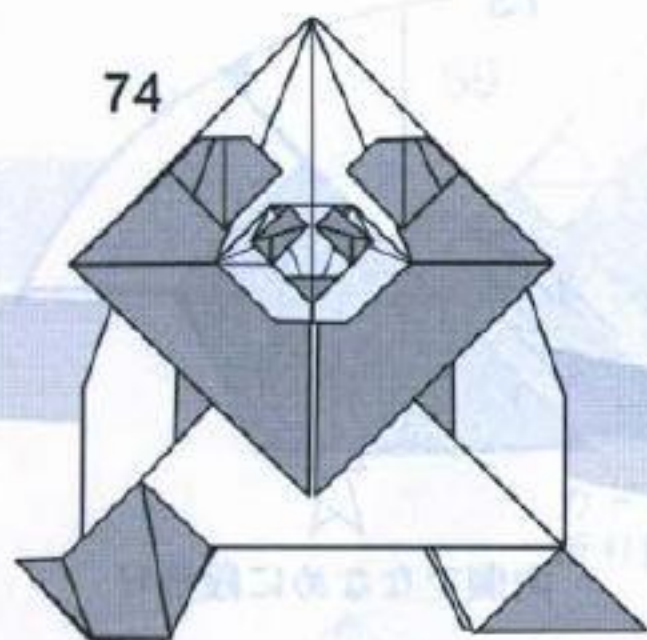


○を結ぶ線でカドを後ろに
折り返す



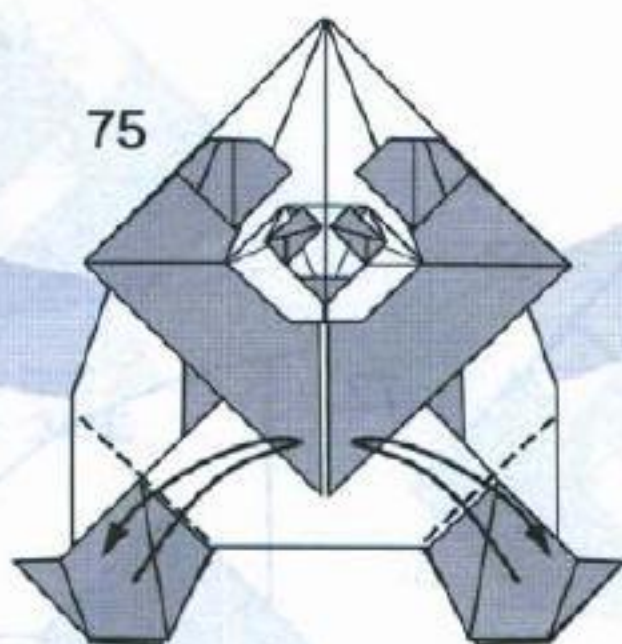
フチに合わせて折る





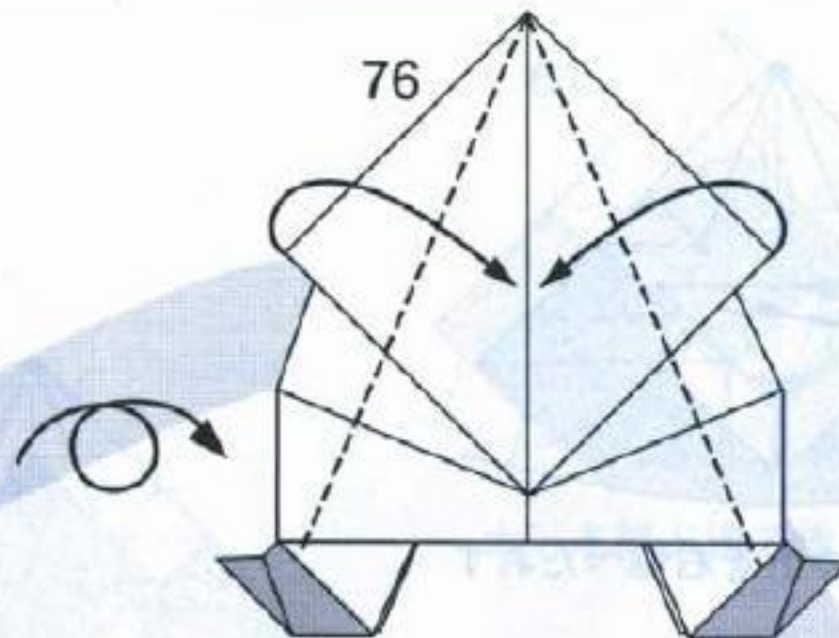
74

右側も同様に折る
(70~73)



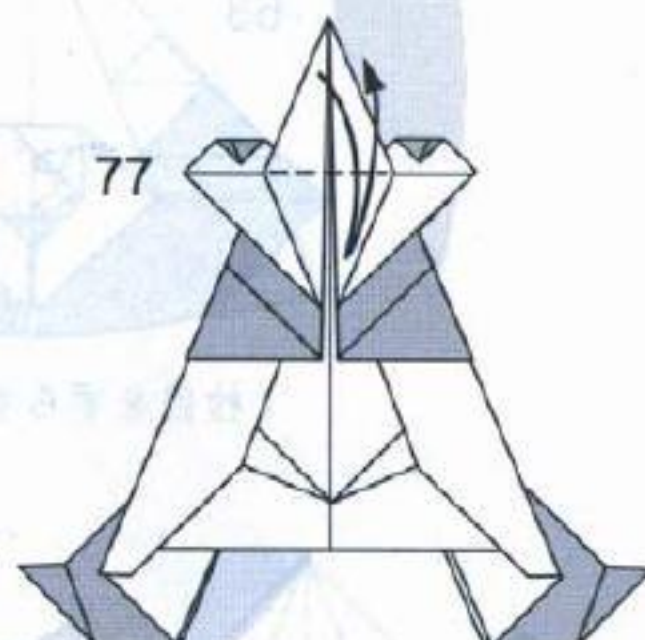
75

フチに沿って折り筋をつける
(2箇所)



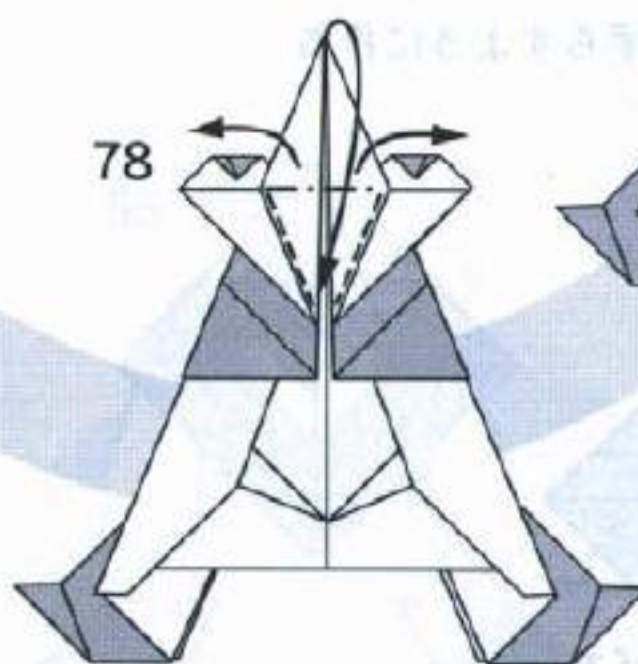
76

フチを中心線に合わせて折る
(2箇所)



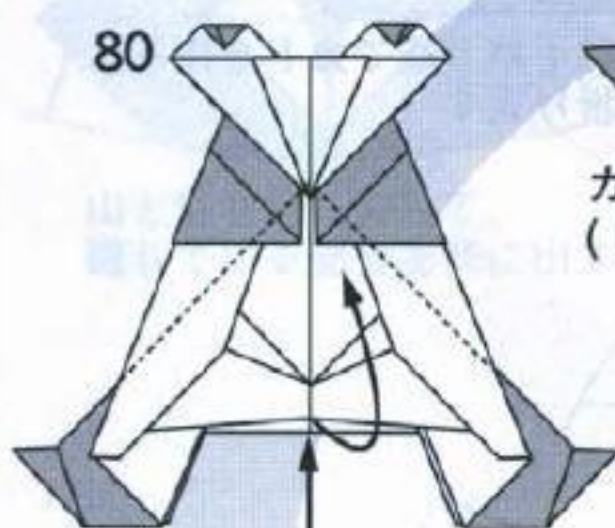
77

折り筋をつける

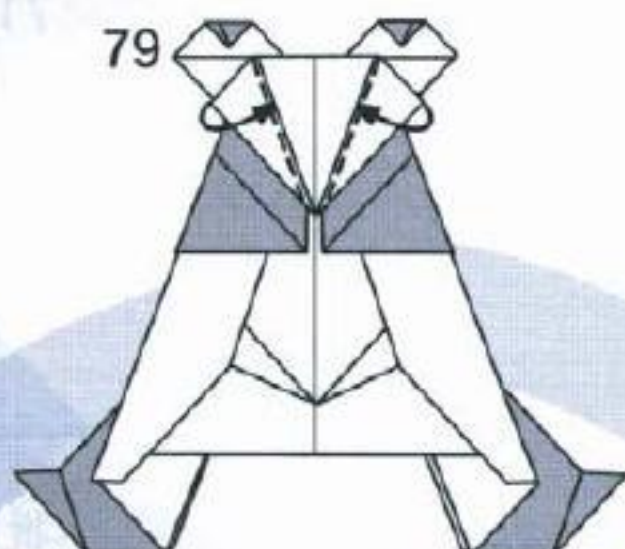


78

外側へ開きながら
カドを折り下げる



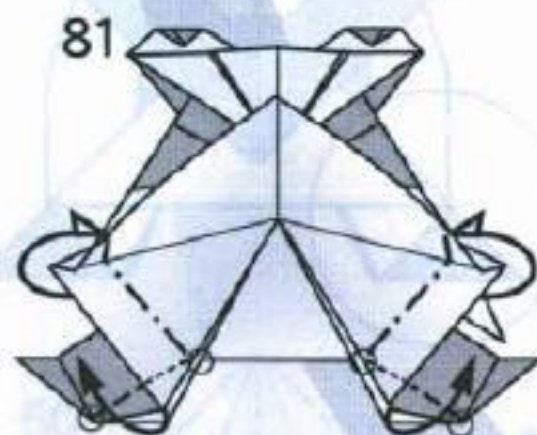
80



79

カドをすぐ上のすきまに差込む
(ロックされて開かなくなる)

図のように折り筋をつけて
内側を広げる



81

[下からみた図]
○を結ぶ線で
ずらすように折り、
端を折り返す(2箇所)



82

底が平らになる



83

フチに沿ってほぼ直角に
折り上げる(2箇所)



84

できあがり

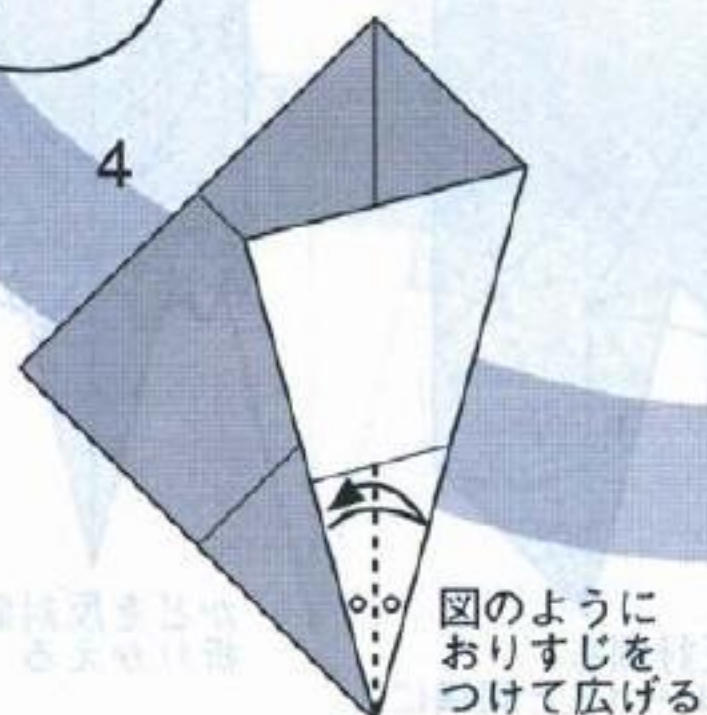
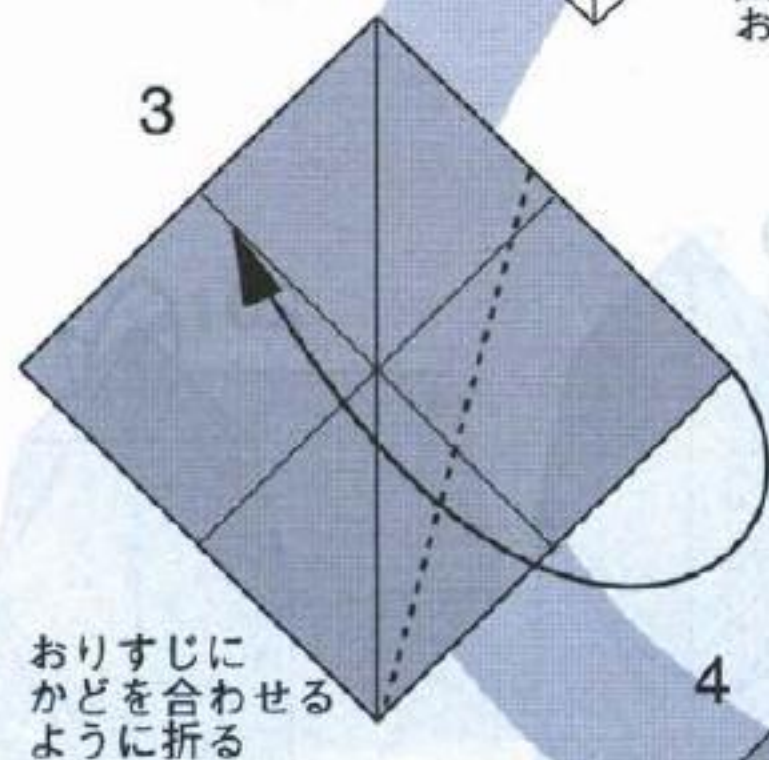
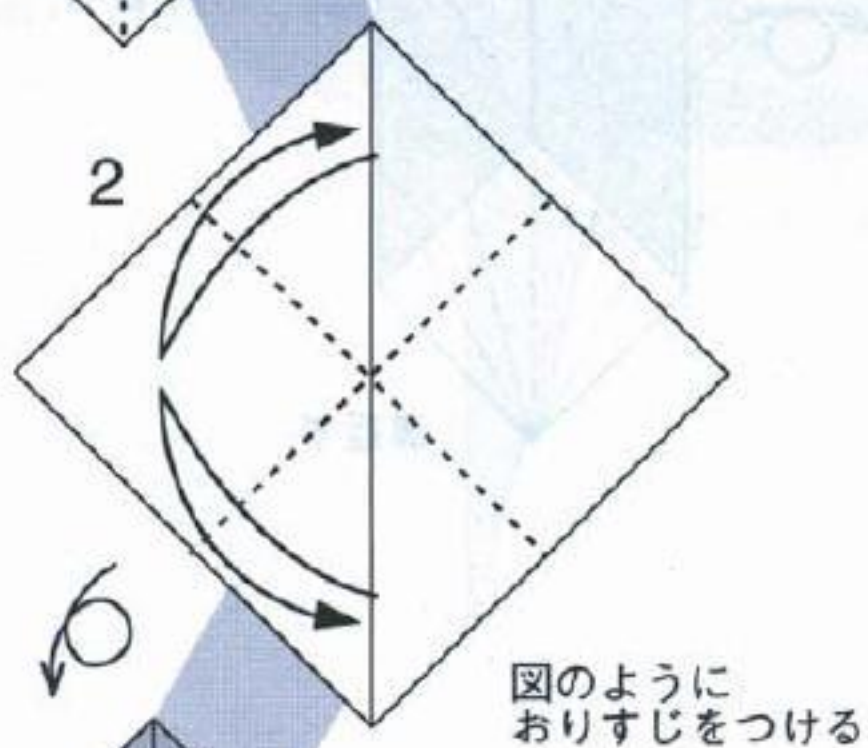
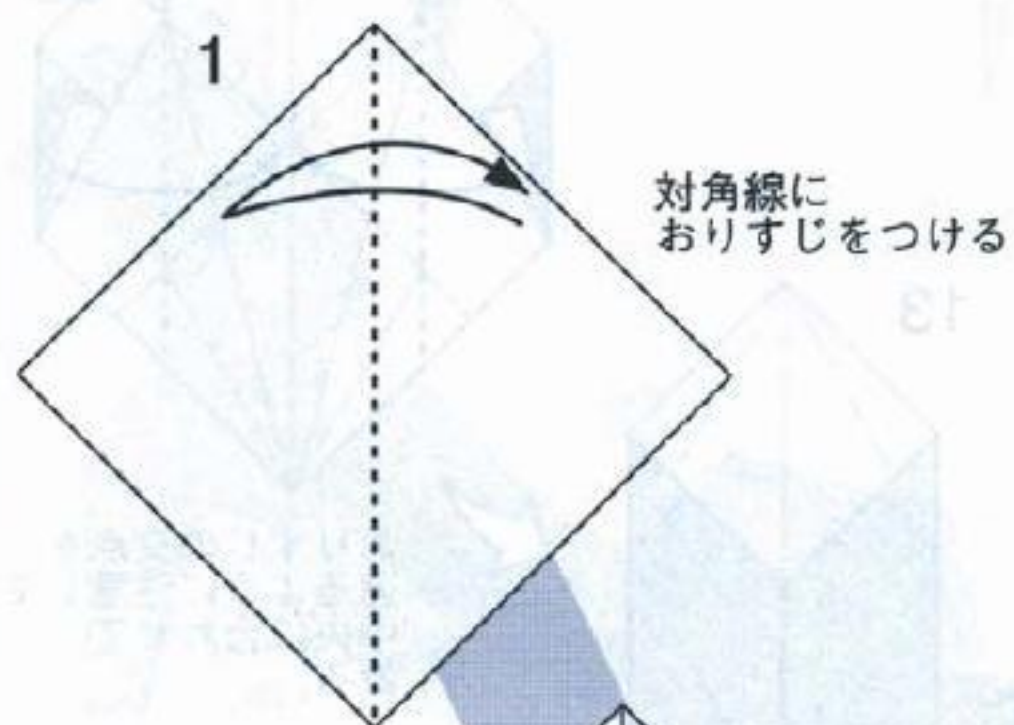
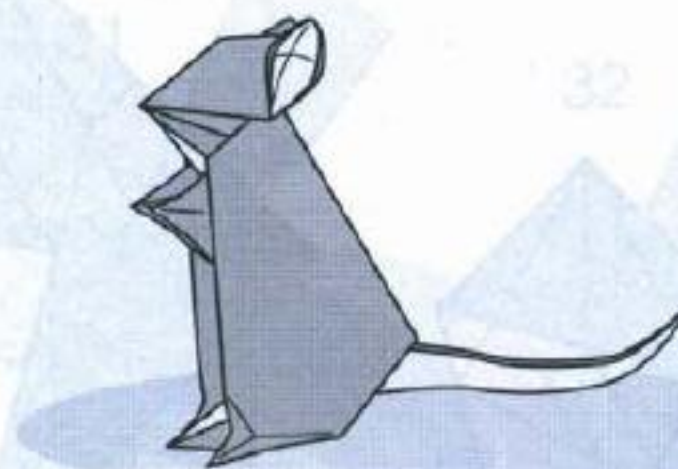
ネズミ -15°

15° -Based Mouse

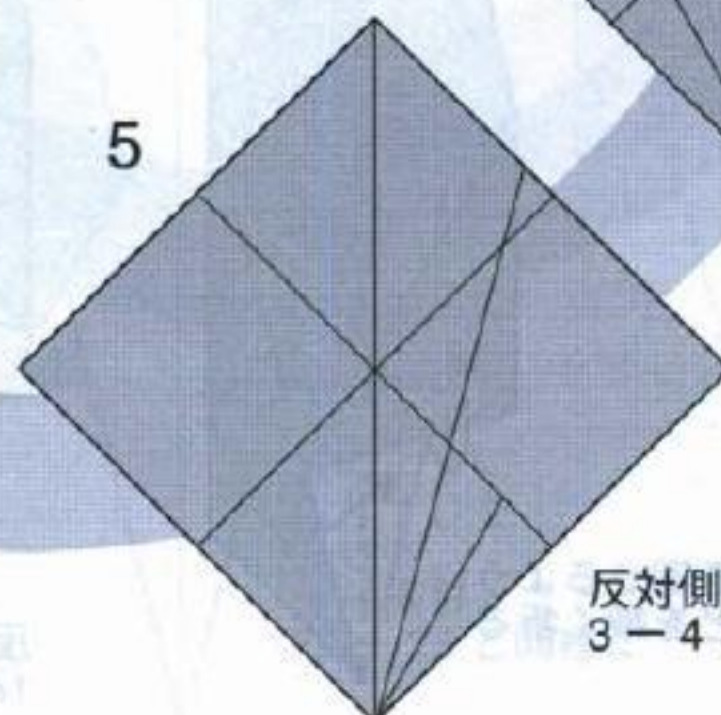
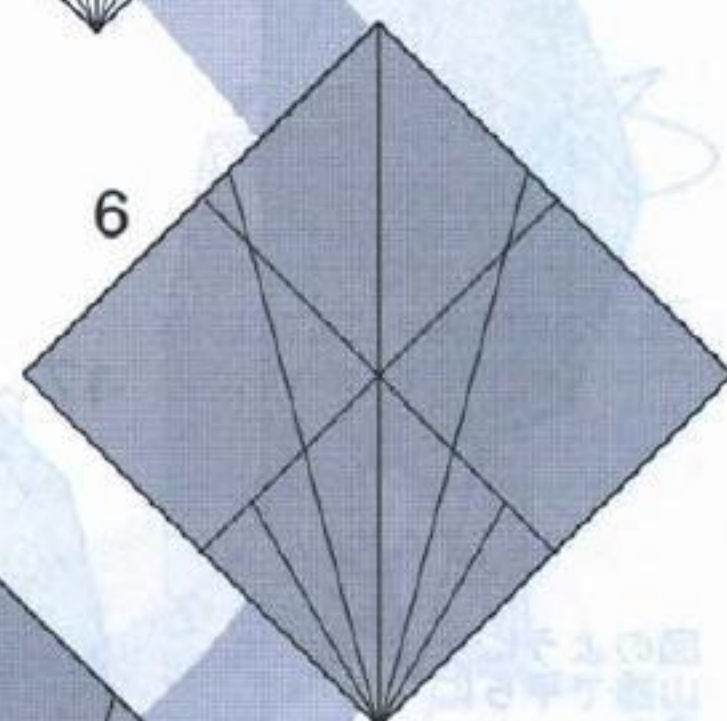
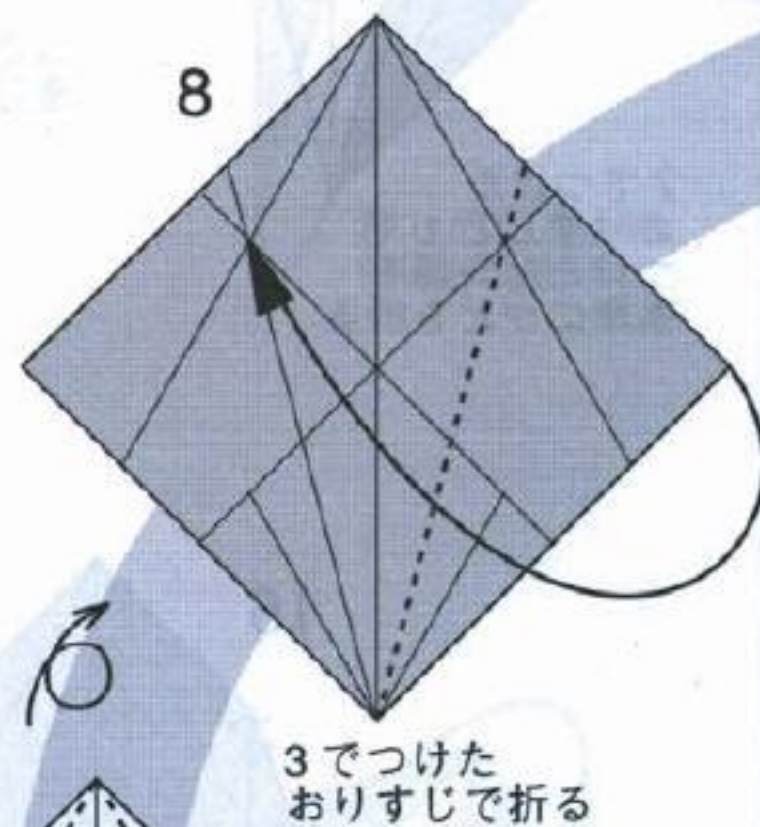
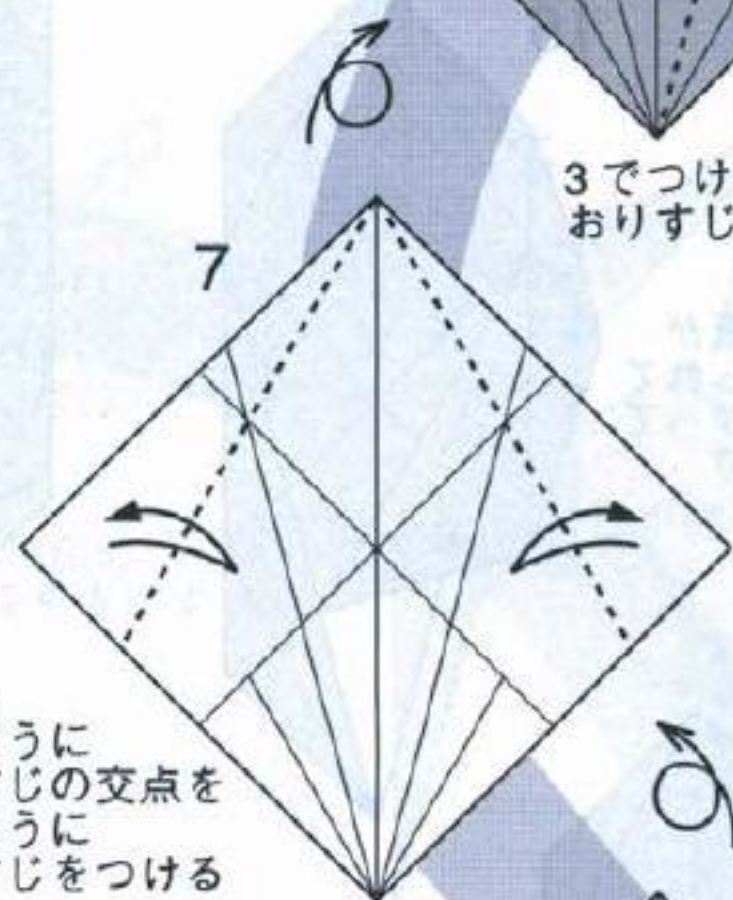
西川誠司

Design: Nishikawa Seiji (2004/11)

Diagram: Nishikawa Seiji (2007/10)



図のように
おりすじの交点を
通るように
おりすじをつける



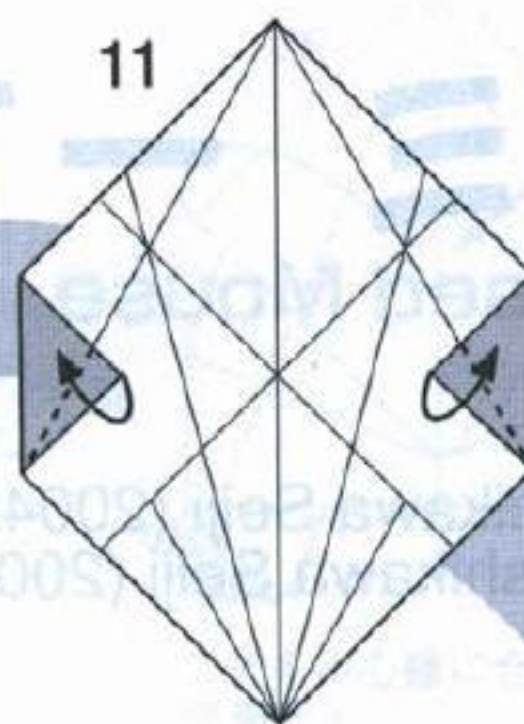
反対側も
3-4と同様に



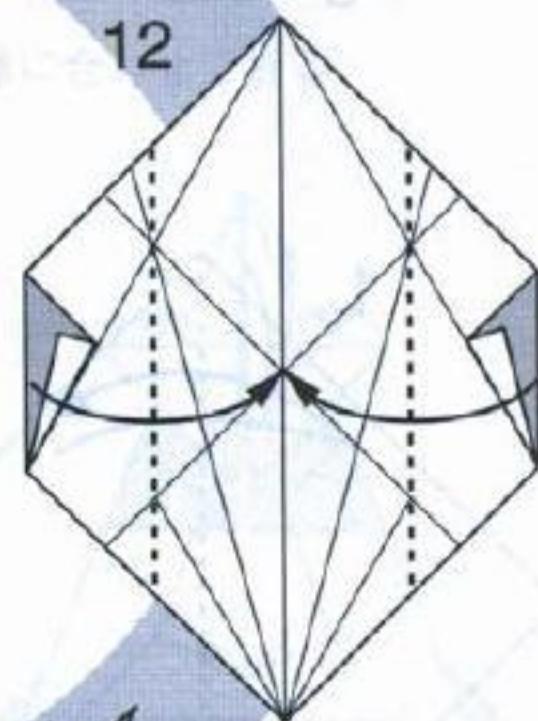
7でつけた
おりすじと1で
つけた対角線を
基準にかどを折る



8で折った
ところを広げる
反対側も8-10と
同様に折る



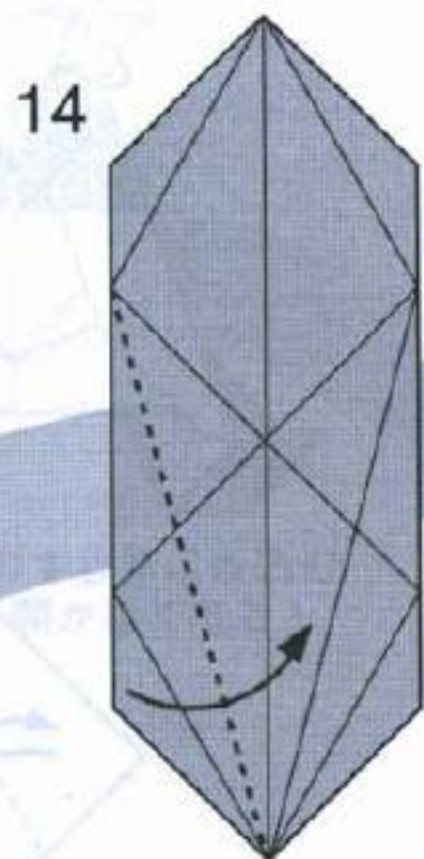
おりすじに
沿って
図のよう
にかどを折る



おりすじの交点を
通るように注意して
中央に合わせて
折る



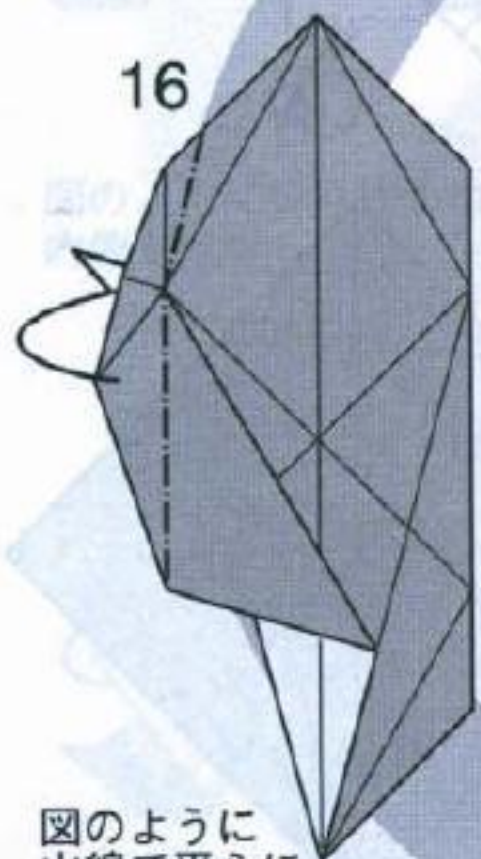
後ろの紙が
引っ張られて
持ち上がって
くるので



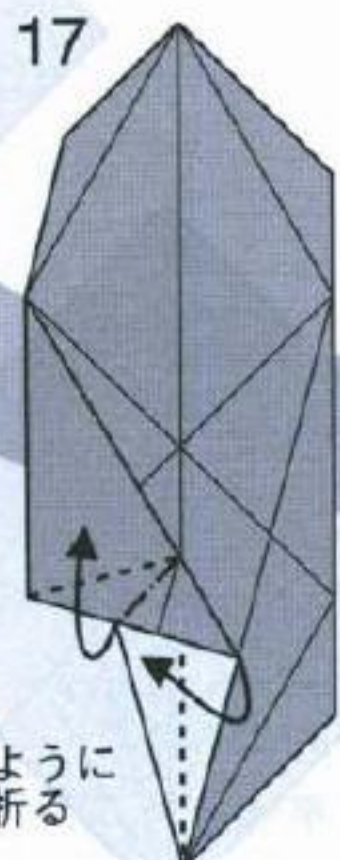
図のように
谷線を折る



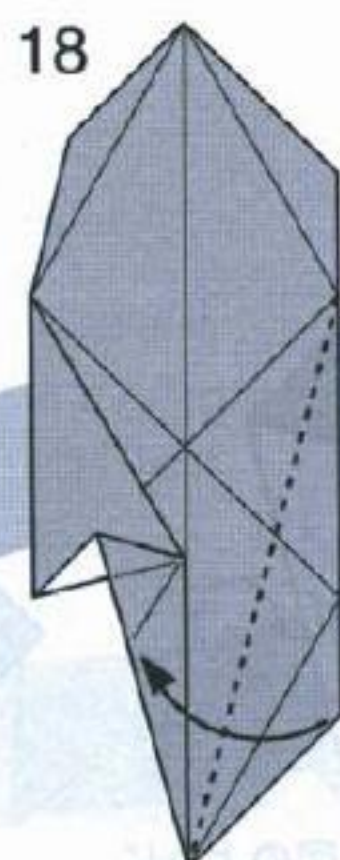
裏返す



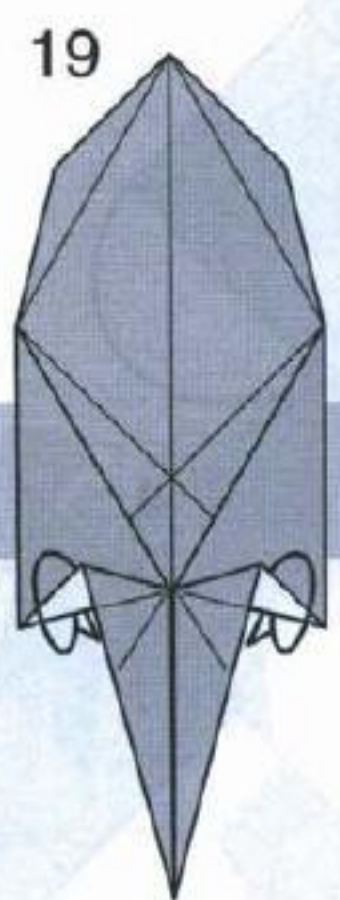
図のように
山線で平らに
畳む



引き寄せるよう
にかどを細く折る

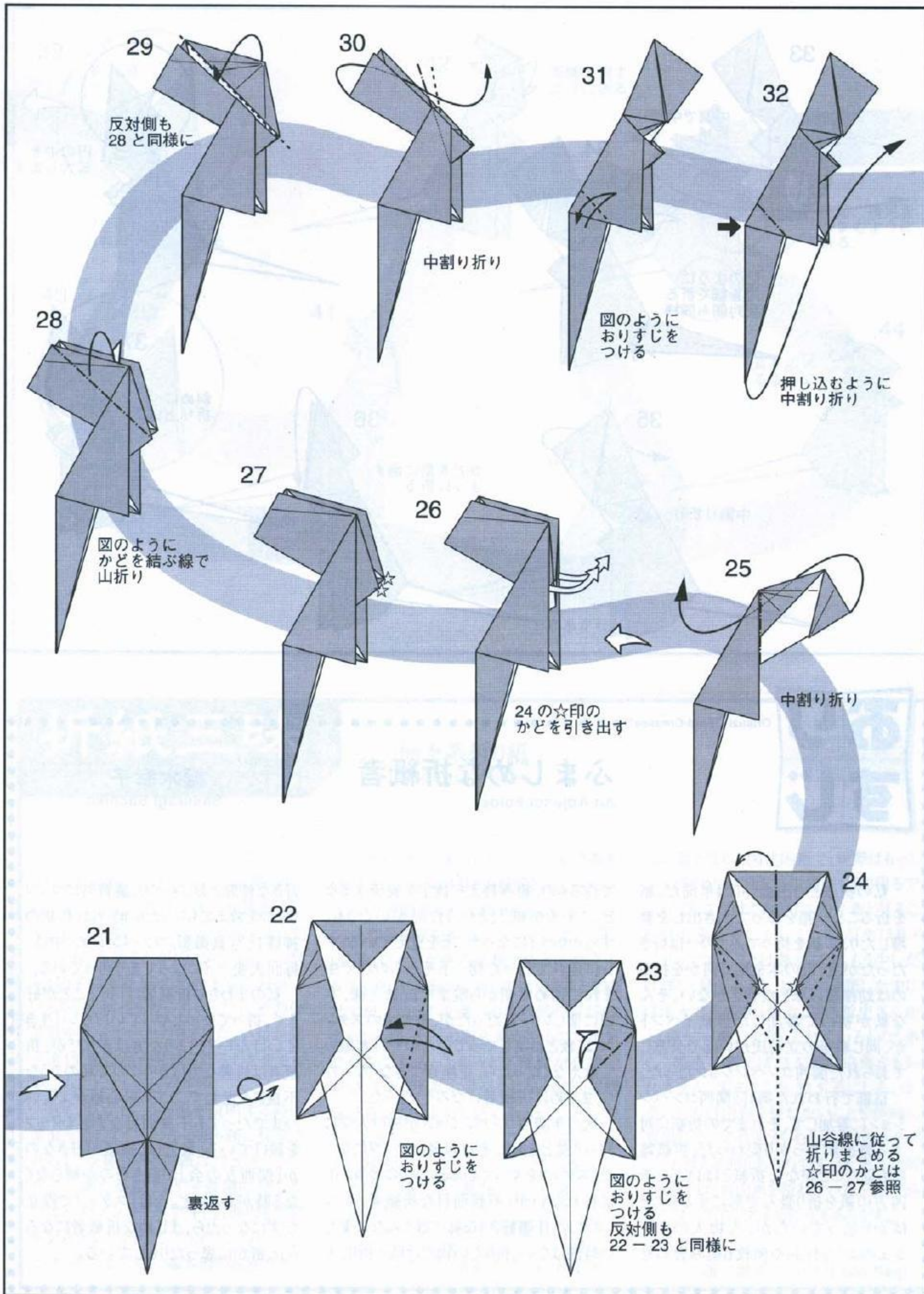


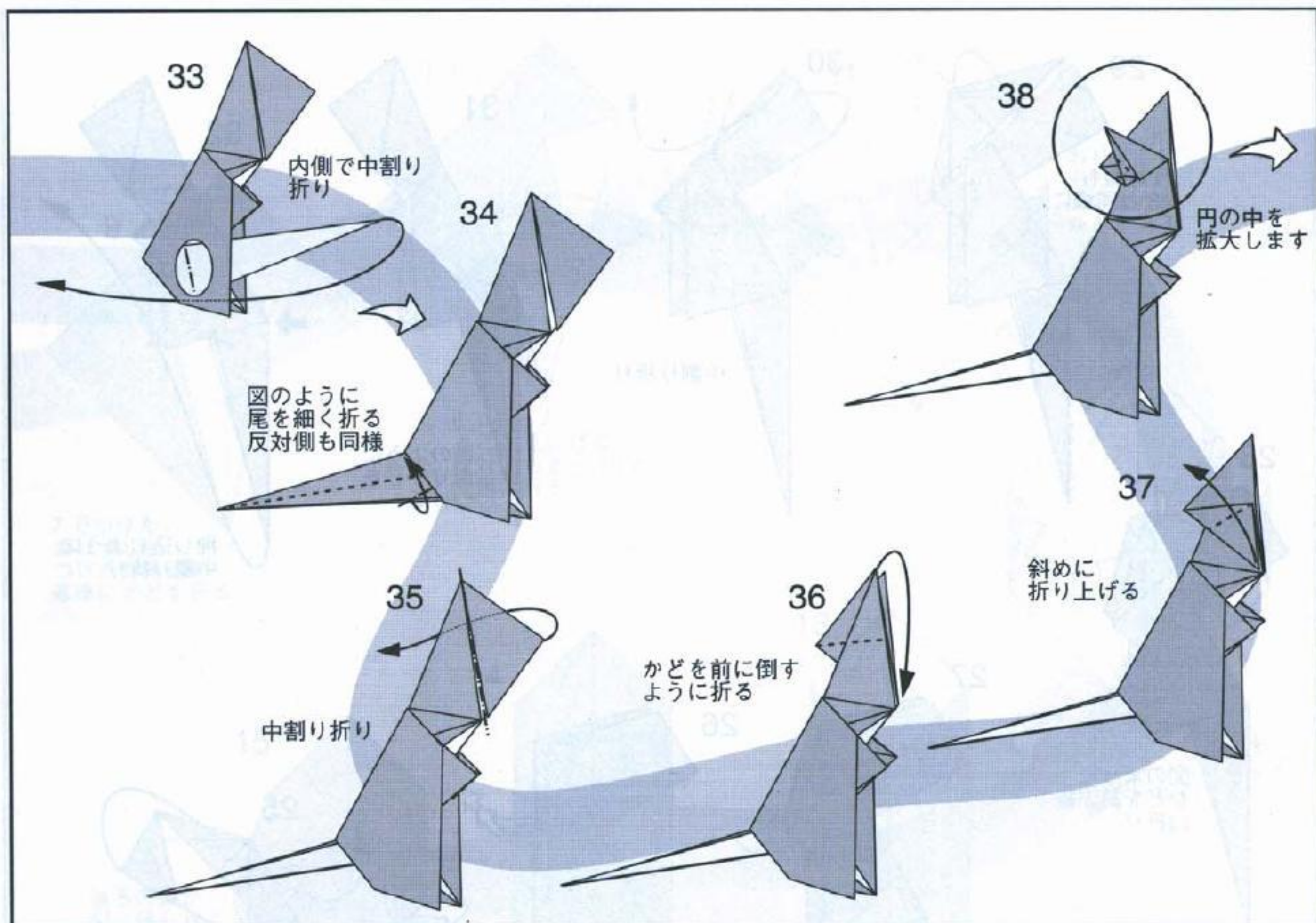
反対側も
14-17と同様に



かどを反対側に
折りかえる







Orisuzi ("Fold-Creases")

ふまじめな折紙者

An Adjunct Folder

櫻木幸子

Sakuragi Sachiko

私の折紙との出会いは4年前だ。紙を折ること一箱を作って引き出しを整理したり、手紙を折ってみたいーは好きだったが、折紙の本を見て何かを折るのは幼稚園以来した覚えがない。そんな私が初めて参加した折紙イベントが、同じ職場の立石氏がWebで公募しておられた関西コンベンションだった。

京都で行われた第4回関西コンベンションに参加して、それまでの折紙に対する概念がすっかり変わった。折紙雑誌も見たことがなく、折紙とは15センチ四方の紙を折り畳んで形にするものとはばかり思っていたが、人物大のオブジェのような作品や何枚も組み合わせ

て作るもの、組み替えて数字を表現するなど、これも折紙?!という作品がいくつも。すっかりハイになったことを覚えている。ダシに連れて行った甥っ子そっちのけで生まれて初めて朝から晩まで折紙三昧、本当に楽しい一日だったが、その頃のスタンスは(歌とお茶をやっていたので)「年取って歌えなくなったら、正座ができなくなったら、まじめに折紙者になろう」だった。

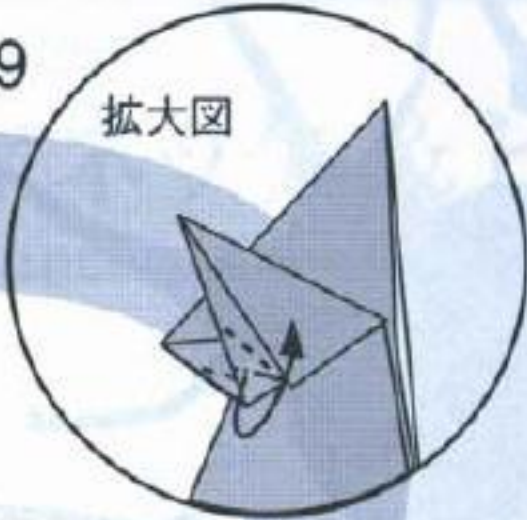
次の年関西コンベンションが神戸大学に移ったこともあり、それ以降スタッフになった。スタッフをやっているとコンベンション中は折れないが「不真面目な折紙者」かつ「スタッフ仕事好き」な私にはこんなに楽しい時間はない。折りたい物だけ時々折り、大

好きな仲間とおしゃべり、講習外にコツンコツンを教えてもらったり、時々「折紙の神様」と写真撮影。コンベンション中は、毎回大変ハイになって走り回っている。

私のまわりの折紙者は「折ることが好きで、折ってないとやっていけない(生きていけない?)」ような方ばかりだが、折紙者は性善な方ばかりなので私のような不良にも寛大で、とても居心地がよく、いつまでたっても不真面目なままスタッフを続けている。最近、折紙が好きなのか「関西友の会」が好きなのか解らなくなる時があるほど。今は「スタッフで役立たずになったら、まじめな折紙者になろう」と密かに思ったりもしている。

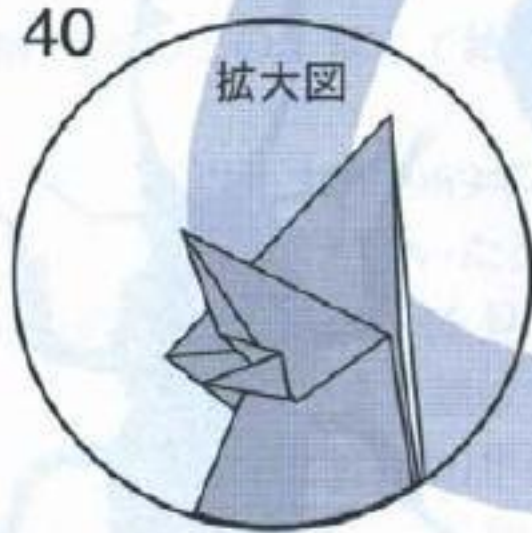
39

拡大図

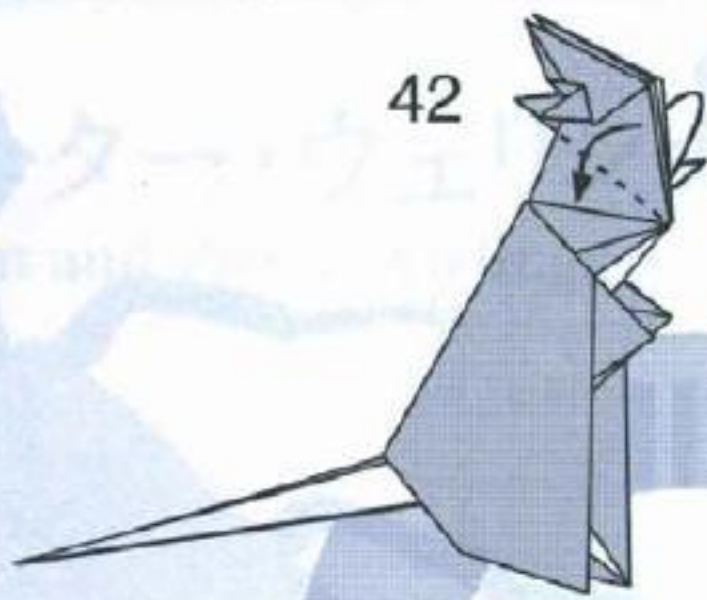
引き寄せるように
山谷線に従って折る

40

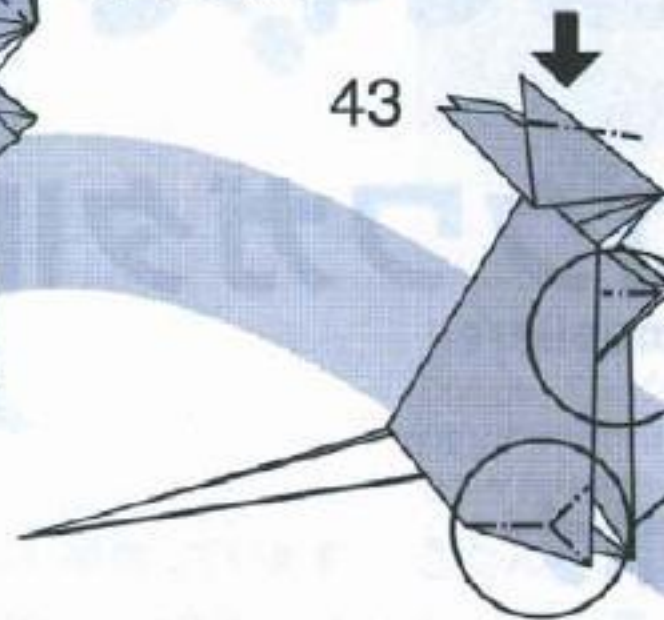
拡大図

反対側も
36-39と
同様に

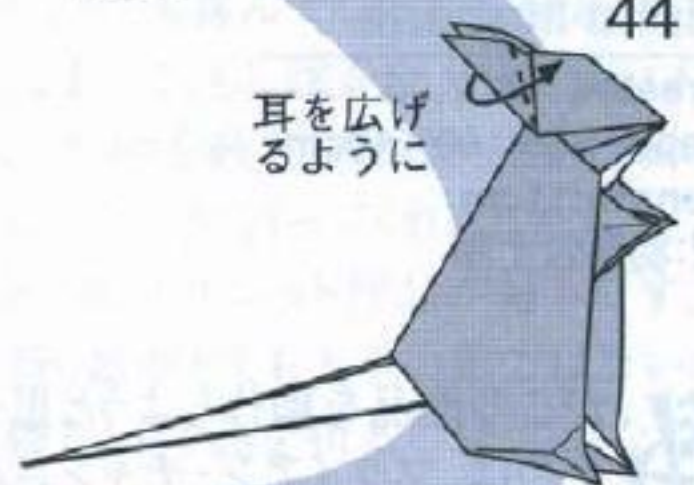
42

両側に倒す
ように折る

43

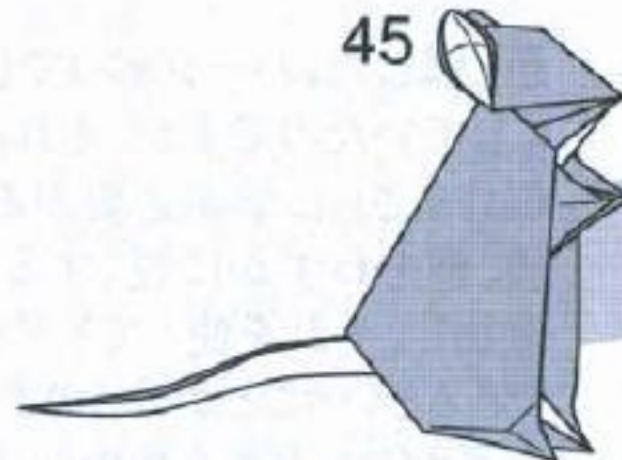
頭のかどを
押し込むように
中割り折り前足、後足を
つまむように
折る

44

耳を広げ
るように

45

できあがり



折紙三昧

39

Origami-Zanmai (This Origami and That)

何々系折り紙

Flaps and Angles

このところ、私が15°系折り紙を中心に作品作りをしているというのは繰り返し言っていることですが、遂に布施知子さんをもその虜にすることが出来たようです。先日、布施さんがJOASホールでの教室「知子の部屋」のための上京のうちに、「熱中して何作も作っちゃった」とその作品群を見せていただきました。いつか知子流15°系作品が発表されるのを皆さん楽しみにしてください。

さて、私が15°系作品を説明する時の常套句として「いわゆる折り鶴に代表されるような普通の折り紙は22.5°を……」などと、あたかも「22.5°=普通の」としたのはややアンフェアです。古典の折り鶴を引き合いに出してどうする、というわけです。そこで、以前、基本形の現在を見よ

う(99号「折紙三昧」)としたように実態調査といきましょう。『第13回折紙探偵団コンベンション折り図集』の収載39作品のうち、ユニット作品を除く35作品について、22.5°系、15°系、ジャバラ系の分類で作品を数えてみました。やる前から判ってはいることなのですが、折り出しを調べる基本形の時よりはずっと大変。上記の混在系があるので本気でやるには、もっと色々と下準備が必要ですが、それでも基本骨格をどういう折り線構成で考えているかを見てみると、

15°	3
22.5°	19
15°, 22.5° 混在	2
ジャバラ	7
ジャバラ、22.5° 混在	4

という具合でした。最近のリアル・長手数作

品の数々は折り図化困難で、実際はもっとジャバラが多いという母集団も取り得るでしょうが、これはこれで1つの分布と見る事が出来るでしょう。22.5°がやはりメジャーであることは確かです。もう少しだけ詳しく見てみると、22.5°に分類した中には所々で自由角(最近、神谷哲史さんがよく使う「言葉」)を取り入れているものも多く、「普通」と言えば22.5°+自由角かも知れません。実のところ、22.5°系にしろ、15°系にしろ自由角を使わないことを同時に意識している作品が、むしろ1つのカテゴリーと言える面もあるのです。15°系を強調することは、自由角を使わない22.5°系作品をクローズアップする作用もあります。

西川誠司 Nishikawa Seiji

挑戦

第50回

ニジイロクワガタII

Phalacrognathus muelleri II

シッポ・マボナ

Sipho Mabona

Created: 2007.05

Paper Size: 40×40cm

Length: 11cm

訳: 羽鳥公士郎



私がこの作品を創作しようと思ったのは、ブライアン・チャンさんのDorcus curvidens (オオクワガタ)の比率を実物と照らして確かめようと、甲虫について日本語で書かれたウェブサイトを見ていたときです。そこでニジイロクワガタの写真を見かけ、その美しさに胸を打たれると同時に、これがまだ折り紙の世界に存在していないという事実には驚かされました。このように美しい昆虫がまだ一度も折られていないということは滅多にないことなので、私はすぐ創作にとりかかりました。

まず、円領域配置法を使って展開図を考えてみましたが、どうしてもうまくゆきません。そこで、ほかの作品で参考になるものを探しているうちに、ロバート・ラングさんのStag Beetle BP (クワガタムシ)が目にとまりました。私はこの作品の展開図を研究し、しまいには実際に折ってみました。このことが、ボックスブリーツの概念を理解するのに非常に役立ち、その結果、私は正確な比率と昆虫の胴体の分節とを折り出すことができました。これを少し変更すれば、ニジイロクワガタが創作できることに気がつきます。周囲に2マス分の長さを追加し、64等分にするので、格子の折り目を正確につけるのが簡単になるのに加え、爪を3本にするなど各部に詳細な表現を追加することができました。そうしてできたのがPhalacrognathus muelleri (ニジイロクワガタ)Iです。

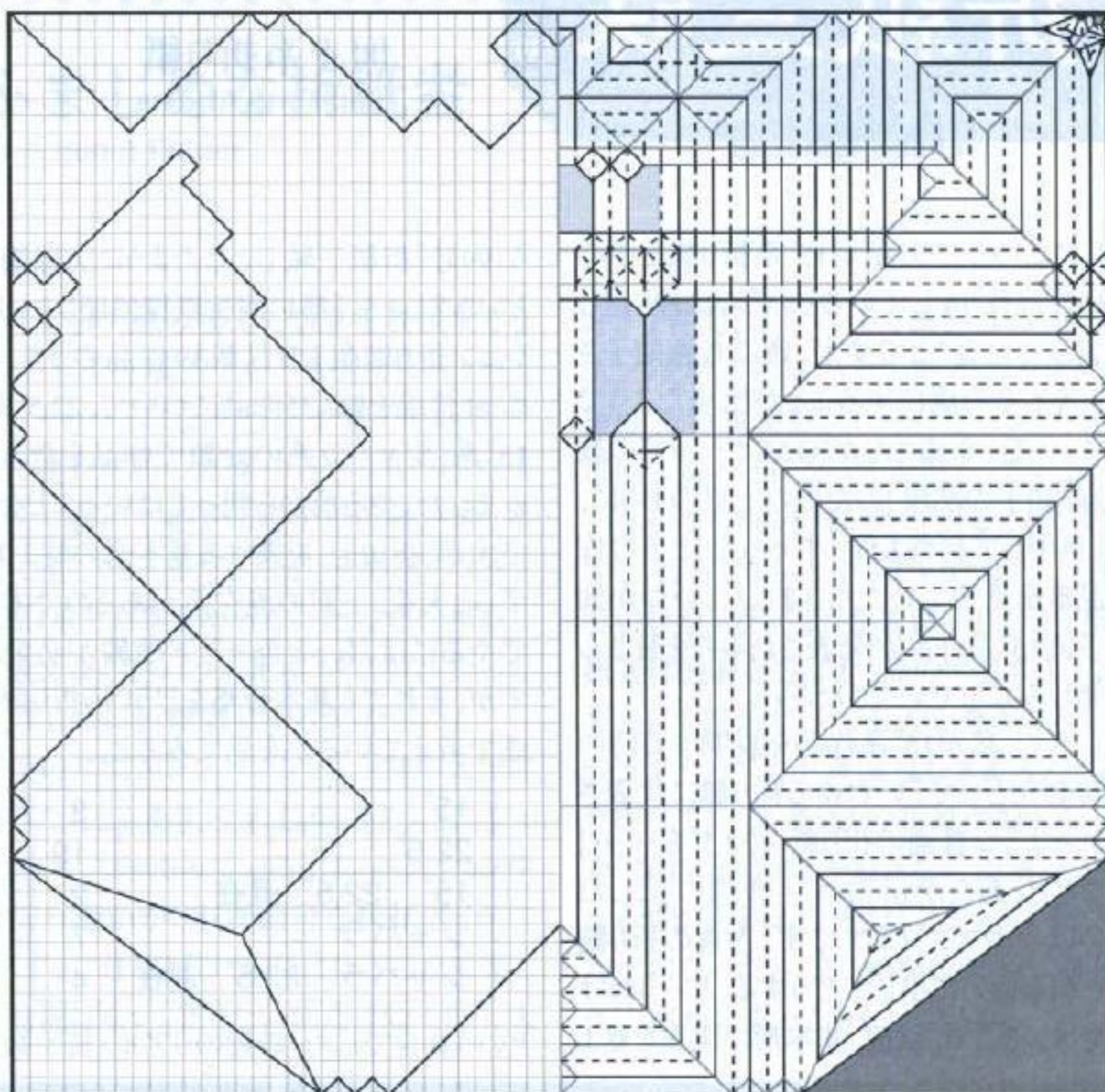
このクワガタの大きな特徴は前脚のトゲなので、私はこれを折り出したいと

思いました。バージョンIでもそれを目標にしていたのですが、それには折り紙の創作をさらに学ぶ必要がありました。結局、脚をわずかに短くすることでカドを追加し、それを使ってトゲを折ることができるということが分かりました。

私がラングさんのStag Beetle BPを折ったときと同じように、この作品を折ることが、ボックスブリーツによる昆虫の創作法を理解する手助けになることを願っています。

用紙について

写真の作品は、Origamido (編注: マイケル・ラフォース氏の折り紙スタジオ)が制作した40cm四方の紙にメチルセルロースを塗ってウェットフォールディングをしています。この紙が手に入らない場合は、できるだけ薄く強い紙をおすすめします。



File-25

ヤネッケ & ピーター・ウェリンガ

Janneke Wielinga-Dolfien and Pieter Wielinga



ヤネッケ・ウェリンガ・ドルフィン(Janneke Wielinga-Dolfien)(右):ピーター・ウェリンガ(Pieter Wielinga)(左):オランダ・レリスタッド在住。ピーター氏は現在オランダ折り紙協会の会長を務める。

■折り紙はどのようにして始められたのですか。

ヤネッケ(以下ヤ):1989年、何か新しい事をしたいと考えていたときに、新聞で折り紙のコースの案内を見つけて始めました。それから今まで続けています。

ピーター(以下ピ):1990年に彼女が折り紙のコンベンションに参加する事になったので、一緒に旅行をして、彼女は折り紙を、自分は別のことをしようと考えていたのですが、彼女に「2人で折り紙のコンベンションに参加するか、それとも旅行をやめるか」と言われてしまいコンベンションに参加することになりました。そしてその時に初めて折り紙を折りました。

■ピーターさんはオランダ折り紙協会(Origami Sociëteit Nederland)の会長になられたそうですが、会に参加したのはいつ頃ですか。

ヤ:折り紙を始めたのが1989年で、会に参加したのは1990年。折り紙を始めてすぐに会員になっています。

ピ:私はもっと最近で、2年前です。当時私たちの会はいくつかの問題を抱えていました。そのころ私は仕事をリタイアしたので、会のために何か出来ないかと考え、会の活動を手伝う事にしました。そうしているうちに、今年の総会でOSNの会長に選ばれました。でも私は会にとってはまだ新人なんですよ。



BOSのコンベンションの懇親会でカノンを指揮する二人、会場は大合唱となった

■いろいろなコンベンションに参加していますが、合計で何回くらいになるのでしょうか。

ヤ:これまでドイツ、フランス、イギリス、オランダ、イタリア、スイスのコンベンションなどに定期的に参加しています。また、ドイツの小さな会にも参加していてこれが年に数回ありますので、だいたい1、2ヶ月ごとに1回くらいでしょうか。

ピ:合わせると80~90回くらいになると思います。時々多すぎるのではと感じます。なかなか家にいられない(笑)。でも続けて参加していると、知り合いも増えてきて、あの人はまだ元気だとか、年をとったなとか、まるでお互いが折り紙を通じた大きな家族のように感じます。私たちはそれを楽しんでいます。

■印象に残っているコンベンションはありますか。

ヤ:リキさん(Rikki Donachie:英)にチョウを習ったパリのコンベンションです。とても寒かったのですが、素晴らしい作品に出会えたのでとても良い思い出になっています。また、NOA(日本折り紙協会)のシンポジウムは、それまで日本に行っていた、日本の愛好家に会ってみたいと考えていたので印象に残っています。

■リキさんのチョウについて、また他に気に入っている作品があれば教えてください。

ヤ:私はリキさんのチョウをととても気に入っていて、いろいろなところで教えています。NOAのシンポジウムに参加した時もチョウの講習をしたのですが、そうしたら月刊『おりがみ』の展示の写真の中にリキさんのチョウを見つけました。また、OrigamiUSAのコンベンションで講習したときは、マーク・ケネディさんがそのチョウのピンバッジをたくさん作ってBOSに送って

きたんです。その事をリキさんに伝えたら、とても喜んでくれて、「自分の作品が広まって、もし誰か私を知らない人が私にチョウを教えてくれたらそれは素晴らしいことだ」と言ってくれました。

ピ:私はユニット作品が好きです。私は折り紙がとても上手い訳ではないので、難しい作品を折るのは大変なのですが、ユニットは理解できればたくさん折って楽しむ事ができます。例えば、メッテ・ペデルソンさんのリングはティーバッグの紙を使って折っているのですが、時々デザインが変わるので常に新しい模様になります。

■今後どういった活動をしていきたいですか。

ヤ:オランダにもっと折り紙を広め、オランダ折り紙協会を安定した会にしていこう事です。

ピ:私たちの会には現在1200~1500人くらいのメンバーがいますが、高い年齢層の人が多くなってきています。会を続けるにはリフレッシュも必要です。JOASは若い人が多いと聞いていますが、とても良い事だと思います。

また、いろいろな場所へ旅をしているいろいろなコンベンションに参加してみたいです。リタイアして時間はありますし、JOASなど参加してみたいコンベンションもたくさんあります。



リキさんのチョウ

チョウの講習をするヤネッケさん



Rabbit Ear つまみおり

Information



BOS40 周年記念 コンベンションレポート

報告:やまぐち真

9月6日～9日にBOSコンベンション40周年記念大会が開催された。病み上がりだったので、期間中、誰かに迷惑をかけてしまうのではないかと心配しながらの参加だったが、何ごとも無く楽しむことができた。

さすが40周年記念大会というだけあって、懐かしい顔が勢揃いしていた。8月の探偵団コンベンションで講演をしてくれたジョーン・ホームウッドさん(現BOS会長)、今号の本誌に「過去の折り紙に学ぶ」を執筆してくださったデビッド・リスターさん、それにデビッド・ブリルさん、今回の招待者であるエリック・ジョワゼルさん、ロバート・ラングさんなどお馴染みの作家も揃い、豪華な顔ぶれであった。3年ぶりに会ったヘルマン・バン・ゲーベルジャンさんには、動かして遊べる面白い作品を紹介してもらった。いずれ誌面で皆さんに紹介する予定なのでお楽しみに。まだまだ皆さん御存じの方々が大勢参加されていた。

日本からの参加者は主ところで今回のスペシャルゲストの川村みゆきさん(川村さんは11月のイタリアコンベンションにも招待されている。レポートは次号)、布施知子さん、おりがみはうすの神谷哲史など。他にも何人かのご婦人方が参加され、それぞれ教室を受け持ち、交流を図っていた。

コンベンションは折り紙を楽しむだけでなく、魅力ある折り人との出会いあり、友との再会もありと、楽しいひと時を過ごせる場所でもあると再認識した大会だった。(各写真は敬称略)

マリケ・デ・ホープ
Marieke de Hoop
折り紙を使った寸劇
Orikadabraで有名



▲デビッド・ブリルと筆者 David Brill, Yamaguchi Makoto



▲(左から)エドウィン・コリー Edwin Corrie、ニック・ロビンソン Nick Robinson、ロバート・ラング Robert Lang、ジャン・ポーリッシュ Jan Polish



▲ジョーン・ホームウッド Joan Homewood BOS 会長



▲デビッド・リスター David Lister BOS副会長



▲ジョン・スミス John Smith BOS副会長



▲ミック・ガイ Mick Guy BOS事務局長



▲マーク・ロビンソン Mark Robinson



▲ロビン・メイシー Robin Macey BOSの写真係



▲マックス・ヒューム Max Hulme 1970年代から多彩な作品を創作している



▲マーチン・ウォール Martin Wall 「本」などの作品で知られる



◀ヘルマン・バン・ゲーベルジャン Herman van Goubergen ベルギーから参加
お馴染みの顔ぶれ。(左から)ジュン・サカモト June Sakamoto ジーン・バーデン・ジレット Jean Baden-Gillette アン・ラビン Anne LaVin



◆ Folding Australia 2007 レポート

報告: 萩原 元

11月3・4日、オーストラリアで2度目の国際コンベンション“Folding Australia 2007”が開催されました。8カ月の準備期間を経て開かれたこの催しには、国内外の折り紙愛好家が集まりました。メルボルンに留学中の私は、現地メンバーとしてこれに参加しました。

私がメルボルンの折り紙グループ“Paper Crane”と初めて出会ったのは、昨年5月のこと。日本を立つ直前に、インターネットで留学先にあるこのグループの存在を知り、1カ月が過ぎて新しい生活に慣れ始めた頃、電車を乗り継ぎ地図を片手に彼らの月例会に参加しました。グラフィックデザイナーのマット・ガーディナーさんを中心とする約10名の常連メンバーは、私のことを温かく迎え入れてくれました。

コンベンションでは、作品展示、講習、ゲ



▲ゲストチャレンジに挑戦中のルイスさん(左)、木下さん(中央)、ラフォースさん(右)、後ろにいるのはジョナサン・バクスターさん

ストによる講演、どれも素晴らしかったのですが、最も盛り上がったのは昼食時に行われた2つのスペシャルイベントでした。

1つ目はスペシャルゲストチャレンジ。主催者の出す3つのお題をそれぞれ8分で即興折りするというものです。参加者は特別ゲストの日本の木下剛さん、アメリカのマイケル・ラフォースさん、そしてオーストラリア代表のギャレス・ルイスさん。お題は「オーストラリア大陸」、A4の紙を使った「オーストラリアの動物」、そして「マネーフォールディング」。オーストラリア紙幣はプラスチックな



▲金のカップを手にするガーディナーさん(左)とラフォースさん(右)



▲参加者で記念撮影

ので非常に折りにくく、苦戦していました。結果はお題1が木下さん、お題2、3がマイケルさんの勝利となりました。

2つ目はメルボルン・ペーパー杯。数日後に行われるオーストラリア最大の競馬大会に因み、ぴょんぴょんかえるでレースをしました。大人から子供まで多数の人が参加し、決勝戦を制したラフォースさんにはチョコレートと木下さん作の金のカップが授与。木下さんはレース開始直前にカップ作りの命を受け、レース中ずっと折っていました。

こうして、2年後開催予定のFolding Australia 2009での再会を誓い、折り紙の祭典は幕を閉じました。より詳しく様子を知りたい方は、拙いものですが私のブログ「おりがみBOY in Australia」をご覧ください。

URL <http://genorigami.blog121.fc2.com/>

◆ 中日応援企画「パフォーマンズ折り紙」報告

報告: 各務 均

10月27日土曜日、日本シリーズの開幕にあわせ、名古屋栄のラシックにて、中日ドラゴンズの応援のための巨大折り紙竜を製作するイベントが開かれました。竜を創作した川畑文昭さんと、お手伝いとして岡島正彦さん、村木厚紀君と自分が参加しました。

イベント当日、お店が開店する前から作業は始まりました。巨大折り紙竜に使う紙はクラフト紙。まずはロールから長さ約12メートルを切り出し、そして基準となる折り筋をつけていきます。イベントの準備をしていたお店の人たちは、度々こちらの作業を見に来ていました。普段から折り紙をしない方には珍しい光景だったようです。

折り筋をつけたらいいよ鱗を折り始めます。巨大折り紙竜というぴったりの題材、そしてこの作品の最大の見せ場となる鱗ですが、本当に地道な作業です。お店がこの頃に開店したのですが、ほとんどの人はちらっと見ただけで素通りでした。一応「パフォーマンズ折り紙実演中」という電光掲示板もあったのですが……。

途中、尾の部分の鱗の蛇腹を一段間違えていたためその部分だけ全部解くという事態もありましたが、何とか昼過ぎには鱗を折り上げることができました。

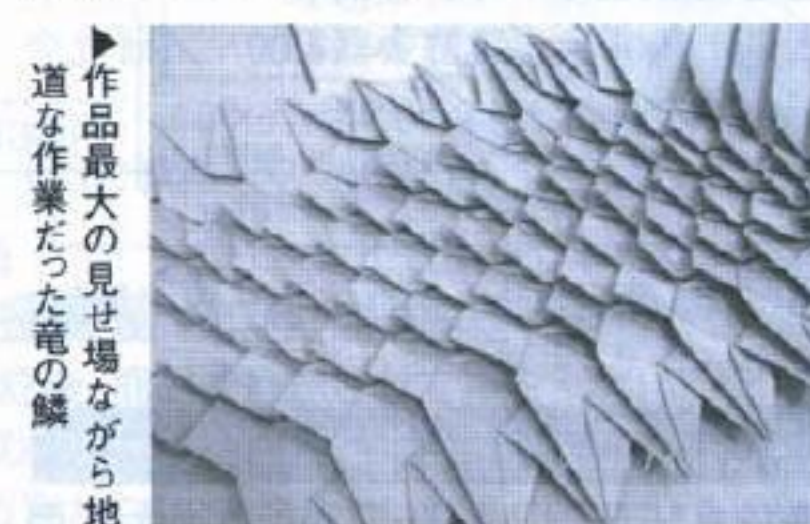
昼食をはさんで作業再開。ここからは両面テープやボンドによる補強の作業も入ってきます。巨大折り紙という性質上、補強の問題が生じます。今回は最終的に中に針金と綿を入れて形を整えていきました。

昼過ぎからはお客さんが増え、見物人も増えてきました。このイベント、竜が完成した後で川畑さんの折り紙教室が行われることになっていて、そこで使う簡単な竜の頭の折り図とそのための紙(青色で角のところだけ黄色になるようにプリントしてある、中日のマーク入り)は、周囲に予め置いてあって、机で折れるようになっていました。始めは誰も折ろうとしなかったのですが、人が増えるにつれて折り始める人も増え、一時は机が足りなくなって、床で折っている子達もいる程の盛況となりました。見学者の殆どの人が折っていたのではないのでしょうか。

巨大折り紙も大分小さくなり(といっても長いですが)、4人も要らなくなってきたところ

で、後の作業は川畑さん、岡島さんに任せ、自分と村木君は、折り方が分からなくなった人たちを教えてまわりました。

補強や仕上げも終わって、最後に川畑さんが完成式で目を折りました。何とか時間内に終わって安心しました。その後の折り紙教室も多くの方が参加してくれて、しばらくの間は賑わっていました。



▶作品最大の見せ場ながら地道な作業だった竜の鱗

▶ほぼ完成した形

◆2008年夏のコンベンションに向けて 折り図募集とコンテストテーマ決定のお知らせ

来年のことを言うとなんとやらと言いますが、年に一度の折り紙のお祭り・折紙探偵団コンベンションに向けて、ふたつのお知らせです。

まずは、世界中の折り紙愛好家が楽しみにしている『折紙探偵団コンベンション折り図集』の折り図の募集です。まだまだ時間はありますが、準備は早いことに越したことはありません。夏はすぐにやって来ます。6月の締め切りに合わせて、いまから作品を準備して下さるようお願いいたします。

原稿の規定については「折り図集投稿マニュアル」をウェブサイトで配布していますのでご覧ください。

<http://origami.gr.jp/>

Yoshino Issei Fund invites foreign origamists to our conventions.

Yoshino Issei Fund, named in commemoration of the talented origami designer, aims at exchanges of ideas with the world's origamists, supported by contributions from Tanteidan members, and we have invited foreign origamists to our conventions.

This time, we would like to invite two foreign origamists to the 14th convention in August 2008.

We are accepting candidates until the end of the April. We accept both recommendations and direct applications. The selection committee will decide who we invite and announce the conclusion the May in the magazine, our web site and directly to the winners. The members of the committee are Kawasaki Toshikazu, Kawahata Fumiaki, Kawamura Miyuki, Tateishi Koichi,

東京友の会 ※折り紙は各自持参

会場=JOASホール／参加費=500円(中学生以下300円)／講習会=14:00～／研究会=16:00～

●12月1日(土)／JOASホール／講師:辻和之／作品:エサをとる犬

●08年1月5日(土)／JOASホール／講師:未定／作品:未定

東海友の会 ※折り紙は各自持参

●12月15日(土)会場=名古屋芸術大学 西キャンパスG棟204・205／参加費=大人500円(中学生以下は200円)／時間=13:00～16:30／G204講師:近藤哲也、水野健／作品:合わせコマ、クビナガリュウ／G205講

そして、前回から始まった折り紙コンテスト。応募方法や選考方法などの詳細は追って誌面などで伝えますが、テーマを決めました。準備期間も万全ですので、奮っての応募を期待します。3つの部門があり、ひとりでそれぞれの部門への応募が可能です。アイデアと技術、個性に満ちた作品を待っています。

・おりがみはうす賞 課題:なし

アイデアにあふれた作品をどうぞ。シンプルなものも歓迎します。

・干支折り紙コンテスト 課題:うし

干支作品は、毎年続ける予定です。

・2008テーマ折り紙コンテスト 課題:空(そら)

Tsuda Yoshio, Nishikawa Seiji, Hatori Koshiro, Hojyo Takashi, Maekawa Jun, and Yamaguchi Makoto.

The selected guests must attend the 14th convention and instruct some models.

They must also supervise an exhibition at Gallery Origami House.

Yoshino Issei Fund offers each of them up to 200,000 yen for traveling and staying expenses. We also advise on their stay.

Send us your application with the candidate's name, age, address, telephone number, fax number, e-mail address, and some works (photographs of the model, diagrams, or books).

Yoshino Issei Fund

c/o Gallery Origami House

1-33-8-216, Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0001, JAPAN

Email: webman@origami.gr.jp

師:加藤美津枝／作品／蘭部式ユニットによる多面体。

関西友の会 ※折り紙は各自持参

●12月22日(土)／会場=神戸女学院大学 L-10教室(文学館1階;今回は長岡京ではありません)／13:00～16:00／参加費=高校生以上500円／講師:立石浩一／作品:Compass Rose Cube(Valerie Vann作)

静岡友の会 ※折り紙は各自持参

●08年1月13日(日)会場=「紙友館ますたけ」増武ビル3F／参加費=500円／時間=10:30～12:00／問い合わせ:054-254-4541(増武内 山口16～20時)

第9回折紙探偵団関西 コンベンション日程決定

毎年5月に行われている折紙探偵団関西コンベンションの日程が決まった。また、今回のゲストはクローズアップでも紹介しているフランスのエリック・ジョワゼル氏。細部まで作り込まれた人物造形等の作品をじかに見ることができる貴重な機会となるだろう。詳しい内容や申し込み案内は次号に掲載予定。

●会期:2008年5月5日(月)・6日(火)

●場所:神戸女学院大学文学館

●スペシャルゲスト:エリック・ジョワゼル(Eric Joisel)

JOASホール今後の予定

◆12月9日(日)「ある折紙作家の教室」

神谷哲史／参加費=3,000円

／11:00-16:00／講習作品「カブトムシ」

◆12月15日(土)「知子の部屋」布施知子／

参加費=2,500円／12:30-16:00

◆08年1月19日(土)「知子の部屋」布施知子

／参加費=2,500円／12:30-16:00

■参加の申し込みはFAX(03-5684-6080)か、メールinfo@origamihouse.jp宛でお願いします。これをできない場合は電話でも受けます。上記の予定は講師の都合により変更される場合があります。事前にお問い合わせください(03-5684-6040)。

編集後記

■布施さんのエッセイに出てくる方達は私も昔から知っている方達だ。■時が流れていくのが分かる。■時が流れていくと同時に老いていくのも分かる。■ついこの前まで考えたこともなかったことだが、この頃では老いを感じるようになった。■老いを感じるようになったからではないが、若い力に魅力を感じ、素敵だと思う気持ちが強くなった。■偉そうなことを言う訳ではないが、残していくものはあるのだろうか。■そうだ、国際的な世界になってきているORIGAMIを若い力に伝えていこう。(や)

ホームページ

折紙探偵団 <http://www.origami.gr.jp/>
団員パスワード/Pyramid(大文字・小文字別)

折紙探偵団

2007年11月25日発行 第18巻4号通巻106号
発行所/日本折紙学会

〒113-0001

東京都文京区白山1-33-8-216

Phone & Fax / 03-5684-6080

発行人/前川 淳

編集人/山口 真

編集スタッフ/松浦英子・神谷哲史

デザイン/おりがみはうす

翻訳/立石浩一

発売元/おりがみはうす

●本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

定価635円(本体605円)

おりがみはうす商品案内

website = <http://www.origamihouse.jp/>

E-mail = info@origamihouse.jp

このページの商品の取扱いはずべておりがみはうすです。

日本折紙学会とは別になります。

ATTENTION! : This advertisement is for Japan-internal use only.
For overseas shipment, please refer to the OrigamiHouse Web Site.



第13回折紙探偵団 折り図集vol.13

日本折紙学会 編/2,000円/送料420円
B5判/全256頁/39作品収録

好評発売中!

世界の新作折り図ばかりを集めました。第6回TVチャンピオン決勝戦で神谷氏が折った「ライオン」、本誌「折紙探偵団」に展開図が発表された小笹氏の「翼のあるライオン」、昨年の招待者ニコラス・テリー氏の「ネズミ」、モズリー氏の動くユニット「バルサー」収録。

書籍名/著者・編者	価格(税込)	送料	内 容
神谷哲史作品集 神谷哲史 著 山口 真 編 立石浩一 訳	4,000円	国内一律 1冊 420円 (梱包込)※ 複数冊は 異なります	B5判/全228頁/カラー口絵4頁/19作品収録 超複雑系折り紙の創作活動8年間の集大成。
西川誠司作品集 西川誠司 著 山口 真 編 立石浩一 訳	3,200円		B5判/全196頁/カラー口絵4頁/32作品収録 シンプルからコンプレックスまで幅広く楽しめる本
折紙図鑑「昆虫1」 川畑文昭・西川誠司 共著 山口 真 編	3,100円		B5判/全196頁/カラー口絵 4頁/17作品収録 '93~'94年の「昆虫戦争」で誕生した作品の記録
折紙図鑑「昆虫2」 ロバート・J・ラング 著 山口 真 編 立石浩一 訳	3,500円		B5判/全196頁/カラー口絵4頁/18作品収録 初心者お断り、世界で一番難しい昆虫折り紙の本
折り紙色紙百花 田中具子 著 山口 真 編	2,500円		B5判/全120頁/カラー口絵8頁/31作品収録 色紙に貼り込んで飾る花の折り紙作品集
面~The Mask~ 布施知子 著 山口 真 編	3,300円		B5判/全200頁/全27作品カラー写真紹介 作者がユニットに出会う前の、お面だけの作品集
空想おりがみ 川畑文昭 著	2,900円		B5判/全180頁/カラー口絵4頁/18作品収録 1995年6月初版発行の恐竜と空想動物の本
第12回折紙探偵団 コンベンション 折り図集vol.12 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外から集まった秀作52作品を収録
第11回折紙探偵団 コンベンション 折り図集vol.11 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外から集まった秀作55作品を収録
第10回記念 折紙探偵団 国際コンベンション 折り図集vol.10 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外から集まった秀作50作品を収録

※第1回~第9回の折り図集は全て絶版です

※書籍は郵便の「冊子小包」で発送しております。送料には梱包材代が含まれています

限定版 折紙探偵団Tシャツ	折紙探偵団のロゴが入ったTシャツ。 色は黒のみで布は厚手。	XS, S, M, L, 各サイズ 定価 2,000円/2着まで送料500円 ※数に限りがありますので、ご注文の際には在庫を確認してください。
----------------------	----------------------------------	--

商品名	価格(税込)	送料	内 容	「折紙探偵団」専用ファイル
恐竜柄おりがみ用紙	1,000円	国内一律 1~2セット 440円	35×35cm/10枚入/70kgの 洋紙に細かい恐竜模様を印刷	変形B5判/箔押しロゴ入/雑誌 「折紙探偵団」1年分(6冊)収録用 1冊750円
恐竜柄おりがみ用紙 折り図つきセット	1,200円		恐竜柄おりがみ用紙+ ドラゴン(北條高史作)の折り図	送料: 1冊250円(合計1,000円) 2冊350円(合計1,850円) 3冊470円(合計2,720円)

※紙製品は定形外郵便で発送しております(書籍とは別発送になります)。送料には梱包材代が含まれています

冊の送料	書籍2冊の送料は530円/書籍3冊の送料は670円(例外を除く・下記参照)
送料	例外:「折り図集」又は「色紙百花」だけを3冊の場合(例:折り図集9,10と色紙百花1冊)のみ530円

上記以外の場合はお問い合わせください/書籍と紙製品は別発送となりますのでご了承ください

只今制作中 発行日は未定です。気長に待っていて下さい

小松英夫折紙作品集/小松英夫・著 サブライ図をお楽しみに
北條高史折紙作品集/北條高史・著 あの名作の折り図も掲載予定
折紙図鑑「犬」/佐野康博・著 犬の折り紙第一人者の作品集

本ページに記載していない商品は、現在取り扱っておりません
ご送金頂いてもお送りできませんのでご注意ください

商品の申し込み方法

冊数と料金をよくお確かめの上ご注文ください。

先に**郵便振替**か**現金書留**で料金(商品価格+送料)をお送り下さい。入金を確認後、商品を発送させていただきます。ご希望の商品名と連絡先の記入(郵便振替の場合は振替用紙の「通信欄」に記入)をお忘れのない様お願いします。

郵便振替番号 **00120-9-715400**

加入者名 **おりがみはうす**

※折紙探偵団の購読申込みとは別の口座です。くれぐれもご注意ください。

※郵便振替用紙は郵便局備え付けのものをご利用ください。

※現金書留の場合は左記の住所へお送りください。

※商品のお届けは通常、送金から約1週間~10日です(お盆・年末年始等を除く)。



ギャラリー **おりがみはうす**

〒113-0001 東京都文京区白山1-33-8-216

TEL:(03) 5684-6040 FAX:(03) 5684-6080

E-mail: info@origamihouse.jp 10時~18時 日・祝休

■商品を複数ご注文の場合は、送料が変わってきます。電話又はメールでお問い合わせください。

広告有効期限:2008年1月25日

遊べる!

デザインの入ったおりがみで作る

英訳付き折り方説明書入り With Annotations and Instructions in English

郷土玩具のおりがみ

郷土玩具の楽しさがそのまま
おりがみになりました。

¥300

(税抜き)



赤ベコ(あかべこ) Akabeko the Red Bull



竹蛇(たけへび) A Bamboo Snake



達磨(だるま) Daruma Doll



張子の虎(はりこのとら) Papier-Mâché Tiger



獅子頭(ししがしら) The Wooden Lion's Head



株式会社トヨー

ホームページ <http://www.kidstoyo.co.jp>

●写真は印刷ですので実際の商品とは色は違う場合があります。
※表示価格には消費税は含まれておりません。※内容・デザインは一部変更になることがあります。
本社 〒120-0044 東京都足立区千住緑町2-12-12 TEL03-3882-8161
大阪支店 / 名古屋営業所 / 福岡営業所 / 札幌出張所 / 松山出張所